

## SGH報告書 「はじめに」

同志社国際中学校・高等学校 校長 川井 国孝

2018年度は本校がSGHに指定されてから4年目となる。2015年度に入学してきたSGH第1期生は、3年間の学びの結果、ささやかではあるがグローバル・イシューの解決に向けた自分たちの提言の発表まで持つて行くことができた。そして現在は大学に進学し、それぞれの学びの中でSGHの経験をさらに発展させている。グローバル・イシューそのものは非常に大きな課題であり、高校生が簡単に画期的な解決策を出せるようなものではない。しかし、グローバルな深刻な課題に真剣に取り組み、解決策を考えることで、自分たちの身近なところにもグローバル・イシューに繋がる問題が存在していることに気付けるようになってきた。そして自分たちに何ができるかを考え、高校生にもできるところから、実際に行動を起こすことができるところまで成長した。彼らが今後大学の学びで、これをより発展させて、将来グローバルなステージで世の中のために活躍してくれることを心から願っている。



SGHの取り組みは汎用性の高いカリキュラム開発が大きな目的であるため、本校では構想調書に示した目的を共通に持ちながらも、指導順序や指導方法は各学年により違っている。SGH関係の授業については担当者が一つの学年を持ち上げることで、学年毎にそれぞれ継続して3年間指導できるようにしている。そのため2期生である現在3年生の海外フィールドワークは3月に実施し、1期生とは違う形でのアプローチになっているので、学年の特長を活かした政策提言をまとめてくれることを期待している。

また、昨年触れたことだが、海外へのフィールドワークが行われることや、本校を訪問する留学生との交流、そして国際機関への提言をすることも想定されているので、英語力を高めたいという意欲は学校全体に高まっている。The Global Enterprise Challenge や The World Scholar's Cup など、英語を使うイベントへの参加生徒数も増加している。それに伴い、これらのイベントの世界大会にチャレンジする生徒が増えてきた。これは、そういう生徒の動きを負担が増えるにもかかわらず、しっかりサポートしてくれる献身的な本校教職員の存在に支えられていることは言うまでもない。

SGHに指定されている、という恵まれた環境を活用し、これからも生徒達にとって有効な学びの仕組みを、学校全体に拡げて行きたい。

## 2018年度（平成30年度）SGH報告書目次

はじめに	校長 川井国孝	1
ロールモデルを求めて	SGH研究開発委員長 山本真司	4
研究開発完了報告書		6
2018年度 総括と展望		14
3年間のGUS講座を振り返って		22
I スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要		33
II 実施報告		35
1 文科省提出概念図		35
2 開発カリキュラム		36
2-1 2017年度開発カリキュラム GUS-B=Global Understanding Skills Basic（第1年次）		36
2-2 2017年度開発カリキュラム GUS-I=Global Understanding Skills I（第2年次）		37
2-3 2017年度開発カリキュラム GUS-II=Global Understanding Skills II（第3年次）		38
3 研究開発の実際		39
3-1-1 GUS-B「第一回 Global Understanding Skills Basic 講座」		40
3-1-2 GUS-B「ループワーク「身近なグローバル 이슈」		41
3-1-3 GUS-B「MDGS から SDGS へ」		41
3-1-4 GUS-B「Rio+20でのウルグアイ大統領のスピーチ」		42
3-1-5 GUS-B「Rio+20でのウルグアイ大統領のスピーチ 振り返り」		43
3-1-6 GUS-B「環境問題総論ーそしてエネルギー問題へ」		45
3-1-7 GUS-B「環境経済学」		46
3-1-8 GUS-B「包装法が社会を変えるードイツでの環境産業革命ー」		47
3-1-9 GUS-B「フライブルク・イム・ブライスガウ」		48
3-1-10 GUS-B「環境モデル都市 飯田」		49
3-1-11 GUS-B「ドキュメンタリー映画「Tomorrow パーマネントライフを探して」		50
3-1-12 GUS-B「「問題を解決する」・・・その手法を学ぶ」		51
3-1-13 GUS-B「パネルディスカッション これまでの振り返り」		52
3-1-14 GUS-B「学校のゴミ問題解決のためのロジックツリー」		53
3-1-15 GUS-B「問題解決 プレゼンテーションに向けて」		54
3-1-16 GUS-B「「学校のゴミ問題を解決しよう」 各グループのプレゼンテーションと評価」		54
3-1-17 GUS-B「「学校のゴミ問題を解決しよう」 各クラス代表によるプレゼンテーション」		55
3-2-1 GUS I「第一回目 Global Understanding Skills I お互いを知る」		58
3-2-2 GUS I「バスはまってくれない (Jigsaw 法)「問題解決トレーニング」		58
3-2-3 GUS I「ドキュメンタリー映画『Tomorrow』を振り返る」		60
3-2-4 GUS I「『Tomorrow パーマネントライフを探して』 振り返り」		61
3-2-5 GUS I「What is the Global Issue 「Speech by Mujica in the Rio+20」		62
3-2-6 GUS I「Rio+20 地球サミットでのウルグアイ大統領のスピーチ 振り返り」		63
3-2-7 GUS I「「水」を中心に世界の関連を読み解く Virtual Water -仮想水-」		64
3-2-8 GUS I「Blue Gold -狙われた水の真実」		65
3-2-9 GUS I「「水」について 振り返り」		66

3-2-10	GUS I 「1 学期振り返り GUS を選択して」	67
3-2-11	GUS I 「レポート返却とアドバイス」	68
3-2-12	GUS I 「プラスチックゴミについて考える ー新聞記事からー」	68
3-2-13	GUS I 「予言されていた環境問題 ～風の谷のナウシカを視聴して～」	69
3-2-14	GUS I 「インクルージョン 共生社会を考える ～「聲の形」を視聴して～」	70
3-2-15	GUS I 「「ドイツ フィールドワーク報告」 参加者によるプレゼンテーション」	71
3-2-16	GUS I 「次年度へ向けてアイデアを出し合おう」	72
3-3-1	GUS II 「第一回 Global Understanding Skills II」	76
3-3-2	GUS II 「ドイツ・デンマーク フィールドワーク報告とまとめ」	77
3-3-3	GUS II 「学校の『環境』改善案を」	78
3-3-4	GUS II 「学校への提言」	78
3-3-5	GUS II 「学校への提言 学校環境改善案の決定」	79
3-3-6	GUS II 「プレゼンテーション 都市の環境政策」	80
3-3-7	GUS II 「高校最後の夏休み「課題」」	81
3-3-8	GUS II 「D E R F 本格的に始動！学校への提言を具体的にまとめる」	82
3-3-9	GUS II 「学校食堂 SHIDAX さんへの提言「R e e l」」	83
3-3-10	GUS II 「提言を振り返る」	84
3-3-11	GUS II 「各機関への提言シミュレーション」	85
3-3-12	GUS II 「まとめ「提言」」	86
3-4-1	GUS-B 講演「グローバルに生きる時代を考える」	96
3-4-2	GUS-B 講演「環境先進国 ドイツ・デンマーク 研修報告」	97
3-5-1	GUS I 講演「グローバル・セミナー「グローバルに生きること」」	98
3-5-2	GUS I 講演「グローバル・セミナー「お客様と仲間の笑顔を最高の歓びに」」	99
3-5-3	GUS I 講演「ジャーナリストの眼「国際人として生き抜く 21 のチカラ」」	100
3-5-4	GUS I 講演「グローバル企業と商品「グローバルなビジネスの現場から」」	101
3-5-5	GUS I 講演「ジャーナリストの眼「中東イラン 報告」」	102
3-5-6	GUS I 講演「環境セミナー「未来への翼」」	103
3-5-7	GUS I 講演「キャリアセミナー「対立と協調から語るコスモポリタン」」	104
3-6-1	GUS II 講演「低炭素社会に向けた国際社会の動き OECD を題材に」	105
3-6-2	GUS II 講演「京田辺市の環境政策」	106
3-6-3	GUS II 講演「気候変動対策を織り込んだプロジェクト”0”への道」	108
3-7-1	GUS-B フィールドワーク「バイオマスツアー 真庭」	110
3-7-2	GUS-B フィールドワーク「東京 国際機関」	112
3-7-3	GUS I フィールドワーク「F r e i b u r g 生徒たちからのレポート①」	114
3-7-4	GUS I フィールドワーク「S c h w a r z w a l d 生徒たちからのレポート②」	115
3-7-5	GUS I フィールドワーク「B i e l f e l d 生徒たちからのレポート③」	116
3-8-1	その他の活動「The Global Enterprise Challenge 高校生対象 12 時間の国際競技に参加」	122
3-8-2	その他の活動「国際協力開発機構(OECD)特別講座」	123
3-8-3	その他の活動「WORLD SCHOLAR'S CUP 2018 世界大会へ」	124
3-8-4	その他の活動「SGH 全国高校生フォーラム 2018 に参加」	127
3-8-5	その他の活動「研究課題発表会 2019 「SGH 甲子園」に参加」	129
3-9-1	その他の活動「第 4 回 SGH 運営指導委員会」	130
3-9-2	その他の活動「2018 年度 SGH 活動報告会」	131
3-10	国際的資質や態度に関するアンケート・分析結果	133

## ロールモデルを求めて

SGH 研究開発委員会 委員長 山本 真司



旧在天津日本領事館（1940年ころ）

「昭和六年四月拾参日 中華民國臨榆縣山海関デ出生父 柴崎時毛届出在天津日本總領事受附」80年前、父は帰国生として、大阪へ帰国し、実父が抑留されたことで、西宮の祖父の友人夫妻の養子となり帰国します。祖父はドイツのハンブルクに駐在していましたので、私にとって「グローバル人材」のロールモデルは父と祖父なのです。

周知のように、日本は1945年敗戦を迎え、私にとっての「ロールモデル」たちはそれぞれの思いを胸に帰国しました。とりわけ、父はそれまでの「期待される人間像＝

軍人」から解放されて、教職に就きました。むろん、現代の意味での帰国生とは全く異なる種類の海外在住ですが、子どもの私にとって、父と祖父の会話は異国情緒あふれるものでした。そして、私は、1966年に中央教育審議会が答申した〈期待される人間像〉を担う中学生、高校生時代を過ごします。

1年生全員に評価をしない（単位認定のみ）総合的な学習の時間として設置を始めたSGH科目、2年生、3年生連続履修の自由選択科目（評価対象）を設置。限られた時間の中で「グローバルな社会課題を発見・解決し、様々な国際舞台で活躍できる人材（国際機関職員、社会企業家、グローバル企業の経営者、政治家、研究者等）の輩出・急速にグローバル化が加速する現状を踏まえ、社会課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーを高等学校段階から育成する。」この目標を達成するためには、「グローバル・リーダー」<sup>i</sup>ではない教員が教えるのではなく、



天津日本人租界

生きたグローバル人材をロールモデルとして提示することが先決だと考えました。幸運にも、多くのグ

ローバル人材がこの企画に賛同し、生徒たちのために授業や講演をして下さいました。<sup>ii</sup>

後期中等教育で育むべきグローバルな知見はローカルな大人が教えることから生み出されないでしょう。わたしたちができることは、事実の積み重ねから真実への道筋を生徒ひとり一人が見出すための旅を始めるプラットフォームを用意することではないでしょうか。



山海関第一関所跡（最近まで万里の長城東端とされていた）



2018年度ドイツフィールドワークより

i 「国家や共同体の枠組みを乗り越えて、誰もが参加でき。かつ誰もが従わなければならない普遍的な価値、従来（それまでの）ローカルな社会を破棄するものとしてのグローバリズム」（片山杜秀『ペーターベンを聴けば世界史がわかる』、文芸春秋社、2018、p.192）

ii 「幼いころ、フシギでならなかった。遠足のあと、宿題で作文を書いてくる。あるいはクラスで写生に行く。誰もが同じものを見て、同じことをしたはずだ。ところがみんな、ちがったものを書いてきた。それぞれ別の写生になった。さらにまた、気になることがあった。言葉で書こうとすると、あるいは色や線で表そうとすると、やにわに当のものが、ふつうでなくなっていく。それまではなんてこともなかった人や出来事が、エンピツをもって書こうとすると、急に大切な何かに思えてきた。クレヨンをもつと目の前の山や木が、ふだんとちがって見えて来る。だいいち青い山をかこうとして、いくら青いクレヨンをぬっても、ちっとも青い山にならないのはどうしてだろう？」（池内紀「みんな昔はこどもだった」講談社、2018、p.1-2）

(別紙様式3)

平成 31年 3月 15日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 京都府京都市上京区今出川通烏丸  
東入玄武町 601 番地  
管理機関名 学校法人 同志社  
代表者名 理事長 八田 英二

平成 30 年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成 30年 4月 2日 (契約締結日) ~平成 31年 3月 29日

2 指定校名

学校名 同志社国際高等学校  
学校長名 川井 国孝

3 研究開発名

持続可能な社会を担うグローバル人材育成プログラム—環境先進国に学び世界に提言—

4 研究開発概要

1年生必修科目「Global Understanding Skills (Basic)」を設置し、持続可能な社会について環境先進国の実例を学習する。2年生選択科目「Global Understanding Skills I」では、資源の有効活用や循環運用を、海外実地研修で学習する。継続履修する3年生選択科目「Global Understanding Skills II」では、現地での学習を発表し、持続可能社会の実現に向けた方策を、国際機関や地域社会に提案する。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程



業務項目	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
⑥ World Scholars Cup		←————→										
⑦ 「English Elective」 「World English」	←————→											
⑧ 運営指導委員会				←————→								
⑨ SGH 活動報告会											←————→	
⑩ SGH 関係イベント								←————→				←————→
⑪ 国内研修							←————→			←————→		
⑫ 海外研修									←————→			
⑬ 成果の普及	←————→											

(2) 実績の説明

・SGH 対象生徒数 1年生 274名 2年生 41名 3年生 25名

※1年生は教育課程内の必修科目（総合的な学習の時間）として、「Global Understanding Skills (Basic)」を履修し、課題研究に取り組む基礎知識としてグローバルな社会課題や国際連合による持続可能な開発目標（SDGs）について学習し、海外含むこれまでの個別の経験の普遍化を試みる。2年生ではさらに研究を進めることを希望する生徒が「Global Understanding Skills I」を履修し、研究内容である環境先進国の政策事例等について詳細なリサーチを行う。3年生では「Global Understanding Skills II」を継続履修し、政策提言に向けての準備を進める。

※今年度の主な実績は以下の通りである。

- ① 本校の課題研究の特徴として、様々な教科の教員が関わっていることがあげられる。今年度は、宗教科、国語科、社会科、理科、外国語科専任教員が実際に授業を担当している。第二外国語科（中国語担当）教員が新たに加わった。また、関係諸機関と積極的に連携を行い、今年度は、ゲーテ・インスティテュート（ドイツ文化センター、ドイツ連邦共和国を代表する文化機関として、世界各地で活動を展開）教員が「Global Understanding Skills II」に来校した。60年以上にわたり、多くの人々にとってドイツへの窓口の役割を担い、世界90ヶ国と関連をもつ当該機関との語学教育を超えた連携ができたことは、新たな第一歩である。またこの授業はグローバルな視野をもつ高校生が身近な環境問題の解決に取り組む事例として、朝日新聞社、京都新聞社による取材も受けた。
- ② 週に1回1時間の授業として1年生全員が受講している。上述のように、同志社大学の大学院グローバル・スタディーズ研究科から国際連合で持続可能な開発目標（SDGs）策定にも関わった大橋 佑氏による「グローバルに生きる時代を考える」というタイトルで講演を行った。

- ③ 週に1回2時間の授業として、1年生の内容をさらに深化させた学習を行っている。海外研修でも講師を依頼しているドイツで最も著名な環境ジャーナリストの1人であるMIT 池田憲昭氏が日本帰国時に来校し、講演を行い、大変有意義な事前学習の機会となった。OECD スチューデントアンバサダーをつとめた同志社大学法学部森川冬馬ジン氏が来校して講演を行い、OECD の概要についても説明した。
- ④ 週に1回2時間の授業として、3年間の集大成となる授業を行っている。3年間の授業内容について、詳細に成果報告書を作成し、今後に生かす予定である。今年度はこれまで学んできたことをもとに、アウトプットをすることに注力し、具体的には構想調書に記載した京田辺市、京都市、OECD に対して提言を行った。また提言先の国際機関、自治体から担当者を講義に招聘し、まず、現状の取り組みを理解し、海外研修で見てきた政策との比較等について率直に意見交換をすることで、より実効性のある提言作成を行うことができた。また、生徒全員が3年間の学びを踏まえ、卒業論文の作成を行った。

※講演実績

6月20日 OECD (経済協力開発機構) 東京センター副所長樋口厚志氏による、OECD の環境政策への取り組みについての講義

9月11日京田辺市役所より京田辺市民部長村田敬造氏含む、環境政策課職員等5名来校環境政策に関わる「廃棄物」「交通」「エネルギー」を中心として京田辺市の取り組みに関する講義

9月25日京都市役所より環境課職員2名来校

環境政策全般について京都市の京都議定書後の熱心な取り組みに関する講義、生徒の提言発表とアドバイス

- ⑤ 本大会において本校は2016年度に世界大会2位の実績をもつが、今年度も国内大会(2018年3月25日)に校内選考を経た8人が第2位の実績を残した。このビジネスプランの本年度のテーマは、「To develop an innovative business idea to achieve one of this Sustainable Development Goal 3's targets・・・中略・・・You will present your business plan to a panel of venture funders who are interested in investing in social enterprises that aim to solve these problems using the latest but available technology.」であり、SGH 科目の学びとも関連の深いものであった。その後、世界大会出場権が与えられ、5月21日に世界大会に出場し、世界第3位となった。
- ⑥ World Scholars Cup (WSC)は、本校で国内予選(関西大会)を2018年5月5～6日に開催し、本校から26人が参加し、チームディベートは1位の成果を残した。アジア地区予選に該当するクアラルンプール国際大会(2018年6月17～24日)にも21人が出場し、チームとして6位(ライティング)の成果も残した。イエール大学で行われた世界大会(2018年11月15～21日)に10人が出場した。
- ⑦ 本校では1年生～3年生の選択科目として「English Elective」を設置しているが、本研究開発開始時に「English Elective」として2年生に「Research, Debate, and Presentation」を、3年生に「Advanced Academic English」を設置した。それぞれの受講生は29名、13名であり、受講生がWorld Scholars Cup (WSC)にも多く出場した。2年生はTED Ed Dokoku イベントを2019年2月15日に同志社大学、京田辺キャンパス、ロームプラザで開催し、生徒が司会もつとめた。また、本校附属の中学校3年生から受講可能な「World English」を設置し、28名が受講している。この科目は、生徒が「英語を学ぶ」のではなく「英語で学ぶ」科目である。

- ⑧ 外部指導委員の十倉良一氏（京都新聞社論説委員）、村田敬三氏（京田辺市市民部長）にもご出席いただき、毎年この時期恒例となっている本校の SGH への取り組みを協議する運営指導委員会を開催した。校長より挨拶、文部科学省の SGH 指定校修了後の取り組みの動向について SGH 開発研究委員長より報告の後、各担当教員より 1 年間の取り組みについて報告がなされた。また、SGH の学びの一環として World English の取り組み、SGH での学びも活かされ生徒たちが活躍した World Scholars' Cup 出場の成果報告、そして本校の国際交流プログラムの概要説明を行った。外部指導委員の方からは、本校の SGH への取り組みのレベルが高くなって来ていることを賞賛いただき、本年度 3 年生になった生徒たちの GUS での取り組みについては、環境問題を複雑なものとしっかり捉えた上でそれを乗り越えるための地道なりサーチを経ている点で大変高い評価をいただいた。また学校での環境問題の解決に向けて、教員と生徒が会社のような組織を立ち上げ役割分担し戦略を立てている点についても、実社会での実現に向けて有意義な学びになると評価をいただいた。World English や各留学制度においては、語学を学ぶという目的ではなく外国語で学ぶことを実践している点について、高い評価をいただいた。
- ⑨ 同志社大学今出川校地にて SGH 活動報告会を実施し、各学年生徒代表、国内・海外研修参加生徒代表計 33 名が報告を行った。同志社大学政策学部教員も報告会に参加し、発表に対して、また、EU キャンパス含む大学での研究の継続についてもアドバイスをした。本校生徒が政策学部で同様のテーマを扱う学生による研究発表会に参加するなど、活発な交流が続いている。3 年生の生徒が 2 年生時に作成したリサーチブックは大学教員からも反響があった。
- ⑩ SGH フォーラム（12 月、東京都）に 4 名、SGH 甲子園（3 月、兵庫県）に 3 名が参加。SGH フォーラム参加時に、フランスのオーガニックスーパーマーケットを展開するピオセボン株式会社を訪問し、環境改善の一つとして容器包装について営業部長とディスカッションを行い、3 学期の提言作成に生かした。
- ⑪ 真庭研修 2018 年 11 月 11 日（日）～12 日（月） 真庭市観光協会主催のエコツアー（バイオマスツアー真庭）に生徒 12 名、教員 1 名が参加した。豊かな森林資源を生かし、バイオマス事業を軸に持続可能な社会構築を目指している岡山県真庭市を訪問し、地域資源の有効活用によって化石燃料に代わる様々なエネルギーを実用化している現場を見学することができた。
- 東京研修 2019 年 1 月 22 日（火）～23 日（水） 生徒 12 名、教員 1 名が東京フィールドワークに参加した。ドイツ連邦共和国大使館を訪問、学習意図を説明し、環境問題に関する概説を伺った。
- ⑫ ドイツ研修 2018 年 12 月 9 日（日）～21 日（金） GUS I 受講者のうち参加希望 39 名から選抜された生徒 12 名が参加した。環境問題に対する様々な政策について、ドイツの取り組みを中心に学んだ。ドイツでは、都市や村の規模ごとにどのような政策がとられているか、住民による試みが行われているかを現地研修した。SNS を活用し、参加生徒保護者と学校 HP に逐次レポートする形で成果の普及につとめた。
- ⑬ HP による成果報告、普及を積極的に行い、今年度は授業、講演会、フィールドワークについて 60 回の記事の配信を行った。パイリンガルのスタッフにより、英語での記事の配信も積極的に行った。

(1) 真庭研修 [⑩]



(2) 東京研修 [⑩]



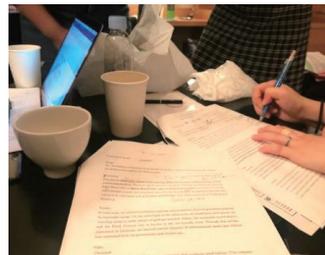
(3) ドイツ [⑫]



(4) SGH フォーラム [⑩]



(5) 英語での原稿作成 [⑩]



(6) OECD 東京センター [④]



7 目標の進捗状況、成果、評価

※まず、それぞれの研究開発単位において掲げた仮説に対する実践成果をまとめる。

「Global Understanding Skills (Basic)」

仮説	成果
<p>自己の経験のみによって形成してきた世界観から、広い視野で世界を捉えることが可能となり、世界的に解決すべき問題と、現在の自身の生活環境との違いを学ぶことができる。世界的な課題を解決するための端緒を見いだすと同時に、現在の日本、さらには、より身近な環境である京都の生活環境のより良い在り方を探求する道筋を得ることができる。</p>	<p>グループディスカッションと一斉講義を効果的に取り入れることで、生徒はそれぞれの経験を共有し、国際連合の提唱する持続可能な開発目標 (SDGs)などを参考にグローバルな課題を共通認識することができた。また、身近な学校のゴミ問題を取り上げて課題解決を目指すことで、大きな問題を自分の問題としてとらえ、協力して課題解決に至ることができた。</p>

「Global Understanding Skills I」

仮説	成果
<p>1年生より学んできた内容を実際に見聞し、経験することで、生徒個々の問題意識を深化させ、現地での体験を新たな問題発見の機会、主体的な問題意識を養う機会とする。現地で得たことを発信、共有し、政策提言の準備をする。生徒は問題意識をさらに深め、課題発見能力、プレゼンテーション力を養い、ディスカッションにおいて自らの意見を主張するとともに他者の主張を受け入れ、取り入れながら、自らの意見を再構築できる。再構築した自らの主張を、どのように発信すべきか考えることができるようになる。</p>	<p>外来講師による講演を積極的に活用することで、様々な場面で問題を抽出し、課題を発見する力を養った。また様々な機関や団体、企業等で働く方々に触れることにより、物事を様々な立場から多角的に見る視野を養った。このような機会を利用し、生徒たちは自身の問題意識の発見につとめ、また自己の意見を構築し、発信することができるようになった。ドイツへのフィールドワークを通じ、環境問題への関心を高め、政策提言への準備を行った。</p>

「Global Understanding Skills II」

仮説	成果
<p>生徒個々の問題意識を深化させ、現地での体験を新たな問題発見の機会、主体的な問題意識を養う機会とする。現地で得たことを発信、共有し、政策提言の準備をする。そのなかで、生徒は問題意識をさらに深め、課題発見能力、プレゼンテーション力を養い、ディスカッションにおいて自らの意見を主張するとともに他者の主張を受け入れ、取り入れながら、自らの意見を再構築できる。そして、再構築した自らの主張を、どのように発信すべきか考えることができるようになる。</p>	<p>ドイツ、デンマークでの優れた環境政策事例について効果的な実地研修ができたことで、生徒たちは現地での取り組みを直接見ることができただけではなく環境問題への関心を一層深め、何気ない日常の問題も環境問題と結びつけて考えるようになった。提言についても、提言先の取り組みを理解し、海外研修で見てきた政策との比較等について率直に意見交換をすることで、より実効性のある提言作成を行うことができた。</p> <p>評価エビデンスについては、3年間のSGHの授業を通じて身についた力について、生徒全員が自己の成果検証を行うレポートを作成し、論理的思考力、プレゼンテーション力等についてどの程度身についたと感じるかという客観的な</p>

	アンケート調査を実施した。また、前年度、環境先進国ドイツに関するリサーチブックを作成し、また、これまで学んだことから関心をもったテーマについての卒業論文を生徒全員が作成した。
--	---

※研究開発実施による変容であるが、まず、教員については、教科を超えて授業を担当し、また、簡単に答えの見つからない課題に挑戦することで、互いの得意分野を生かし、協力して生徒とともに課題解決を目指す姿勢がより深まった。生徒については3年間の学びを終えた生徒の振り返りレポートやアンケート調査から、分析力、思考力、プレゼンテーション力、コミュニケーション力、計画性、リーダーシップなどのスキルが身に着的いたことがわかった。学校を超えて様々な人と交流したり、上述した World Scholars Cup や Global Enterprise Challenge 等、様々なコンテストに果敢に挑戦する姿勢も高まった。海外研修や SGH フォーラム等の機会を通じ、英語学習への意欲も非常に高まった。本校は帰国生徒が多く、高い英語力をもつ生徒も多く在籍するが、そのような生徒も、海外在住経験のない生徒も、話す、聞く、読む、書くのすべての技能を高めなければならないとの認識を持つようになった。SGH フォーラムには、イタリアの帰国生徒、ドイツ・スウェーデンの帰国生徒、2名の一般生徒が出場したが、全員、見事に英語でのプレゼンテーションや質疑応答を行い、審査員からも高い評価をいただくことができた。

生徒の最終レポートより

「レポートの作成を通して自分の作成するものを客観視する力が身についた。」

「グループワークを通してリーダーシップをとることが出来るようになった。皆の能力やモチベーションをどのように引き出すかを考えるようになった。」

「積極的に授業に参加することがとても大切であるということを学んだ。グループワークを通じて責任感が身についた。」

「準備することの重要性、プレゼンテーション能力、クリティカルシンキングの能力が身についた。このクラスでは学習する内容というよりも学ぶ事そのものの楽しさやを知る事ができ、人生を変えてくれた授業である」

<添付資料>目標設定シート

#### 8 次年度以降の課題及び改善点

3年生は実効性のある提言作成を行うことはできたものの、本校は研究開発計画として京田辺市、京都市、国際機関への提言を予定しており、週に2時間の授業内でそれらすべてを作成し、担当者と交渉を重ねるには時間が不足していたことが本年度の課題である。また、卒業論文に関して、本人の関心にもとづく「研究」といえるレベルのものに深めるには、教員の指導がもう少し必要であった。多くの内容に取り組むことで生徒の関心が広がり、様々な力が身につくことは明白であるが、限られた時間の中で効果を出せるよう、授業内容を再検討、改善していきたい。

#### 【担当者】

担当課	SGH 研究開発委員会	T E L	0774-65-8911
氏 名	戸田 光宣	F A X	0774-65-8990
職 名	教頭	e-mail	mitoda@intl.doshisha.ac.jp

## 2018年度 総括と展望

### 1. SGH指定2期生の3年間の学び

2018年度は、SGH指定2期生が3年生となり、プログラムの完成年度を迎えました。当初、構想調書で計画した内容にしたがって授業を進め、大きな成果を得ることができたと感じています。

#### 1-1. 「Global Understanding Skills (Basic)」

1年生では必修科目として「Global Understanding Skills (Basic)」(総合的な学習の時間)を設置しました。この科目は、「世界が抱える喫緊の課題として『環境問題』、とりわけ化石エネルギーへの依存から脱却し、クリーンで持続可能な自然エネルギーの利用について先進的な取組をしている国や地域について学ぶ。自己の経験のみによって形成してきた世界観から、広い視野で世界を捉えることが可能となり、世界的に解決すべき問題と、現在の自身の生活環境との違いを学ぶことができる。世界的な課題を解決するための端緒を見いだすと同時に、現在の日本、さらには、より身近な環境である京都の生活環境のより良い在り方を探求する道筋を得ることができる」ことを目標として設置されたものです(構想調書より)。

この科目は、国語科、社会科、理科の合計4名の教員が担当しましたが、複数教科の担当者が同一科目を担当することは、本校でも珍しいことです。オリエンテーションで国語科の教員がいった、「すべての人が幸せに暮らせる社会について考えていきたい」、このことがこの授業の出発点となり、教員も生徒も専門性や経験、スキルをいかし合って、授業を進めていきました。国際連合の持続可能な開発目標(SDGs)について学んだり、ムヒカ大統領のスピーチを聞いたり、環境先進国といわれるドイツの環境政策事例や政策のもととなる環境経済学について学び、ただ講義を受けるだけでなく、グループワークで自分たちの生活を振り返り、共有することを効果的に取り入れていきました。その結果、約50か国から帰国した帰国生徒含む約270名の生徒が、経験や身近な生活と社会や世界と結びつけ、「すべての人が幸せに暮らせる社会」すなわち「サステナブルな社会」についての思考を深めていくことができたと考えています。この授業では最終的に1チーム6～7名のグループごとに作成した学校の廃棄物問題解決案を学年全体で議論し、最善の案を作成することができ、調書で掲げた目標を達成できたと思います。

#### 1-2. 「Global Understanding Skills (I)」

2年生では選択科目として、「Global Understanding Skills I」を設置しました。「1年生

必修科目「Global Understanding Skills(Basic)」を基礎とし、さらに発展的な実践力を養うことを目的とする。具体的には、環境先進国オーストリア、ドイツにおいてフィールドワークを実施し、持続可能な社会について考察する。1年生より学んできた内容を実際に見聞き、経験することで、生徒個々の問題意識を深化させ、現地での体験を新たな問題発見の機会、主体的な問題意識を養う機会とする。現地で得たことを発信、共有し、政策提言の準備をする。そのなかで、生徒は問題意識をさらに深め、課題発見能力、プレゼンテーション力を養い、ディスカッションにおいて自らの意見を主張するとともに他者の主張を受け入れ、取り入れながら、自らの意見を再構築できる。そして、再構築した自らの主張を、どのように発信すべきか考えることができるようになる」ことがこの科目の目標であり、ヨーロッパの環境先進国でのフィールドワークを年度末に行うことになっていました。(構想調書より)

この科目は25名の選択者が履修し、ヨーロッパでのフィールドワークに向けての事前学習と、課題解決方法について学ぶプログラムを通して、問題意識を深化させ、さまざまなスキルを身につけていくことを目指すものです。世界的にも有名な東京の通勤ラッシュの動画を見せて、これを解決するにはどうすればよいのか、という問いを発し、生徒たちはグループワークでその解決方法を論理的に導き、その方法を他の生徒や教員に説明するという試みから始まり、ドイツの地理、歴史、政治体制、教育、そして環境政策についてのリサーチブックの作成に取り組みました。通勤ラッシュのグループワークは生徒たちがお互いのうち解け、リラックスして意見を述べたり、お互いの特質を把握するのに役立ちました。また、リサーチブックの作成では、ドイツの環境政策全般を扱った同様の書籍はあまりない(外国語のものも調べればあるのかもしれませんが)、というところから、自分たちにはできない作品をつくらうと、生徒たちは大変熱心に取り組みました。それぞれの担当箇所を、公的なものなど信頼性の高いサイトや、専門家の著書などを読んで執筆するだけでも生徒たちにとって一苦労でしたが、書いたものを一冊の本として構成するのにも徹底的にディスカッションを重ねました。表紙も建築やデザインに興味のある生徒がフライブルクの旧市街をモチーフにして作成し、内容も構成も大学教員からも高い評価を得ています。フィールドワークの旅程決定後は、研修先であるデンマークのコペンハーゲン市やエネルギー自給率70%のロラン島、洋上風力発電機製造の三菱ヴェスタス社などについてもリサーチを行い、研修ガイドを作成しました。この頃にはグループで一つのものを作ることに、リサーチを行うことにも生徒たちはすっかり慣れて、自分たちですべきことを明確化し、役割を分担してどんどん進めていけるようになりました。このような作業を通して、調書にも書いた、「ディスカッションにおいて自らの意見を主張するとともに他者の主張を受け入れ、取り入れながら、自らの意見を再構築できる」する力が身についたことはもちろん、「自分の書くものを客観視できるようになった」と3年生終了時に生徒がふりかえりのレポートで述べていたことに感動しました。1人で学びを進めるのとは異なり、他者と協同することで、本当の意味で、自分の書いたものを振り返ったり、自分は何が得意なのか、と考えることができるようになるのだと思います。

フィールドワークについては、提言先である京田辺市を意識して同規模のドイツ・フライブルク市とその周辺の農村部、そして京都市を意識してハンブルク市、加えて、デンマークでの研修を行いました。リサーチを重ねたとはいえ、やはり実際に現地在住の専門家に説明を受けたり、足を使って歩き、自分の目で見る「環境先進国」は本当に新鮮でした。事前学習として事前に訪問先への質問事項を整理したり、生徒の代表が研修先で挨拶を行うなど、小さな経験を重ねることで、生徒たちは個々に大きく成長し、また、チームとしても互いに得意分野を生かし合い、苦手な部分をフォローし合うことで、結束力が高まり、高いパフォーマンスができるようになりました。研修先では、在外日本国領事館、現地地方議会議員、日本とヨーロッパの合弁企業社員、現地のホテル経営者、ジャーナリスト等様々な人が惜しみなくいろいろな話をしてくださり、生徒たちはスポンジのようにすべてを吸収していききました。毎日大いに学び、頭も足も最大限に使い、本当によく笑った10日間を過ごし、海外が初めてという生徒も帰る頃にはすっかり慣れて、「帰りたくない」と言っていました。「いろいろな話を聞いて途中少し混乱したけれど、一つの話を引きかけにすべてが線のようにつながった」「このメンバーは仲の良い家族のよう」、「このフィールドワークが私の人生を変えてくれた」という生徒の言葉は、大きな財産です。

### 1-3. 「Global Understanding Skills (II)」

3年生では「Global Understanding Skills II」を設置し、「2年間で養われた基礎知識と問題解決への理論的アプローチ、2年生でのリサーチの内容を共有し、具体的には京都市、京都府、国連環境計画（UNEP）、経済協力開発機構（OECD）に対して独自の提言を行い、回答を得ていく。また、その成果をふまえて、学内小学生に対して環境教育を実践する。この取組を通して、世界的な課題、特に環境問題の解決の方法として、身近にある余剰資源が有効であることを学ぶことができるとともに、実際の問題解決に向けて取り組むことができる。関係諸機関からの回答を、さらなる問題発見につなげ、自らが世界にどう関わり、働きかけていくのか、その解答や実践力を、グループワークや諸機関や講師との交流を通じ、確かなものにしていく」（構想調書より）ということで、これまでの学びはインプット中心でしたが、3年生では京田辺市・京都市・経済協力開発機構（OECD）に提言をするという明確なゴールがありました。まずはフィールドワークについてのまとめを日本語・英語で作成し、その内容をクラスの生徒と1年生全員の前でプレゼンテーションする機会をもちました。2年生の時からプレゼンテーションの機会は多くありましたが、特に印象に残ったフィールドワークについてのプレゼンテーションは、生徒が、「伝えたいことを効果的に伝える」ものになったと思います。「聞いてもらいたい」という気持ちが聞いている側には十二分に伝わってきました。また、提言に先駆け、提言先機関の取り組みを知ろうと、京田辺市、京都市環境政策課、OECD東京センターからスタッフに講演に来てもらいました。このような機会は生徒たちにとって将来の職業についても考える機会となったと思います。また、

これらの提言作成に先駆け、本校の食堂を営業する企業に、学校の食堂の環境改善案を提案し、やり取りをしたのもとても良い経験になりました。提案内容は、食堂で売られているポテトなどの軽食の容器をプラスチックから紙製にする、リフィルのドリンクサーバーを設置し、ペットボトル飲料の利用を減らす、といったものです。これはドイツで浸透している3R（現地ではデポジット等も効果的に利用し、かなり進んでいる）や、デンマークやドイツのホテルでの廃棄物削減のさりげない工夫などに感銘を受け、ぜひ本校でも実施したいという生徒たちの思いから始まった提案です。生徒たちは提案に先駆け、分析、企画、交渉の3チームに分かれて会社組織のようなものを立ち上げて提案を作成し、準備を行いました。準備を重ね、提案についてプレゼンテーションをしたものの、企業からのコストや安全性などの観点からの厳しい指摘を受け、実現はそう簡単ではないことがわかりました。しかし同時に、考慮すべき点が明確になり、今回はこういう方法でプレゼンテーションをするのはどうか、また、内容もこのように改善するのはどうか、というように生徒たちは戦略的に考えていきました。何より、「何かを提案するのであれば、相手の立場に立つことが重要である」という最も基本的で、重要なことに気づくことができました。その後、フランスのオーガニックスーパーの日本法人を訪問し、提案実現の参考とすべく、いろいろなお話を伺いました。ヨーロッパでは当たり前の野菜の量り売りがなぜ日本で難しいか、いろいろやりたいことはあるけれど、優先順位をつけてとにかく実現させていくことが重要であるという話をしていただきました。アメリカの大学院で公共政策を学ばれ、実際に企業の立場で重責を担われている方からの話は、大きな刺激になりました。

こうしたステップを踏んで、調書に記載した京田辺市、京都市、OECDすべてに対する提言を作成しました。公共交通の利用を促進したいと考えている京田辺市には、ドイツで見たパーク＆ライドに着想を得た、地域での商店などで利用できるクーポン券付き公共交通の定期券を提案し「歩く街京都」を掲げる京都市には、ドイツのパーク＆ライドやフライブルクの旧市街（歩行者天国になっている）、コペンハーゲンの自転車政策などを参考に、市の運営する、パリのvelibのようなシェア自転車サービスと市内中心部駐車料金値上げを提案しました。特に京都市の職員の方からはおもしろい提案ではないかと評価をいただき、生徒たちにとって大きな自信になりました。OECDへの提言は、講演で聞いた「質の高いインフラ」について、まだ定義は定まっておらず2019年6月のG20で話し合われるとのことから、これまで帰国生が住んでいた国や今回フィールドワークで訪れた国などを参考にどのようなものなのか私たちなりの意見を提言してみるという方向性でまとめました。OECDの発行する膨大な文書を読み、提案を考えて東京センターで生徒代表がプレゼンテーションを行い、東京センター副所長の樋口氏からは、提案のソースを明確にすること、高校生らしい視点をいかして思い切った提案にしてはどうかとアドバイスをいただきました。

時間が十分でないなかで、目標をクリアするのは大変でしたが、生徒たちはどの過程もおろそかにせず、成果をあげることができたと思います。3年間受講した生徒たちの振り返り

のレポートにあった、この授業を通して「社会の問題の複雑さを理解できた」「学ぶことが楽しいとわかった」とはとても嬉しい言葉です。

## 2. 課題

一つ目は、リサーチブックを改訂し、より充実したものとすることです。二つ目は、提言内容とフィールドワークの研修先の関連性を高めることです。例えば、住民や観光客の公共交通として自転車を利用した政策を実施するのであれば、そうした政策が進んでいるアムステルダムやパリなども候補として考えられるかもしれません。三つ目は、提案を実現させるということです。当初より、高校生だから、提言しました、よくできました、で終わるのは良くないと、提言先からフィードバックをもらうことにこだわり、そこまでは成果をあげられたと思います。ただ、案を実現にうつすことは大変難しいことです。企業や自治体と協同し、また学校の中で、環境改善のためにできることを何か形にできればと思っています。

## 3. 展望

SGHの指定終了後、このプログラムの良い部分を校内で残しながら、どのような取り組みが可能かを、指定終了までに考えていきたいと考えています。何より、このプログラムで生徒は大きな力と自信をつけ、良い友人関係を築きました。教員にとっても、生徒たちと過ごした時間はとても豊かで、幸せなものでした。このプログラムで育った生徒たちが「すべての人が幸せに暮らせる社会」を実現するグローバル・リーダーになることを願いながら、これからも同志社国際高校の良さを生かしながら、新しいことに積極的に挑戦していきたいです。



ドイツ・フライブルクにて

OECD 東京センター副所長樋口厚志氏



同志社時報 No.146 掲載記事(2018年10月)

スーパーグローバルハイスクール (SGH) の授業における本校の学び

同志社国際中学校・高等学校 理科教諭 坂下淳一  
社会科教諭 帖佐香織

本校は、2015年度にSGHの指定を受け、「環境先進国に学び、世界に提言」というプログラムを実施しています。今回は、私たちが担当している2016年度入学生の2年あまりの取り組みを紹介します。

■「Global Understanding Skills Basic」：高校1年生必修科目

グローバルな社会課題について、基礎的な知識や課題発見の方法を学ぶ講座です。まずはSDGsなどを用いてグローバル・イシューとは何かということについて学び、その中で、環境問題に焦点をあてました。環境経済学、政策学、京都やドイツでの環境政策や環境対策の事例について、さまざまな観点から学びを進め、最終的には身近な問題として学校の廃棄物問題について意見を出し合い、問題解決を目指しました。特にグループワークにおいては、本校は、教員も生徒も多様であることが大きな影響を与えました。

■「Global Understanding Skills I」：高校2年生選択科目

最終的な目的である政策提言に向けてのインプットを重視した講座です。3月には、8名の生徒が参加してドイツ、デンマークへのフィールドワークを実施しました。

開講当初、生徒たちの興味、意欲、学習歴も多様であり、前例のない取り組みは多難を極めました。まずは、「東京の通勤ラッシュの解決」をテーマに、論理的な問題解決の方法について学びました。並行して、ドイツの環境問題についての書籍を読み、グループ・プレゼンテーションやディスカッションなどで情報を共有し、またドイツの環境政策についてリサーチを行い、集大成としてリサーチブック

「SGH高校生が調べたドイツ流環境理想図」を完成するに至りました。これらの活動により、分析力、思考力、プレゼンテーション力、コミュニケーション力、リーダーシップなど、DWCLA10に示されているようなさまざまな力が得られたと思います。また、生徒達が課題に取り組むなかで、互いの個性や得意分野を理解し、クラスの雰囲気がどんどん良いものになってきたことをとても嬉しく感じています。

フィールドワークでは、都市や地域のサイズとそれに応じたさまざまな取り組みに着目して研修を行いました。ブライトナウ村やロラン島、フライブルク、ハンブ

同志社時報 No.146 掲載記事(2018 年 10 月)

ルク、コペンハーゲンなどで、環境ジャーナリスト、領事館、村長、市会議員、洋上風力発電機製造の三菱 Vestas 社の方々などからお話を伺い、貴重な経験をすることができました。



リサーチブックの作成

■「Global Understanding Skills II」：高校3年生選択科目

3年生では、自分たちの意見の発信に向けて準備をしていきますが、どのような課題に対しても、それぞれが自分らしく意見を述べ、グループでは自己の役割を果たしながら、前向きに楽しく取り組んでいます。

学校の改善案として、廃棄物問題に着目し、食堂にレフィル容器を提案しようと、市場分析、企画・広報、交渉のグループに分かれて取り組みを進めています。

また、環境政策についての提言を段階的に実施するために、京田辺市、京都市、OECD の職員の方々からお話を聞いて、学びを進めています。



ホテルヴィクトリアの太陽光パネル（フライブルク）

■授業を担当して

授業自体はストーリーを重視して展開していますが、この講座を受講することで見えてきた世界は、生徒によってさまざまだろうと思います。問題解決に向けてま

同志社時報 No.146 掲載記事(2018年10月)

だ第一歩を踏み出したばかりですが、答えのない問題に対して、知的好奇心を持ち、自分の力を総動員して取り組む姿が強くなってきました。

大人が真剣に取り組んでも解決していない問題に対して高校生が提言を行うことは簡単ではありません。しかし生徒たちは、意欲的に取り組んでいます。その取り組みの中で、私たち教員は、「社会の問題の複雑さ」「それを分析し、動かしていく強い力の必要性」について感じ取り、将来の社会を動かしていける人材として、生徒達が成長してくれることを期待しています。個性的な生徒たちの意見やアイデアは、聞いていてこちらも興味深いものが多く、「このような生徒たちが本当に世界を変えていくのかもしれない」と考えています。私たち教員も、まさに自分たちが高校時代に受けたかった授業を作り上げているプロセスの途上です。

## 3年間のGUS講座を振り返って

## 3年間のGUSの授業を通して

3-A-8 服部 あすか

私がまだ中学3年生だった頃、この学校に興味を持った1つの理由として同志社国際がSGH指定校ということがあった。中学3年間で英国で過ごしていた私は海外のあらゆる事柄に興味をもつようになっていた。SGHの指定校では国際的な社会問題や環境問題を学習できるということもあり、私が高校生で学びたいことと一致した。

高校1年生の毎週土曜のGUSの授業では、私たちの学校がある京都府で行われている環境における取り組みや、京都府ではない他の件の取り組みについて知ることができた。私は当初は環境問題と聞くと、地球温暖化のことしか知らず、環境問題について知らないことがまだまだあるのだと改めて知った。また私が特に印象に残っている授業は、自分の住んでいた国で行われていた環境に関する取り組みをそれぞれ文字に書き出し共有するというものである。ヨーロッパやアジアなどそれぞれの国で環境に対する取り組みが行われているものの、全く異なった取り組みもたくさんあった。ドイツのフィールドワークには参加できなかったものの、なぜドイツが環境先進国として世界から注目されているのかを、自らリサーチすることで他の国と比較できた。GUS受講者全員で1冊の本を作成するときもただリサーチするのではなく、複数の文献を比べ共通の内容を見つけることにより、より忠実なりサーチブックを完成させることができた。また、GUSの授業内で、学校での環境に対する提言案を実際に企業の方とお話させていただく機会があったが、これは本当に良い経験となった。環境に良いことをしているという思いで様々な提言案を出したが企業側の立場で考えると、損になってしまうことが発生したり、果たして本当に利益は出るのかなど、提言案を考えている際には思いつかなかったことが、企業の方とお話していくうえで浮き彫りになった。今まで実施していなかった取り組みを実現させるというも様々な過程を経なければならぬのだと知ることができた。こんな取り組みをすれば良いのに、なんでこういった対策を取らないのだろう、と全く企業側の立場を考えず一人の生徒という視点で考えるのも良くないことだとも知ることができた。

GUSの授業を3年間受け続けたことにより、一番大きな変化があったのは、普段のニュースや新聞記事で環境に関する内容がとりあげられているものを積極的に探すようになったことだ。自分が住んでいる京都府で行われている取り組みがとりあげられていたら、自分が学習した時の状況と大きく変わっているなど、変化に注目してニュースを聞いたり新聞記事を読むようになった。また、国際機関の方や京都府の環境対策に携わっている方とお話をする機会がたくさんあったことにより、自分の将来のことについて考える良いきっかけにもなった。なかなかできないような貴重な体験を高校で経験することができ、決して無駄ではない3年間で過ごすことができた。

## 3年間の GUS 講座を振り返って

## 違う角度から物事を捉えること

3年 B組 23番 中村友祐

GUS の授業を三年間学んできて、私はある物事について考察するときその本題とは違う側面の事柄についても気づくことができる力とその重要性を身に着けることができたと思います。その本題についてははっきりした答えや解決案が浮かばない時に、その力が役に立つと思います。

この力を付けることができたのはドイツの環境についてのリサーチで私はドイツの環境そのものについてではなく、ドイツという国そのものについてリサーチしました。その結果、なぜドイツの環境政策が優れているとそのプロセスがどのようなものなのか知ることができました。ドイツの環境政策がどのように優れているかという観点ではなく、なぜドイツが環境に対して高い意識があって、その基盤はどのようなものなのかということを理解できました。もちろんドイツの優れた環境政策がどのようなもので例えば日本では実施可能なかということを考えることは非常に重要だと思います。しかし、そのまた違う観点、ドイツについての情報、その国民性や政治制度、歴史などを考慮してから後に、その環境政策について学ぶとさらに深い学びと理解が得ることができました。

また、世界各国の環境について学んだ時には、日本が再生可能エネルギーによる発電に対して後ろ向きなのではないかという観点があるもので、私はその時にアメリカによる影響があるのではないのかということを考えました。アメリカがパリ協定に調印せず、世界の二酸化炭素削減目標を無視するということがあって、アメリカとの関係が深い日本はこのアメリカがパリ協定に調印しなかったことで日本が原子力発電の継続を推し進めている部分もあるのではないかと思います。それが正しいか正しくないかということは問題ではなく、日本の環境政策についてだけを考えるのではなく、別要素も考慮することができて、それまではできなかったことができて何か達成感のようなものがありました。

GUS で学んだことは環境に関することが多くありましたが、これから先は環境問題だけでなくさまざまな世界の問題や日本の問題について考えることがたくさんあると思います。その時にこの授業で身に着けた別の角度で物事を見ることがとても重要であると思います。正しいか正しくないかということは最終的には大切であると思いますが、まず考えるときには変わった考え方をすることも大切になってくると思います。

## 3年間のGUS講座を振り返って

## 人生を変えた授業

3年C組20番 松山花菜子

「学べば学ぶほど、自分がどれだけ無知であるか思い知らされる。自分の無知に気づけば気づくほど、より一層学びたくなる。」これはドイツの物理学者、アルベルト・アインシュタインの言葉だ。GUSの履修を経て、何より私は学ぶ事の楽しさを知り、その結果多くの事を学ぶ事ができた。今日の中でも身についた三つのスキルを紹介したい。

まず一つ目は準備する能力だ。これは最も根本的なもので、レポートを書く時やプレゼンテーションをする時、研修に参加する時にも必要となる能力だ。私は特にヨーロッパ研修旅行とSGHフォーラムに参加した時に準備する事の大切さを学んだ。まず、ヨーロッパ研修旅行のために事前学習をし冊子を作成した。そのおかげで現地では自分の想像していた以上の経験をする事ができた。また、SGHフォーラムではポスター作り、プレゼンテーションの原稿作りと練習に多くの時間を割いた。そして自分の自信につながる様な発表を披露する事ができた。時間をかけて準備する事は本当に大変だし、終わりが無いのも事実だ。しかし、GUSでの経験を通し、逆に準備さえきちんとできていれば本番は身軽にいられるという事を実感し準備を怠らない姿勢が身についた。

二つ目はプレゼンテーション能力だ。GUSの授業では実にたくさんのプレゼンテーションを行った。しかも、準備にあまり時間をかける事ができない場合が多かったため、正直無茶に感じた事もあった。しかし、この経験こそがそれまでの私のプレゼンテーションへの概念を変えたのだった。私はGUSで数々のプレゼンテーションを経験するまで、原稿はある程度完璧に「暗記」し発表するのが当たり前だと思っていた。しかし繰り返しプレゼンテーションを経験し批評を受けるうちに、全てを「暗記」することはそもそも不可能であること、むしろ理解をきちんとしていれば真摯に相手に伝える事ができるという事を学んだ。そして、それからはよりナチュラルにプレゼンテーションをこなす事ができるようになった。特に食堂案に関する交渉やSGHフォーラムでの発表は結果こそ残せなかったものの達成感と経験値を得る事ができこれからの自信につながった。

三つ目はクリティカルシンキングの能力だ。これは今回述べている三つの学びの中でも、特に大きな収穫だと思っている。GUSでは、プレゼンテーションなどの発信も多く行ったが、たくさんの人にお会いし、行政関係者や営業部長さん、農家の方や村長さんなど様々な立場の方からお話を聞く機会も多かった。その中で、自分がこれまで信じていた事が覆されたり、考えつかなかった発見があったりと新たな視点で物事を見つめ直す事の重要性を実感した。すると、回を重ねるごとに、相手の話に対する疑問点や詳細を知りたいところに気付く事ができるようになり、人から直接話を聞く事や講義を受ける事を興味を持って楽しめるようになった。さらに、普段の生活の中でも、ニュースの内容や周りの人との会話を無意識的に客観視できるようになり、一つの話題に対して様々な見解を持ちそしてその中で自分の意見を明確にし議論を深める事ができるようになった。

最後に言っておきたいのは、GUSを履修して本当に本当に良かったという事だ。私は高2の履修選択の時、環境問題についてなんとなく興味があったからという理由でGUSを選択したが、このクラスでは学習する内容というよりも学ぶ事そのものの楽しさやを知る事ができ、また将来どうありたいのかといった人生観まで考えさせられる様な事もあり人間として大きく成長する事ができたと思う。私の高校生活はGUSなしでは語れないと言っても過言ではない。これからもGUSでの経験を糧に貪欲に志高く生き、生涯にわたって学び続けていきたい。

## 3年間の GUS 講座を振り返って

## GUS で学んだこと

3年 D組 7番 今西美友

高校2年生からの GUS の授業を通して感じたことや考えたこと、学んだことはたくさんありましたが、その中でも印象に残ったこと、自信を持てるようになったことについて書きたいと思います。

まず、最も刺激を受けたことはドイツ・デンマーク研修です。研修に行く前に、日本でドイツやデンマークの風力発電やデポジット、ヴォーバン住宅など様々な制度や仕組みを学びましたが、現地に行ってみて、その仕組みが国や自治体だけでストップしておらず、しっかり地元の人たちの生活に密着していることにとっても驚きました。例えば、スーパーに行ったらペットボトルには傷があるのが普通で、市民の人は当たり前のようにそれを買って、飲み終わった容器はデポジットの機械に入れていました。他にも、ホテルに泊まったらトラムの乗車券がもらえたり、食用にはできないトウモロコシを資源にして再生可能エネルギーを発電し、売却することで「環境対策」を新たなビジネスにしている農家の方もいらっしゃいました。対策や制度という言葉だけ聞くと、制限されたり我慢する事なのかと無意識に捉えてしまいがちですが、そこではそうではなく、むしろ利益を生み出すものでした。GUS の授業を通して何度も耳にした「持続可能」という言葉の中には、経済的に続けることができる・継続的に効果が期待できるということも含まれていると思いますが、市民が長期にわたって積極的に参加することができる大きな要素の1つなのだと身をもって感じました。

日本の環境対策についても学びましたが、何かを犠牲にしなければ成せない制限的な印象を受けました。一部の人は頑張って今の現状を変えようと努力しているのに、それを大きな成果にまだ繋がっていないことがすごく勿体無いと思ったし、私たちが GUS で学んだことを大勢の人が知ったら、ドイツやデンマークのように環境対策への投資も増えるのではないかと思います。

そして、このことは今私たちが進めようとしている食堂の改革にも通じるものがあると感じました。研修を通して、利益が生まれる対策じゃないと長期的に行うことは難しく、環境問題の現状を知らないことには何も始まらないことを学んだはずでしたが、それをあまり反映できていませんでした。しかし逆にいえば、プラスチックの容器が紙製のもの、ペットボトルがタンブラーに変わったらどんな効果があるのかを学校全体に伝えることが出来たら結果は少なからず変わるのではないかと思います。もちろん生産者にとっても消費者にとっても実現しやすい方法を見つけることがベストですが、1人1人の意識というのは現状を変えるために大切な要素の1つであると思います。

最後に、私はこの GUS の授業を通して、自分の意見を人に伝えることに自信を持てるようになったことが一番成長できたことではないかなと思います。この授業を取るまでは環境問題に限らず、学んだことを覚えることしかできなかったのですが、どうしたらもっと効率的かつ大きな成果が得られるのか、そこに矛盾はないかを考え、それを分かりやすく相手に伝えることが出来るようになりました。また、自分の意見を考えることと同じくらい人の意見を聞くことがより良い結果を生み出すことも学びました。自分のアイデアだけでは成果が期待できないものでも、他の人の意見と組み合わせることで大きな成果が期待できるものになったり、人の何気ない一言が思いがけない発想を引き起こすこともあります。

GUS の授業は3学期で一度終わってしまっていますが、この2年間で学んだことはこれから先の様々な場面で応用できるものだったと思います。大学に進学しても学んだことを忘れずに、生かしていければいいなと思います。

## 3年間のGUS講座を振り返って

## 3年間のGUSを通して学んだこと

3年D組20番 森岡香帆

私が3年間のGUSの授業を通して学んだことは、物事を批判的な視点から見たり、疑ったりして、自分の意見を持つことはとても大切だということです。

私たちはGUSの授業のなかで様々な情報や取り組み、意見に出会いました。そして、それらを比べて、より理解を深め、よくするために考えました。その経験を通して私は、本当にその意見や情報は正しいのか、その取り組みには意味があるのか、ということが無意識に考えることが出来るようになりました。また、様々な意見や取り組みを比較することで、その取り組みをより良くするためにはどうすれば良いのか、問題を解決するにはどうすればよいのかという自分の意見を持てるようになりました。

私はGUSで、ヨーロッパ研修に参加しました。その移動中、電車のなかで出会ったドイツ人の男性に言われた言葉がとても心に残っています。彼は、私たちが日本から環境について学ぶためにドイツに来たことを伝えると、自分で考えることの大切さについて語ってくれました。「日本人はテレビや新聞で報道される政府の情報を疑うことをしない。」と彼は言っていました。そして、「日本で原子力発電所の事故があっても、世界唯一の原子力爆弾による被爆国であっても、政府にとってよい情報ばかりが報道され、国民はそれを信じてしまうから原子力発電所は無くならない。ドイツでは福島原子力発電所の事故をきっかけに原子力発電反対の運動が高まり、政府を動かすことができたのに、おかしい。だから君たちのような日本の若い世代が、報道をそのまま信じるのではなく、自分自身で考え、批判し、それぞれの意見を持つことが大切だ。政府の言いなりになってはいけない。」と語ってくれました。他にも、環境問題について考え、本気で解決したいという意見を持った人に出会い、彼らが中心となって環境問題の解決に取り組んでいる姿を見ました。そして、それが回りの人に影響を及ぼし、取り組みが広がっていったということや、行政を動かしたということを知りました。

私もGUSの授業を選択するまでは、テレビなどで紹介されていることをそのまま信じ、自分の意見をあまり持っていませんでした。確かに、自分の意見を持つには考えることが必要なので、意見を持たない方が楽です。しかし、それでは問題は解決しません。私たちが参考にしてきたドイツには電車で出会った男性のように、しっかりと自分の意見を持った人が沢山いると感じました。そして、彼らが意見を語ることで、それが世論となってドイツの政府を動かすことができたのです。

私は、3年間GUSで学んできて、物事を批判的な視点から見たり、疑ったりして、自分の意見を持つことの大切さを感じました。これから大学で学んでいくなかで、今までのように言われたことを覚えるだけでなく、レポートなどの様々な場所で自分の意見を求められることになると思います。そのとき、私がGUSで身に付けた力は、役に立つと思います。

## 3年間の GUS 講座を振り返って

## GUS を学んで

3年 D組 26番 西浦尚登

私はこの GUS という授業を通じてたくさんのことを学ぶ事が出来た。それはもちろんつらいこともあり、というよりほとんどがつらいことであつたがそれを乗り越えてとても自分の力になった。私がこの授業から学べたことは主に二つある。

一つ目はレポートを書く力だ。高校二年生の時に初めて課題で出された時は先生たちにほとんど訂正された。しかし、今では他の授業などで課題として出されたときには周りとは大きく差をつけられることができたと思う。なぜなら GUS を受けている人以外は教えてもらう機会がないためである。レポートは大学になっても仕事によっては大人になっても作ることがあるので、この GUS で学んだレポートの書き方はこれからも確実に力になり、役立つものだ。

二つ目は環境問題に対する意識である。GUS の授業を受ける前は地球温暖化程度の知識しかなく、その対策など考えたこともなかったがこの二年間を経て今では意識は 180 度変わった。高校一年生の時にも GUS の授業はあつたがその時は興味がなかった。ではなぜ高校二年生の選択授業から意識が変わつたのか。それは GUS の授業形式がとてもよかったからだと私は考える。もちろん少人数での授業になつたという事もある。だが京都や京田辺市や OECD の方たちにわざわざ学校まで出向いてもらい直接話を聞くことや、学校案としてシダックスさんに直接交渉したことなどが大きい要因にある。やはり映像を見るだけでは説得力がなくやる気もでない。しかし高校二年生からの授業では、体験することが増え、考えさせる場面が増えたのである。特に学校案は難しいものであつたがとてもやりがいがあり楽しかつた。結果は失敗に終わったが、次は相手の会社の気持ちをもっと考えなければならない、全員が環境に対して考えているわけではないという事など多くのものを学ぶ事が出来た。このような体験もあり、日常生活でも環境のことについて考えていることが多くなつたのは GUS のおかげである。

私は高校一年生のころに受けた GUS の授業から楽そうという印象から高校二年生の選択授業に GUS を選んだ。しかしその予想は大きく外れ、高校二年生の時は一番しんどい授業と言っても過言ではなかつた。しかし今では自然と環境のことを考えるようになり、気づいたらレポートの力やパソコンを扱う力などもついていた。唯一心残りなのが学校案である。もっと長い準備期間があり 2, 3 回交渉する時間などを設ける事が出来たら成功していたかもしれない。なので、もし次の代でもやる事があれば、二学期すべての授業を費やしてやってもいいかもしれないと思つた。それほどあの実践は GUS メンバー全員が楽しく積極的に取り組むことができ、学ぶことができたとても価値のある時間であつた。GUS という授業は他のどの授業にもないことをたくさん学ぶことができた。授業では文句ばかり言っていたが受けてよかったと心から思う。

3年間のGUS講座を振り返って

リーダーシップが最難関

3年D組46番 吉村 南泉

・リサーチ力とチームワーク

リサーチブックの作成において、それぞれのテーマを本やインターネットを使って、リサーチしたことをレポートにまとめた。その際に、基礎的な能力であるが、自分のほしい情報を効率よく調べることができるようになった。例を挙げると、簡単なことであるが、どのようなサイトが信用できるのかすぐに判断できるようになった。

また、レポート作成の際には、私の担当するグループC（都市計画、交通政策、森林関係）では、本を中心にリサーチすることをすすめていた。その後、インターネットで大学の論文や国家行政組織のデータから情報を得るようにグループ内で決めていた。このようにあらかじめ、仕事の進め方に方針を具体的にどうしていくのかを決めることによって、仕事に統一感とチームとしての連携がとりやすいチームの雰囲気を作ることができた。目指す目標や方針をはっきりと明白にすることで、それぞれが行う自分の仕事の意義がわかるので、チームワークがうまくとれると思った。

・客観的に見る力 読み手、聞き手を意識したレポートやプレゼンテーション

レポートの作成を通して自分の作成するものを客観視する力が身についた。読み手の立場になって作ることが自然にできるようになった。例えば、この文章を初めて読む人やレポートに書いてある分野について予備知識がない人など様々な読み手を意識して文書を作るように心がけていた。このようことから、自分の作ったものを客観視する目を養えた。

また、プレゼンテーションでも同様に面白い、聞きやすいと感じたプレゼンテーションをイメージしてそれに近づけるように構成を考えていた。この力が伸びたきっかけは、三菱ヴェスタスに訪問したことである。山田さんのプレゼンテーションが、長時間であるにもかかわらず、簡潔で、また絶えず興味をひくようなプレゼンであったのだ。帰国後、新高校1年生に研修旅行の報告を学校のホールで行ったときに、GUSについてまだ深く知らない生徒たちにどのように発表すれば、興味を持ってくれるのかや自分の感じた感動や発見を上手く使えるにはどうすればよいのかを深く考えてプレゼン内容を考えた。しかし、限られた時間の中で自分の伝えたいことを相手が興味をもたせて、すべて伝えること伝える難しさを感じた。そして、そこから重要度の高いものから取捨選択して、まとまったものが作れるようになった。

・分析力・論理力

東京の通勤ラッシュの問題解決案を考える授業や食堂への提言、京都市への提言を通して、道筋を立てて物事を考えて、文章にまとめることが出来るようになった。まずは問題点を発見し、その問題点の原因を分析し、解決案の考案、その分析を行い、予測されることを考え、また解決案を考える。そして問題に対して関わっている色々な立場の人のそれぞれの視点で問題解決案を吟味する。実際に、食堂への案のときに企業や生徒の視点になって考えたが、不十分であったと感じた。それを痛感したのは、東京フォーラムのピオセボンを訪問した時だ。私は、環境に負担をかけないという視点だけで野菜の量り売りベストであると信じて疑わなかったが、企業の視点でみると、環境のためということだけで販売スタイルを決めることはできない。企業には企業のプライオリティがあり、それに適した解決案を考えることが

### 3年間の GUS 講座を振り返って

理想であると強く感じた。

#### ・リーダーシップ

グループワークを通してリーダーシップをとることが出来るようになった。しかし、これは GUS の授業で最も難しいことであった。人にそれぞれ得意、不得意があり、秀でたことが必ず何かある。しかし、グループとしてうまく連携が出来なければ、それぞれの能力を引き出せない。うまく一人一人の能力を引き出した良いものを作るために、仕事の分担を決めることが非常に難しかったのである。また、グループ全体の士気を高めることが非常に厳しい。この二つの問題に対処するには、私は「わかる」事が一番効果があるのではないかと考えている。いくつかのグループ作業を通して、ほとんどの仕事ができない理由が、よくわからないことであることも気付いた。そこで作業を始める前に時間をかけてでも、グループの一人一人が何のための作業であるかを理解できるように説明をした。誰に見せるもので、何のためにするのか、どのようにするのかを明確に理解できれば、自分の仕事の価値が見えてやる気とともに能力が発揮できるのではないかと思ったのだ。このように試行錯誤をしてリーダーシップをとれるようになった。まだ完全とはいえないのでもっとも確実にとれるようになりたい。

## 3年間のGUS講座を振り返って

## GUSの授業を通して身に付けた二つの力

3年E組10番 糸井里優

私がGUSの授業を通して学んだ事は、まず最初に、情報が正しいものを見分ける力です。GUSの授業内では、レポートを書く機会が多く、インターネットから情報を引用する際に、その情報が正しいものかどうかを見分ける必要がありました。GUSの授業外では、きちんとしたレポートを書いたことがなかったため、情報に触れる際にその信憑性を考えることはあまりありませんでした。今まで何の疑いもなく閲覧していたサイトなども改めて考えてみると、情報の信憑性があまり高くないものだったりしたので、正しい知識を得るためにも、情報を見分ける力が必要であると感じたし、その力が少し身についたことに嬉しく思います。

また、2年生の時に、ドイツの環境政策などについての冊子を作った際に、自分のレポートに対する責任の重さを理解することが出来ました。以前は、自分が作ったレポートは先生方にしか見られることがないと考えていたため、課題の一つであるというふうに捉えていましたが、冊子というしっかりとした形になったことと、冊子にする時の編集に携わったことにより、もし自分と関係のない人が自分のレポートを見たら、どう感じるのかを考えようになりました。考えていくうちに、自分のレポートを他者の観点から見ることも出来るようになり、自分のレポートのダメな所を見つけられるようになりました。また、自分と関係のない人が読んだ際に、誤解を与えてはいけないと思ったので、正しい情報が見分けるようになりました。

次に、物事を多角的に見る力です。GUSの授業をとって初めの頃は、ドイツで行なっている政策などを日本でも出来るのではないかと、もっとこんな政策を行ってみてはどうか、などドイツと日本の違う点や、政策を行えない理由等を深く考えずに見ていました。しかし、より深く調べて、学んでいくと、少しずつ深く考えられるようになり、自分の視点だけで捉えずに、その国の視点で見ることが出来るようになりました。3年生になって京都市、京田辺市について話を聞いたり、提言案を考えたり、シダックスさんと話し合いをした際に、もっと相手の視点に立って多角的に見る力を身につけないと、政策を実行する事は難しいと感じました。相手側の考え方や、政策を行なった場合に発生するかもしれない問題やその解決方法など、今の自分たちでは想像できない点が多く、今後もっとこの力を伸ばしていきたいと思えます。

これからは、教えてもらうことも少なくなっていく、自分で調べて考えることが多くなると思えます。その時に、上記に書いた正しい情報を見分ける力があると、間違った情報に流されることがなくなり、また、物事を多角的に見る力があると、様々な物事を深く考えることが出来、実際に行動に移すことも出来ると思えます。GUSの授業で学んでいく中で身に付けたこれらの力をこれからも生かしていきたいです。

## 3年間の GUS 講座を振り返って

## 二年間の GUS の授業を受けて

3年 E組 29番 中村真菜

私は二年間 GUS の授業を受けて、プレゼンテーションに対する姿勢が大きく変わった。

私は同志社国際高校に入ってから、たくさんのプレゼンやスピーチをするようになった。みんなの前に立って話したり、発表することが大嫌いな私にとって、最初は本当に苦痛な時間であった。しかし、この考え方が一変したのは GUS だった。私はヨーロッパ研修に行き、帰国後、授業内でみんなに報告する日があった。一人当たり十分以上と言われ私は今までそんな長い時間人前で発表したことがなかった。このプレゼンは暗記して発表というわけではなく、自分が実際に体験したことに対しての自分の考えや思ったことを言うといったものだった。しかし自分はアドリブで言葉を発せるのかも分からず、怖くて原稿を作って挑んだ。前に立った瞬間大きな緊張に襲われ、最初は原稿を読んでいただけ、やっていくうちに自分が身に染みて感じたことや実際に自分が思ったことを自分の言葉でみんなに伝えることがとても楽しいと感じるようになり、原稿に書いていなかったことがどんどん出てきて、あれもこれもみんなに伝えたいとありのままの自分の気持ちでプレゼンができた。この経験から私は今までの自分になかった大きな自信がついたのと同時に、今までプレゼンテーションは原稿を完璧に覚えたものをパワーポイントなど用いて発表するものが正解だと思っていたけど、プレゼンに正解などなく、原稿にとらわれずに自分の言葉で自由に発表してもよいということに気が付いた。私は原稿に話す内容を全て書いて暗記する方法をやめ、話の流れを大雑把に決め、自分の考えをまとめておいてそれを頭の中に把握したうえでプレゼンをするという形式に変えた。それ以降、プレゼンテーションに対する苦手意識がなくなり、どうやったらみんなが聞いていて楽しいものになるかを自分なりに考え、工夫して発表できるようになったし、自分から進んでプレゼンをしたいと思えるようになった。そして、高校一年生への研修報告、食堂提言では緊張せずに自分なりのプレゼンができたし、とても楽しく達成感があった。

このようなことを思えるようになった発端はやはりヨーロッパの研修旅行があったからこそだと考える。最後の最後まで行くか悩んでいたけど、ヨーロッパの環境政策について実際に触れ、感じることでただだけでなく、このような思いもよらない形で自分の大きな自信にもつながった。私はこれからもどんなことにも物怖じせず、色々なことに挑戦していきたいと思う。

## 3年間のGUS講座を振り返って

## GUSの授業を通して学んだこと、身につけたこと

3年F組29番 長浜千波

私は、GUSの授業を通して学んだことや身についたと思うことが3つある。

1つ目は、調べる能力やレポートを書く力だ。これは、高2の1番はじめに環境に関するテーマでレポートを書いた時や、夏休みの宿題で本を読みレポートを作った時に身についたと思う。具体的には、はじめはウィキペディアやブログなど信憑性のないものも参考文献として使ってしまったが、夏休みのレポートを通してきちんとした企業や政府の機関が出しているものを引用するようになった。文末は、「だ」や「である」などに統一することや内容の段落構成を考えることなどはどれも基本的なことだが、私はGUSの授業でレポートを繰り返し書くうちに自然に身につけることができていると感じている。

ドイツ研修では、異文化を体感したのはもちろんのことであるが、私は研修を通して疑問を持つことができるようになったと感じている。今まではリサーチして学びそれで納得していたが、研修に参加してからは、リサーチしたことを現地で学び、疑問や問題点を見つけることができるようになった。また、日本に帰国してからも、町の環境への取り組み方や、スーパーに行ったときの物の見方も変わったと感じている。食品の容器に目を向けるようになったり、ペットボトルのリサイクルシステムの導入されているスーパーを見つけたりするなど、身近なところで環境に対して目を向けられるようになった。

高校3年生になってからは、ドイツ研修で学んだことをもとに実際に身近な学校や京田辺市、京都市に自分たちで考えた政策の提言を行った。そこで私は学校の食堂の提言をしたときにプレゼンテーションを行った。このプレゼンテーションを通して、ただ原稿を読むだけでなく、相手に伝える、相手の興味を引くプレゼンの仕方を学んだ。具体的には、実際の経験談を交えてプレゼンしたり、たまには雑談を入れてみたり、話の内容に沿ったものを写真でなく実物（例えば唐揚げの容器やタンブラーなど）を用いると相手の興味を引けるということを学んだ。そして、プレゼンがあまり得意ではなかったので、自分自身の自信にもなった。

GUSの授業では、初めての海外であるドイツ研修に行ったり、OECDなどの世界の機関で活躍する方のお話を聞く機会を得たり、とても貴重な体験をすることができた。GUSの授業で環境や社会の問題、提言の仕方など、学んだことや身につけた能力は大学に行っても役立つことばかりだと感じている。GUSの授業を通して学んだことを活かしていけるよう頑張りたい。

## I スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

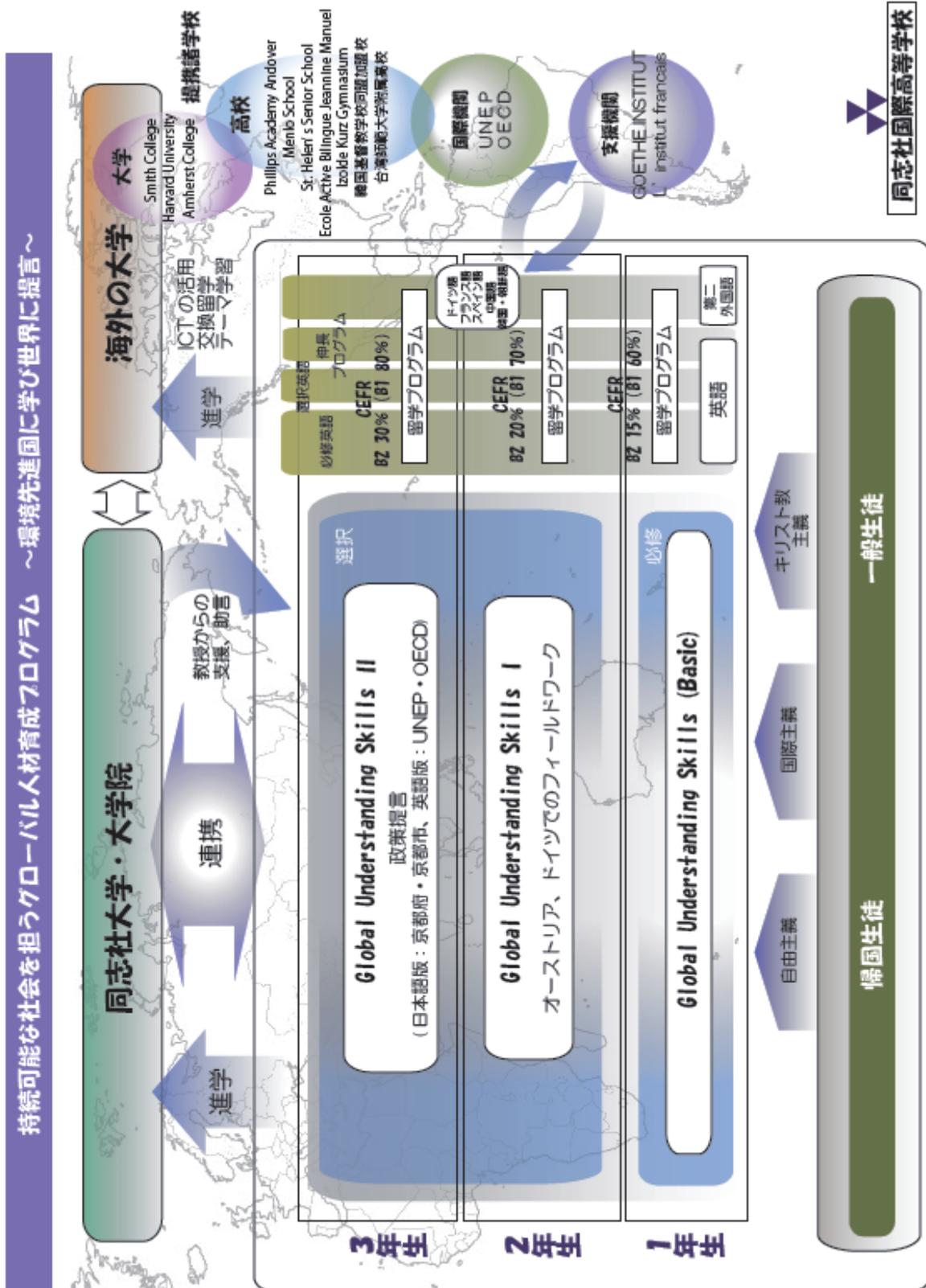
### 【別紙様式5】平成27年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

指定期間	ふりがな	どうししゃこくさいこうとうがっこう				②所在都道府県	京都府
27～31	① 学校名	同志社国際高等学校					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計		
普通科	270	60	60		390	平成26年度 在籍者数833名	
⑥研究開発構想名	持続可能な社会を担うグローバル人材育成プログラム ～環境先進国に学び世界に提言						
⑦研究開発の概要	1年生必修科目「Global Understanding Skills (Basic)」を設置し、持続可能な社会について環境先進国の実例を学習する。2年生選択科目「Global Understanding Skills I」では、資源の有効活用や循環運用を、海外実地研修で学習する。継続履修する3年生選択科目「Global Understanding Skills II」では、現地での学習を発表し、持続可能な社会の実現に向けた方策を、国際機関や地域社会に提案する。						
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	<p>(1) 目的・目標</p> <p>持続可能な社会を目指す先進的事例を身近な地域に置き換え、地域の特性に根差した、持続可能な社会をめざす実践的取組の提言を策定する。その提言を日本語と英語で作成し、日本語版は京都府と京都市に、英語版は国連環境計画 (UNEP) と経済協力開発機構 (OECD) に提出する。この活動を通して地球規模で進む環境問題に対する問題意識と、それに対して能動的に働きかけることのできる実践力を兼ね備えたグローバル・リーダーの育成及び、その育成に資する教育課程の研究開発、教材の開発を本構想の目的とする。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>39か国からの帰国生徒と国内で生まれ育った一般生徒がともに学ぶ本校では、帰国生徒の生活経験が、社会的事象に対する幅広い視野の獲得に十分には結びつけられておらず、生徒間での共有も必ずしも十分には行われていない。帰国生徒の個別体験を全生徒が共有するとともに、世界的課題について系統的に学ぶことで、自己の経験のみによって形成された世界観から脱却し、より普遍的な課題の中に、自らの体験を位置づけることができるようになる。その際、同志社大学、同志社女子大学から講師を招聘しテーマに即した講演を企画することで、一貫校としての連携がより組織的なものとして強化される。</p> <p>また、世界的な課題を解決するための具体的方策を考察することで、現状においては教科指導内に留まっている課題発見能力、プレゼンテーションやディスカッションの能力の育成を、実際の政策提言の策定の作業にも拡大していくことができる。こうして策定したものを、最終的に関係諸機関に対して提言することにより、その提言が具体的な働きかけの次元に発展させられる。</p> <p>以上の方法によって、地球規模で進む環境問題に対する問題意識と、それに対して能動的に働きかけることのできる実践力を兼ね備えたグローバル・リーダーを育成することができると考えられる。</p> <p>(3) 成果の普及</p> <p>課題研究の成果として、持続可能な社会について、地域社会や国際機関に実際に提言を行う。同志社小学校、同志社国際学院初等部の小学生を対象に環境教育を行うことで持続可能な社会を維持する実践を取り入れる。さらに、生徒の作成したレポートや研究論文を学校ホームページ上で発信し、学内外での研究発表会も実施する。</p>					

<p>⑧ -2 課 題 研 究</p>	<p>(1) 課題研究内容                  持続可能な社会に向けた政策提言のため、以下の科目を新設する。                  ア「Global Understanding Skills(Basic)」【基礎的知識の習得】                  イ「Global Understanding Skills I」【課題解決学習、フィールドワーク】                  ウ「Global Understanding Skills II」【課題解決学習】                  ア～ウの科目を設置し、環境先進国であるオーストリア、ドイツの事例を参考に持続可能な社会について学び、提言できるグローバル人材育成のためのプログラムを開発する。</p> <p>(2) 実施方法・検証評価                  ≪実施方法≫                  【1年生】                  ・帰国生徒、一般生徒の生活経験の共有のためのグループワークを実施し、グローバルな社会課題につながる経験を抽出する。                  ・大学の教員を講師として招聘し、グローバル社会や環境問題についての基礎的知識を獲得させる。                  ・環境先進国であるオーストリア、ドイツの事例について学習する。                  【2年生】                  ・オーストリア、ドイツでのフィールドワークへの事前学習をする。                  ・オーストリア、ドイツでのフィールドワークを実施をする。                  ・フィールドワークの報告冊子、ホームページを作成する。                  ・海外提携校とのディスカッションやテーマ学習を行う。                  ・政策提言の準備として関係諸機関についてリサーチし、関係諸機関との質疑を行う。                  【3年生】                  ・京都府、京都市、国際機関（UNEP、OECD）に日本語、英語で政策案を立案し、政策提言を行う。                  ・小学生への環境教育を行う。                  ・全校生徒に対して発表会を行う。                  ≪検証評価≫                  ・レポート、報告書、政策案を担当教員と招聘した講師が評価する。                  ・政策に対する関係諸機関からのフィードバックを受ける。                  ・生徒自身による相互評価を行う。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等                  特になし。</p>
<p>⑧ -3 上 記 以 外</p>	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価                  既存の選択科目「English Elective」として2年生に新講座「Research, Debate, and Presentation」を設置し、3年生には「Advanced Academic English」を設置する。2年生では、プレゼンテーション、ディベートの方法、さらに議論の質を高めるためのリサーチスキルを身につけさせる。3年生では、『Cambridge Academic English』を用いて基本的な文献調査の方法、レポート作成方法などの基礎的なスキルを身につけさせる。</p> <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等                  なし。</p> <p>(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の取組内容・実施方法                  Smith College、Phillips Academy Andover、Harvard University など提携校へのサマープログラムへの派遣を継続する。アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、台湾、大韓民国の提携校との交換留学を継続すると同時に、課題研究でプロジェクトを立ち上げ、提携校の高校生との意見交換のための議論の場を設定していく。</p>
<p>⑨ そ の 他 特 記 事 項</p>	<p>課外で「Global Enterprise Challenge」（アントレプレナーシップ開発センター主催）に応募し、世界大会への出場、入賞を目指す。「Global Enterprise Challenge」は、世界中の高校生によるビジネスプランコンテストで、取り上げられる課題はグローバルな社会課題が中心である。平成25年度は校内予選を経た本校代表が国内1位となり世界大会に出場した。</p>

## II 実施報告

### 1 文科省提出概念図



## 2 開発カリキュラム

## 2-1 ● GUS-B=Global Understanding Skills Basic (第1年次)

2018年度シラバス

学 年	高校1年	必修・選択の別	必修
教科名	総合的な学習 (SGH 科目)	単 位 数	1 単位
科目名	GUS Basic	担 当 者	春日清彦・坂下淳一・ 宅間徹志・戸田光宣
講 座	1 講座		

## 科目のねらい (目標)

世界的に解決すべき問題 (グローバルイシュー) を取り上げ、それらの問題が現在解決に向けて、どのように取り組まれているかを学ぶ。環境問題にスポットを当て、持続可能な社会を目指す先進的事例を、実際に国内で行われている地域へのフィールドワークを含め、学ぶ。環境問題に対する問題意識と、それに対して能動的に働きかけることのできる実践力を兼ね備えたグローバル・リーダーとなるための、基礎的な力を育成する。

## 学習の進め方

全体に対する講義の形式とグループワークを中心としたクラス単位の授業の双方を生かした形の授業です。

## 生徒の学習上の留意点

世界の問題を自分の問題としてとらえられる主体性が必要です。自分が関心をもった問題を中心に自らインターネットや本を使ってさらに調べて勉強したり、ニュースを見ること、そして周囲の人とぜひ意見交換をしてみてください。授業中は知的好奇心をもって、グループワークではぜひコラボレーションを大切に。この授業を通じて一人ひとりが世界や環境への関心を高め、さらにこれから勉強したいテーマを見つけてもらえればと思っています。

## 評価方法

学年末に認定、不認定を評価します。

## 使用教材

すべて授業中に配布します。

## 授業計画

学期	授業内容	各単元のねらい
1	グローバルな社会課題について MDGs から SDGs へ グローバル化時代における国際協力 環境問題総論	身近な経験にもとづく問題意識の共有から、グローバルな社会課題にはどのようなものがあるかを概説的に学んだ上で、グローバル化時代において私たちが世界を良くするためにできることは何かを考える機会をもつ。国連の取り組みや環境問題について、基本的な知識を得る。
2	環境経済学の基本的な考え方 政策学の基本的な考え方 京都の森林活用事例について 岡山県真庭市の取り組み (FW を含む) ヨーロッパ各地方の具体的な取り組み	環境経済学や政策学の考え方を学び、環境問題を解決していくための方策について探る。国内外の実際の取り組みについて知る。
3	環境法 (ヨーロッパを中心に) エネルギーシフト ヨーロッパの都市計画や政策事例	身のまわりに焦点を絞って、環境改善の提案をする。そのことによって日々の生活に直接的にかかわるエネルギーの問題を含め、より良い都市計画や政策について検討していく。

2-2●GUS-I=Global Understanding Skills I (第2年次)

2018年度シラバス

学 年	高校 2 年	必修・選択の別	選 択
教 科 名		単 位 数	2
科 目 名	Global Understanding Skills I	担 当 者	佐藤靖子・山本真司
講 座	1, 2 講座		

**科目のねらい (目標)**

SGH 研究開発の二年次に位置付け、環境先進国の調査とフィールド・ワークへの準備を中心とする。また、有効な発信手段とそのルートを探る。持続可能な社会を目指す先進的事例を身近な地域に置き換え、地域の特徴に根差した、持続可能な社会をめざす実践的取組の提言を策定する。この活動を通して地球規模で進む環境問題に対する問題意識と、それに対して能動的に働きかけることのできる実践力を兼ね備えたグローバル・リーダーの育成を目標とする。

**学習の進め方**

リーダーシップ論とクリティカル・シンキング方法論をアクティブ・ラーニングの手法を駆使して展開する。種々の資料と題材を提供し、そこから課題を発見する。その課題を個人作業とグループ・ワークを織り交ぜて解決する方法を考えさせる。また、作業過程と結果を発信する場所と方法を独自に考えさせて、実際に試みる。クラスから一定の生徒を選抜し、ドイツ、オーストリアでフィールド・ワークを実施する。

**生徒の学習上の留意点**

課題に対して積極的にコミットし、個人の努力とグループの力を引き出す工夫が求められる。所与の方法を超えて、独創的な発想や実践を提案することを期待している。すでに獲得している教養や語学力を一層伸長する持続的な学習が求められる。

**評価方法**

単元ごとのレポートとインタビューによって評価する。授業用サーバを利用して、保存されたレポートを双方向的に改善していく。

**使用教材**

リーダーシップとクリティカル・シンキングを基礎とした教材。グローバル 이슈に関連する境界を持たない種々の媒体を利用する。

\*クリティカルシンキング Critical Thinking(CT) 批判的思考 ものごとを鵜呑みにせず、自分で問題に適切な方法で考える手法。

\*アクティブ・ラーニング Active Learning(AL) グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワークを含む生徒の能動的な学習方法。本講座では主に LTD (Learning Through Discussion) マイクロ・ディベート、ジグソー、Think-Pair-Share、ラウンド・ロビンなどを使用する。

**授業計画**

学期	授業内容	各単元のねらい
1	グローバル 이슈とは何か	グローバル・リーダーに学ぶ TEDx グローバル・リーダーのイメージを獲得する グローバル 이슈の抽出 Mujica スピーチ 仮想水、+6℃、G7 環境会議 コミュニケなどの教材から緊急課題を抽出
2	グローバル 이슈の分析と対策	EEE、BUND をはじめ、すでに一定の成果を収めている先事例を学び、フィールド・ワークの準備をする。居住地域や居住経験のある国などの事例との比較学習を実施する。 本研究開発のフィールドである Freiburg i.B および Hamm/Westf (ドイツ連邦共和国)、Salzburg,Güssing (オーストリア共和国) に関する詳細な調べ学習を実施する。
3	学習成果のまとめ、発信する	比較学習とフィールド・ワークの成果を共有し、発見したグローバル・イシューの解決に向けた学習成果をHPなどで発信する準備をする。 (GUS-2 に向けた準備作業)

2-3●GUS-II=Global Understanding Skills II (第3年次)

2018年度シラバス

学 年	高校3年	必修・選択の別	選択
教科名	任意設置科目	単 位 数	2単位
科目名	Global Understanding Skills II	担 当 者	坂下淳一・帖佐香織
講 座	1講座		

科目のねらい(目標)

SGH 科目である GUS Basic、GUS I で身につけた、グローバルな社会課題や環境問題、環境問題に対する国際的な取り組みや環境先進国・地域の政策についての知識、課題解決のための思考力、リサーチやコミュニケーション、プレゼンテーションのスキルをさらに発展させていくことを目的とした講座である。ドイツ、デンマークへのフィールドワークの成果を他の生徒にも還元、共有した内容を含め、GUS1 でのインプットをもとにして、この講座では、校内での環境改善の立案と実施、自治体への政策提言、国際機関への提言、企業との協業等アウトプットを行う。

「正解のない問題」に対して、異なる教科の教員が担当するアクティブ・ラーニングを取り入れた授業によって幅広い視野を養い、またハンブルク大学日本語科やドイツの Isoldez Kurz Gymnasium の生徒との意見交換、自治体関係者、OECD 東京センター等、国内外の専門家の特別授業や質疑等を通して、様々な知識や価値観との出会いを楽しみ、社会課題の解決に前向きに取り組むことのできるグローバル・リーダーの育成を目標とする。

学習の進め方

以下の3つの内容を中心に進める。

【1】GUS I で学んだドイツ、デンマークを中心に、ヨーロッパの環境問題とその政策・対策をふまえて、身近な自治体の政策や国際機関の取り組みについて学び、世界の現状を広く詳細に理解する。

【2】問題解決の方法論について学ぶ。

【3】学校や地域、国際機関に具体的に反映できる対策を考え、提言・実行する。学校での課題発見・解決から出発し、地方自治体、国際機関への提言、企業との協業へと段階的に進めていく。

生徒の学習上の留意点

- ・知識を得ることはもちろんのことであるが、知識を体系的に理解し、世界、日本、地域や学校というそれぞれのレベルの課題に対して、自らの思考によって問題解決の検討をする姿勢を持つこと。
- ・まずは、個人の知識獲得と状況の理解を必要とする。その上で、グループによる検討を経て、理解度を高める。
- ・単なる思いつきではなく、現状を踏まえ、論理的に考えて政策を提言する姿勢を常に持つこと。

評価方法

授業に臨む積極性、テーマに対する調査・思考力、提出物を中心に評価する。場合により試験を行う。

使用教材

テーマによって、担当者が随時準備する。

授業計画

学期	授業内容	各単元のねらい
1	<p>【1】ドイツ、デンマークのFWまとめ</p> <p>【2】学校のゴミ問題について</p> <p>【3】京田辺市、京都市の環境政策、村の取り組みについて</p> <p>【4】国際機関の取り組みについて</p> <p>【5】企業との協業</p>	<p>FW のまとめレポートを作成し、その内容について校内でプレゼンテーションを実施する</p> <p>まずは最も身近な学校のゴミ問題について課題発見、解決法を考え、実施する</p> <p>京田辺市、京都市の環境政策、村の取り組みの現状を、リサーチや自治体の職員の方々の講義等を通して学ぶ</p> <p>本部に環境局を持ち、G20 への政策提言等を行っている OECD の取り組みについて、OECD 職員の講義等を通して学び、データの見方についても学ぶ</p>
2	<p>【1】政策提言、企業との協業</p> <p>【2】3年間のまとめ</p>	<p>これまで得た知識、問題解決の方法論を元に、解決策を実際に立案し、提言を行い、実際に可能なものは実施を目指し、フィードバックをもらう。提言とその結果についてのまとめを行う。</p> <p>この講座を受講し、得た学びについて振り返りを行い、レポート集を作成する。</p>

# Global Understanding Skills Basic

## 1<sup>st</sup> Year High School



## 3-1-1 ● 2018/04/14 GUS BASIC ー授業ー(高校1年生)

## 第一回 Global Understanding Skills Basic 講座

新高校1年生にとっては聞き慣れないGUS BASIC 第一回目の講座です。GUSとは本校のSGHの取り組みの一環で、SGHとは文科省が国際的に活躍できるグローバルリーダーの育成を重点的に行う高校を指定し助成する制度です。本校は2015年に指定を受け、今期で4年目の取り組みとなります。またこの講座では教科の枠にとらわれず、社会問題に興味を持ち、世界を見る目を養い問題解決ができるように、その中でも本校では環境問題にスポットをあて持続可能な社会を担うグローバル人材の育成を目指します。関心を深めつつ、環境先進国に学び、国際教養に留まらず、コミュニケーション能力、問題解決力に至るまでも幅広く身に付けるプログラムを用意しています。希望者は、1年生で国内フィールドワーク、2、3年生では選択科目となり、海外フィールドワークを経てより理解を深め、そして目標は実際に問題解決のための自分たちのアイデアを提言し実践へと移すことです。

担当の坂下淳一先生から説明を受けた後、一緒にこの講座を担当する先生方からも意気込みをお聞きしました。

戸田光宣先生：世界的な課題は意外と自分と身近なこととつながっていることを感じて、これからの自分たちの人生が少し変わるきっかけになればと思います。

春日清彦先生：グローバルって何ですか？30ヶ国からの帰国生そして日本各地からの一般生のいるこの学校の特色を活かし、違ったバックグラウンドを持つ人達の様々な意見を尊重し、その上で自分の意見の言える人になって欲しいです。

宅間徹志先生：せっかく入学した同国でしかできない様々な価値観を共有し、世界規模の課題も自分に関係する身近な問題と気づき興味を持って欲しいです。

最後に戸田先生より、World English クラス開講のご案内がありました。こちらもGUSのその他の取り組みです。コミュニケーションツールである英語の教育の充実を図るため、英語Iクラスの生徒を対象とします。興味のある人は積極的に申し込んでください。



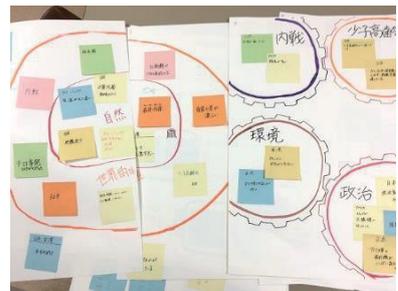
## 3-1-2 ● 2018/04/24 GUS BASIC ー授業ー (高校1年生)

## グループワーク「身近なグローバル 이슈」

今日は各クラスにて、そしてさらに小グループに分かれた取り組みです。出身地、性別などなるべく違った環境で生活をしてきたメンバーで構成されたチーム分けをしました。

机の上には大きな模造紙、カラーペンと付箋、グループではまず各々自分が生活した地域での問題点を大きいもの、小さいものを色分けてして付箋に書き出し、模造紙に貼っていきました。ここからは話し合いにより、問題をカテゴリー分けし、さらにその中からグローバル 이슈（地球規模で解決しないとイケない問題）にあたるものを選別、見た人が理解しやすいよう見栄えにも工夫を凝らします。それぞれの個性の出たものに仕上がっていきます。

生徒たちは、どのグループもとても活発に意見を出し合い、自分たちの過ごした地域の問題を共有しながらグループワークを楽しんでいる様子でした。ここで選別されたグローバル 이슈から、今後より深く学び考えていくことになります。



## 3-1-3 ● 2018/04/28 GUS BASIC ー授業ー (高校1年生)

## MDGS から SDGS へ

今日は、ホールにて「MDGS から SDGS へ」と題して戸田教諭よりレクチャーを受けました。

2000年、世界の平和と安全を目的とする国連は国際会議を開き、2015年までに達成すべき期限を定めた測定可能な8つの目標を掲げた工程表を具体的に示しました。これが国際社会が直面する中心的な議題に対するグローバルな行動計画「ミレニアム開発目標 (MDGS)」です。グローバル化が全ての

人に恩恵をもたらし、また機会の特権を持った人だけでなく、すべての人に与えられるようにと考えられました。実際に8つの目標は、貧困や出生率、教育、感染症などの全ての項目において数値で表され、計り知れない成果をもたらしたことが発表されました。ただ、MDGSによる多くの成功の陰で、実は最も脆弱な人々が置き去りにされ、進展は一様でなく大きな格差を生んでいることもわかりました。根強く残る男女不平等、極度の貧困、気候変動と環境悪化に苦しむ貧困層、紛争による難民、など、MDGS が達成できなかったこれらを新しい課題とし、新しい開発アジェンダ、17 の目標と 169 ものターゲットを設定しました。これが、持続可能な、先進国、途上国全ての国を対象とした普遍的目標「持続可能な開発目標 (SDGS)」です。

例えば最近の気候もおかしい、君たちが係わっている日常の何気ないことにグローバル 이슈が潜んでいるという視点を持って欲しい。そして世界で起こっているいろいろな事は、解決法は 1 つではありません。自分たちは日々の生活で何ができるか、議論を経て豊かな社会が作れないだろうか。君たちは何らかの影響を及ぼすことができます。本日のテーマとも言える「持続可能 SUSTAINABLE」という言葉は、我々が生きる時代のキーワードです。これまでの目先だけの豊かさを見直す時が来ています。

最後の戸田先生のメッセージが心に残りました。

「自分の幸福が、地球上の誰かの犠牲の上に成り立つものであってはならない」



出典：World Bank (<https://blogs.worldbank.org/>)

3-1-4 ● 2018/06/02 GUS BASIC ー授業ー (高校1年生)

Rio+20 でのウルグアイ大統領のスピーチ

これまで様々なグローバル 이슈について知り、考えてきました。今日は、数年前に国際環境会議で特徴的な演説をした人物が紹介されました。そしてその人物が環境問題について投げかけた問いと願いについて考えるために当時のスピーチの VTR を視聴しました。

2012年、主要国代表が集まりこの地球環境の未来について話し合う国際会議で、当初、小国ウルグアイ大統領のスピーチに関心を持つ人などほとんどいませんでした。ところがこのムヒカ氏のスピーチが世界中の人びとの心に響き大きな反響を呼び、ノーベル平和賞の候補にまで選ばれます。ムヒカ元大統領は国民の代表は国民と同じ生活をすべきと、非常につつましやかな生活を送りその収入の90%を寄付していたことから、世界でいちばん貧しい大統領としても知られています。

ムヒカ氏は謙虚でありながら、厳しくも率直な問いかけをしました。

「この会議で話されていたことは持続可能な発展と世界の貧困をなくすことでした。私たちの本音は何なのでしょう？現在の裕福な国々の発展と消費モデルの真似をし、西洋の富裕社会が持つ同じ傲慢な消費を世界の70億～80億人の人ができるほどの原料がこの地球に残されているのでしょうか？」

「私たちが直面する巨大な困難は決して環境問題ではなく消費社会をコントロールできなくなっている明らかに政治の問題なのです。」

「このような残酷な競争で成り立つ資本主義社会で「みんなの世界を良くしていこう」というような共存共栄な議論はできるのでしょうか？」

「グローバリズムを私たちはコントロールできているのでしょうか？逆にコントロールされてはいないのでしょうか？」

「環境のために戦うのであれば、人類の幸福こそが環境の一番大切な要素であるということをおかなくてはなりません。生き方を変える必要があるのです。」

この他にも、これからの環境問題を考えるヒントとなる印象に残った言葉がいくつもありました。VTRを視聴した生徒たちはグループに分かれ、用意された模造紙に、共感できることは青の付箋に、共感できなかったことは赤の付箋に、また具体的にどうすれば実現できるのか、困難なのはなぜか、についても話し合い色分けしたペンでまとめていきました。



### 3-1-5 ● 2018/06/09 GUS BASIC 一授業一(高校1年生)

#### Rio+20でのウルグアイ大統領のスピーチ 振り返り

前回の授業で視聴したRio+20でのウルグアイ大統領のスピーチ、視聴後に共感できる点などをグルー

プに分かれて意見を出し合いました。ムヒカ氏に共感できると感じた生徒たちが多かったなか、今日は、さらにその提言の内容について理解を深めながら、一方で我々の現実の社会を見る時間を持ちました。

私たちの社会の現状は、枯渇するとわかっている化石燃料に頼っています。またモノを作り続け、モノを捨て続ける傲慢な消費社会です。そこで、ムヒカ氏の提言を実行するには、果たしてどのような対策が考えられるかを、下のエリアごとに分けて考えてみることにしました。

- ・身近な生活（個人や家族のレベル）
- ・市や都道府県のレベル
- ・国のレベル
- ・地球全体

生徒たちは、活発に意見を出し合っていました。うまく行かなさそうなことについては、なぜ難しいのかさらに意見を交わしていました。当たり前モノやエネルギーを消費する日々の中で、この1学期に学んだり感じたりした環境問題や環境への配慮、幸せの価値観について、今までよりも意識して過ごす夏休みにして欲しいと思います。

ムヒカ氏は大統領引退後、現在は自らの貯蓄で学校を建設し自国の子ども達の教育に力を入れています。そこでは奪い合うのではなく持っている物の価値を高めていくような教育、考えの種をまいていることでしょう。

ここ国際高校からもそのいくつかの種が芽吹き成長することを願います。



## 3-1-6 ● 2018/06/16,07/03 GUS BASIC —授業— (高校1年生)

## 環境問題総論 —そしてエネルギー問題へ

2回のクラスに渡って、坂下淳一教諭による「環境問題総論」の講義を受けました。

環境問題はごく最近の問題というわけではありません。シンクタンクであるローマクラブは1972年に「成長の限界」を発表し、このままでは100年後には人類の成長は限界に達すると述べています。またバックミンスター・フラーは1963年の著書「宇宙船地球号操作マニュアル」で、地球を宇宙船に例えて、「地球は実に巧妙にできているが、その操作マニュアルがない。したがって、その操作は我々に託されている」と警告しています。また、「保存しているエネルギーを一瞬の間に消費し続けるほど我々が愚かであってはならない」として既にこの頃から警鐘を鳴らしていたのです。

またNHKアーカイブスより、昭和45年の駿河湾の公害問題で漁民たちは企業の責任を迫り、また新宿では車の排気ガスを吸い続けた地元の人たちの血液に過剰な鉛が多く含まれているといった結果が出るなど、この時代は経済発展が優先されさまざまな環境問題がなおざりになった状況を理解しました。

2回目の講義では、環境省が環境白書で提示している9つの環境問題について、理解を深めました。これら9つの問題は独立している訳ではないこと、そして関連性がどこにあるのか、特にエネルギーとの関連性について学びました。化石燃料を使用することが原因で引き起こされる環境問題として地球温暖化、酸性雨等が挙げられる中、先進国としての最重要課題としてエネルギーの節約、環境を悪化させない新しいエネルギーの開拓が求められています。今後はこのエネルギー源の問題に加えて、廃棄物問題にも着目していきたいと考えています。我々の地域での可能性を考え、それを提言することを目標にします。

授業の最後には、このGUS Basicで環境問題に取り組む高校1年生たちが初めて迎える夏に向けて、課題が出されました。宅間徹志教諭より説明がありました。どんな環境対策が取られているか、どの地域でも国でも、関心を持ち調べてくること。中国語の教員でもある宅間先生は、自分ならと例として、「中国での自動車の規制」について紹介して下さいました。人口13億人の中国では、国民が皆自動車を持てば大変な環境破壊に繋がるでしょう。そこで、自動車を持つ人を制限するための様々な政策はとても興味深いものでした。技術面でも世界をリードしようとする中国ではまだ開発途中といえる電気自動車に大きな優遇処置を設け、国を挙げて開発普及に取り組んでいるそうです。それぞれの生徒が環境問題について意識を持ち過ごす夏休みでありますように。



## 3-1-7●2018/09/8,29 GUS BASIC ー授業ー(高校1年生)

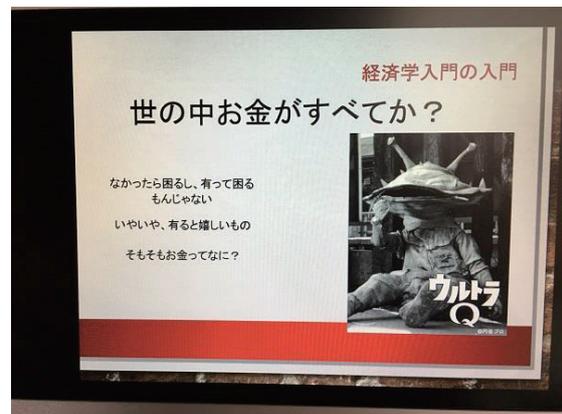
## 環境経済学

世の中はお金が全てか？この問いかけから戸田光宣先生の「環境経済学」の講義が始まりました。これまで世界の環境政策はどのように取り組まれているかを学んできました。環境問題が生じる背景には、お金儲け、つまり利益優先の市場経済の仕組みが大きく関わっています。そこでこの新しいアプローチとしての環境経済学という考え方を知ることがとても大切なのです。

世の中で続けられてきた経済活動、物々交換から始まりやがて紙幣が誕生、産業の発展により人々に莫大な利益がもたらされました。そして18世紀、産業革命を経てアダム・スミスによる「経済学」の誕生です。個人の自由な利益の追求と社会全体の利益の増進が課題となりました。やがてその自由放任主義は、資本家と労働者の不平等や格差を生み出すことになり、新たに国家の計画により平等を目指す社会主義、次に政府が経済への積極的な介入をする修正資本主義が登場することになります。人類の発展とともに社会が形成され、こうして経済活動が営まれてきたのです。

私たちの生きる現代はどうでしょう。様々な考え方がありますが資本主義経済が発展しています。そしてグローバル化のもと、人、金、モノが国境を越えて移動しています。もちろん資本主義では、利益追求が最優先ですが、環境問題と利益追求はトレードオフの関係、つまり双方は両立しないという状態です。経済発展に伴い、同時に私たちは限りある地球の資源をどう消費していくのか、このままの社会活動は果たして持続可能なのかを考える必要が出てきました。戸田先生は、二宮金次郎が残した言葉「道徳なき経済は罪悪であり、経済なき道徳は寝言である」を紹介しました。つまり、トレードオフであるはずの二者ですが、環境対策を実現するための経済活動、つまり具体的な政策手段を追求することが必要なのです。企業にとって環境問題に配慮すれば利益が生まれるといった、環境問題に取り組むインセンティブが必要となります。

これまでの産業中心の市場経済の問題点を見直すとともに、持続可能な社会のあり方とそのための具体的な方策を示すという根本的な課題が存在することを学びました。私たちの周りの社会の動きを注視し、ぜひ興味を持ってもらいたいと思います。



## 3-1-8 ● 2018/10/13 GUS BASIC ー授業ー (高校1年生)

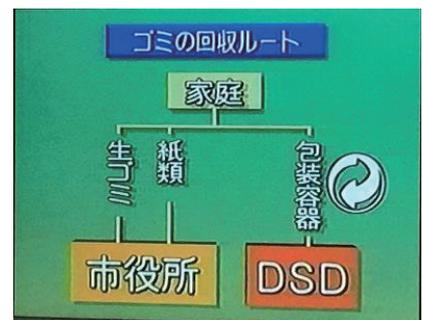
## 包装法が社会を変える ～ドイツでの環境産業革命～

今日の授業はホールにて、既に25年前に始まったドイツでの環境問題に対する政策と取り組みについて視聴しました。先日学んだ環境経済学から1つの政策が実際にどのように社会に取り組みられ、どのような工夫がされているのかについて学びます。

ドイツでは経済活動の中で出る廃棄物を減らすという目的から、当時排出ゴミの50%をも占めていた包装容器に注目し、1991年に企業に対して自ら包装廃棄物の回収と再利用を義務化するという包装廃棄物規制令が執行されました。そこで商品を製造する企業は、包装材を回収するデュアルシステム・ドイチュランド社(DSD社)などに包装材の回収・再利用の費用を支払うことにより、グリーネプンクト(共通のリサイクルマーク)の使用の許可を得て、その商品が無料で回収された後に紙、ガラス、プラスチックやブリキ、アルミなどに分別され企業に戻されるという、各社共通で回収、再利用するという確実に混乱のない仕組みを作り上げました。包装材の性質や大きさによってマークの使用料も異なります。一番再利用が難しいプラスチック容器の使用量は高く設定され、プラスチックを使う企業は、容器をできれば紙やガラスなどリサイクルしやすいものへの変更、またはなるべく小さくして中身の商品を濃縮する改良を進めました。ビンは、各社でデザインを共通にすることで、回収したものを仕分けすることなくリサイクルを容易にしています。そして家庭では品質が良くしかも安い、また無料で回収されるグリーネプンクトマークの付いた商品を買うようになりました。小売店、家庭、メーカー全てが環境に配慮しながら恩恵を受けられる仕組みです。

ドイツ国民は環境問題に対する意識も高く、これは教育現場での小さい頃からの意識改革があり、当たり前前のことを次の世代につないで来た結果であるということもわかりました。ある幼稚園での、食後に自分達でゴミを分別しゴミ捨て場まで持って行く子ども達の様子が最後に紹介されました。

ドイツではこの政策により当初2年間で1割のゴミの削減を実現させ、現在も改良が続けられています。この環境産業革命と言ってもいい社会を変える政策は大量生産大量消費社会への別れを告げるものであると締めくくられていました。経済活動から取り残されていた環境を重要な基点として、廃棄物に注目し環境を守ることを経済原則に乗せたことは大きな注目すべき点と言えます。



## 3-1-9 ● 2018/10/20,27 GUS BASIC ー授業ー (高校1年生)

## フライブルク・イム・ブライスガウ

環境問題政策について様々な事例を学ぶ一環として、今回は坂下淳一教諭より、ドイツの小都市での取り組みから街作りがうまく環境の改善と繋がっているケースについて講義を受けました。

ドイツ南西部のフライブルクは環境問題に積極的に取り組んでいる小都市です。都市の規模によっても政策は変わってきますが、人口 23 万人、身近で想像しやすいサイズ、近くでは寝屋川市と同等です。この街は地方の小都市であり産業が少ないにも関わらず、その印象は美しく豊かで洗練された大都市のようです。大学都市でもあり学生と共に多くの教育関係者が住居を持ちます。また南にスイス、西にフランスの国境が近く、美しい自然と温暖な気候のため多くの観光客が訪れます。歴史を見ると、1970 年代に街の南東に位置する黒い森シュバルツバルトが大気汚染の影響により枯死の危機に直面、そこから環境への意識が一気に高まり、近郊に建設予定だった原発建設計画への反対運動、BUND (ドイツ環境自然保護連盟) の設立などを経て、他の都市に先駆けた環境行政に取り組み、街作りをしてきました。

その取り組みは実に様々です。そのいくつかを紹介します。

## ● 交通対策

主な政策として自動車利用の削減、公共交通機関利用の推進、自転車利用の推進の 3 つの交通政策を行い CO2 排出削減を目指しました。街に自動車が乗り入れをしないことで、ゆったりと歩きたくなる、またレギオカルテでトラムを利用したくなるといった、市民の快適な生活空間の確保ができています。

## ● ゴミ・廃棄物処理対策

1991 年に包装廃棄物規制法が制定され、企業を巻き込み包装材の量的削減やリサイクルしやすい材質への転換が促進しました。街でもゴミ問題に対して、ゴミの削減、出すならリサイクルを徹底、また市民がゴミを持ち込むゴミ処理分別場も雰囲気がいいことから住民が積極的に関わっていることがわかります。

## ● エネルギー政策

市街地の外周を流れるドライザーム川を利用した小規模水力発電などとともに、太陽エネルギー、風力をはじめとした再生可能エネルギーの利用に力をいれています。エネルギー政策のシンボルとして、1995 年に、ドライザーム競技場の屋根に大型のソーラー発電パネルを設置しました。ホテルヴィクトリアでは、地下水を使った冷房システム、風力タービン、太陽光パネル、木質ペレットによるエネルギーで十分に快適な、いわばお洒落なサービスを提供しています。

他にもヘリオトロープといったエコ住宅、ヴォーバンといった住民が自ら建築から携わるエコに配慮した集合住宅など、住民の環境意識の高さを伺うことのできる様々なアイデアが実行され、うまく生活に組み込まれています。こうした政策の結果、市民の生活は快適に、街の価値は上がり、そして市民が誇りを持ち、住みたい街に挙げられるなどの好循環を生み出しています。

## 3-1-10●2018/11/10 GUS BASIC ー授業ー(高校1年生)

## 環境モデル都市 飯田

GUS BASIC 担当のお1人、国語科の春日清彦教諭のご出身は長野県伊那市です。今日はそのお隣の飯田市の環境への取り組みについて春日教諭よりご紹介していただきました。飯田市のホームページでも「おひさまともりが育む低炭素で活力あふれる環境モデル都市」というキャッチフレーズで紹介されています。飯田市は低炭素な社会を実現するために温室効果ガスの排出対策などの高い目標を掲げて先駆的な取り組みにチャレンジする都市の1つとして、2009年に国が環境モデル都市に指定しています。

春日教諭は教員として就職する際に、大好きな地元でしたが就職先が見つからず京都に来られたそうです。それくらい、当時の長野県の南部は過疎化が進んでいました。ところが今、若い子育て世帯の家族が多く住むように変わっています。それはなぜか？

飯田市の主な環境への取り組みは、おひさまともりが育むとあったように、農業の多角化に加えて、太陽光、そして豊富な森林の資源を活用したエネルギー対策に力を入れてきました。飯田市が立ち上げた再生可能エネルギーを提供する電力会社は、多くの世帯が出資し、現在は市内の十分の一の世帯が電気代0を実現しています。またスポーツバイクや電動アシスト自転車を月500円で貸し出すプロジェクトを立ち上げ、通勤通学を自転車にすることで健康と環境の双方の問題解決に取り組んでいます。りんご並木のエコハウスが情報交換や発信の拠点となり、サイクルライフナビゲーターやエコライフコーディネーターなどの存在も通して、楽しいエコライフで生活と意識を変えることが推奨されています。

こうして、一年中農産物が豊かにあり、環境に配慮することで安く安全なエネルギー、そして健康が手に入る暮らしやすい街へとなったことで、若い人たちが戻ってくるという好循環を生み出していたのです。春日教諭もいずれはこの故郷に戻る日を楽しみにされています。環境問題は緊急の課題です。だからぜひこうした考え方を学び、工夫を凝らした仕組み作りが大切だと記憶に残してくれたら嬉しいです。



## 3-1-11 ● 2018/11/17,24 GUS BASIC ー授業ー(高校1年生)

## ドキュメンタリー映画「Tomorrow パーマネントライフを探して」

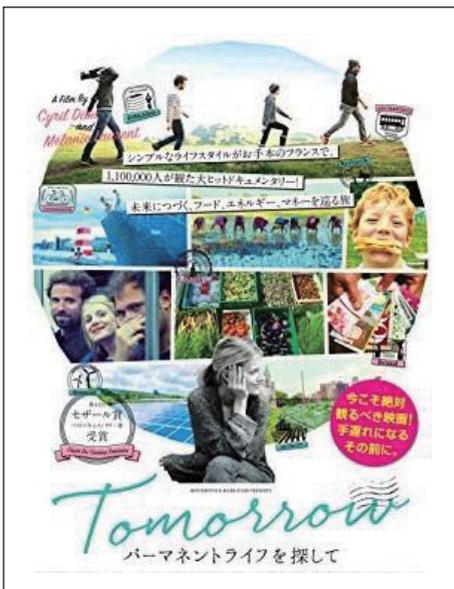
11月17日、24日のGUS BASIC講座では学びの一環として、ホールにてドキュメンタリー映画「TOMORROW - パーマネントライフを探して」を視聴しました。

“人類は絶滅する恐れがある。それも決して遠くない未来に”と2012年に21人の科学者たちが権威ある学術雑誌「ネイチャー」に、私たちが今のライフスタイルを続ければ、人類は滅亡するという論文を発表しました。

この映画は、その“事実”を聞かされたフランスの女優メラニー・ロランが、母になったことをきっかけに自分の子ども達が暮らす未来のために何かしなければいけないと、解決策のヒントを求めて、世界中の“既に新しい暮らしを始めている人々”に会いに旅に出るドキュメンタリーです。

「世界を救うとは言わない、まず身近なことから始めたの」と自分の庭から始めて街中に菜園を広げている人たち、まずは本来の農業と食のあり方、再生エネルギー100%の街、地域通貨やグリーン・エコノミーといった経済モデル、グローバルキャピタリズムに支配されない民主主義、最後は将来に備える教育、様々な場所で様々な取り組みをする人たちと一緒に旅に出て訪ねる感覚で映画は進みます。

小さなことでもいいから自分たちの力で、それも楽しみながらできることをしようということ。そして共感する仲間が集まり、その輪が広がり行政をも動かしていく数々の例は、私たちのSGHの学びにとっても力強いメッセージをくれました。



“女優メラニー・ロランは、監督としてもカンヌ国際映画祭で作品が上映されるなど評価が高く、ファッション誌の表紙も飾る女性たちの憧れの存在。そんな彼女が、活動家・ジャーナリストのシシル・ディオント、フード、エネルギー、マネー、教育の今を巡る旅に出た。“新しい暮らしを始めている人々”との驚きの出会い。世界とつながりシェアしながら、新しいライフスタイルが見えてくる。”

©MOVEMOVIE - FRANCE 2 CINÉMA - MELY PRODUCTIONS

3-1-12●2019/01/12 GUS BASIC —授業—(高校1年生)

「問題を解決する」・・・その手法を学ぶ

今学期も GUS BASIC の講座が始まりました。2 学期最後の講座では、担当の教員が壇上に上がりディスカッション形式で 1、2 学期に環境問題について学んできた概要を振り返りました。3 学期はいよいよまとめです。学んできた知識を礎に、実際の問題解決のためには果たしてどのように取り組めばよいのか実践に移ります。私たちはまず身近な環境問題として学校のゴミ問題をテーマに取り上げています。

今日は、坂下教諭より問題解決のための「手法」についてレクチャーを受けました。問題解決には、まず問題点を分析して論理的に考えていくことが大切です。その手法を学び、実際に自分たちでもそれぞれが考え、手用の用紙に書き込んでいきました。

【 問題点を整理してみよう 】

山積みの問題を、同じカテゴリーのものはまとめて表に整理する

【 考えるべきポイントをフレームワークにまとめてみよう 】

問題点を上げ、その原因、その解決法をロジックツリーに挙げていく

ロジックツリーは問題の原因を探っていくときに有効な一つの手段

【 仮説を立てて検証してみよう 】

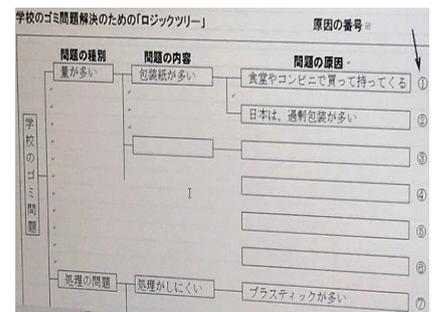
「そもそも・・・ではないか？」と仮説を立てて、なぜそう思うのか検証してみる

【 解決法を吟味しよう 】

全ての解決法に取り組めるわけではないので、取り組みやすさ、効果の高さ、それぞれの要素の大きい解決策をグラフを使って探る

最初は問題だらけで複雑だった事柄が、ロジックツリーに整理していくことで問題点が明らかになり、解決策を見出しやすくなりました。この理論性が大切です。

各自がロジックツリーを完成させ、解決策を挙げて仕上げたものを提出してもらい、次回の授業ではそれを共有しグループワークに取り組んでいきます。



## 3-1-13 ● 2018/12/1 GUS BASIC ー授業ー (高校1年生)

## パネルディスカッション これまでの振り返り

今日の講座はいつもと雰囲気を変え、教員によるパネルディスカッション形式でこれまでの学びを振り返りました。戸田光宣教諭司会進行の元、坂下淳一教諭、そして宅間徹志教諭が舞台上に登場しました。

GUS の取り組みは、こうして教科をまたいだ教員のチームで、それぞれの観点から持続可能な社会形成に向けたリーダーシップについて学ぶ、他の授業ではないものです。持続可能な社会形成というテーマの中でも、国際高校ではグローバルイシューから自分たちの身近なものでもある環境にスポットを充てています。1年生では、その基礎となる知識の習得、今後につながる論理的思考を身に付けます。

戸田教諭「君たちは平成生まれ？それどころか16年しか生きてないのか。もうすぐ年号も変わりますが、僕たちはすっかり古い昭和の人です。実は2020年の東京オリンピックも人生で2回目の東京オリンピックです。」生徒たちはざわざわ。「僕たちは確実に変わってきた世の中の流れや変化を振り返ることができますが、まだ君たちは現在のことで精一杯、未来を見据えることは難しいです。でも考えて欲しいのです。最初に紹介したのが国際環境会議 Rio20 でのウルグアイ元大統領ムヒカ氏のスピーチでしたね。」

坂下教諭「ムヒカ氏の言ったように環境を考えるなら大量消費の資本主義は問題が多いのは確か、でもやっぱり僕も物欲はあります。この文明社会でムヒカ氏のように暮らすことは無理です。だからドイツでの例からも知恵を絞って皆が自然に行動することが環境にも良いという政策作りが大切になりますね。」

宅間教諭「以前紹介した中国での大規模な自動車規制は、実は環境に配慮するための政策ではなくあくまで不便な交通渋滞への対策でした。発展を遂げようとする国では既に発展を遂げた国とは意識も大きく違うので、力で押さえつけるばかりではとても環境問題は解決できないというのが現状だと思います。」

この講座で学んだ SDGs の目標が達成されるべき 2030 年には 20 代後半になる生徒たち、今まで学んできたことをふまえて、気温上昇や資源の枯渇など確実に状況が変わっていく社会で、自由な選択肢の中からどのように行動するかを考える必要があります。GUS 講座で学んできた様々な場所での様々な取り組みから、今後は自分たちで考え、理論的に具体的に思考を深められるよう学びを深めていく予定です。冬休みはいろいろなニュースから、環境問題についても少し考えてみて下さい。

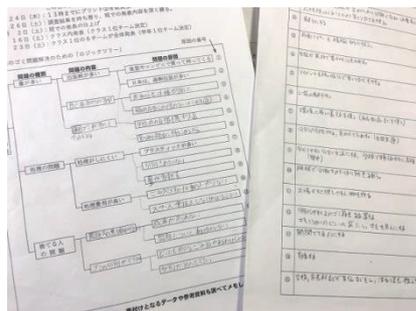


3-1-14 ● 2019/01/19,26 GUS BASIC —授業— (高校1年生)

学校のゴミ問題解決のためのロジックツリー

今日からは、各クラスでグループワークを行います。前回各自が仕上げた問題解決のためのロジックツリーと解決策を持ち寄り、グループに分かれて共有し、意見交換をしました。これからグループで、どの問題をどの解決策で解決しようとするのか更に検証を進め、それを提案するプレゼンテーションの準備をしていきます。この学年の最後の講座では、クラス代表のグループを選出し、ホールにて全学年の前で発表する予定をしています。

生徒たちはプレゼンテーションに向けて、各グループ内でリーダー、書記、調査、パワーポイント作成など役割分担を決定しました。検証する場面では、持ち寄った問題点や解決策にはそれぞれ個性的なものも多く、自分が思いつかないアイデアやひらめきに感心しながら盛り上がっている様子が見られました。今日はいくつか案を絞り、その原因、問題解決策、そしてその取り組みやすさと効果の出やすさを話し合い分析したものをまとめました。

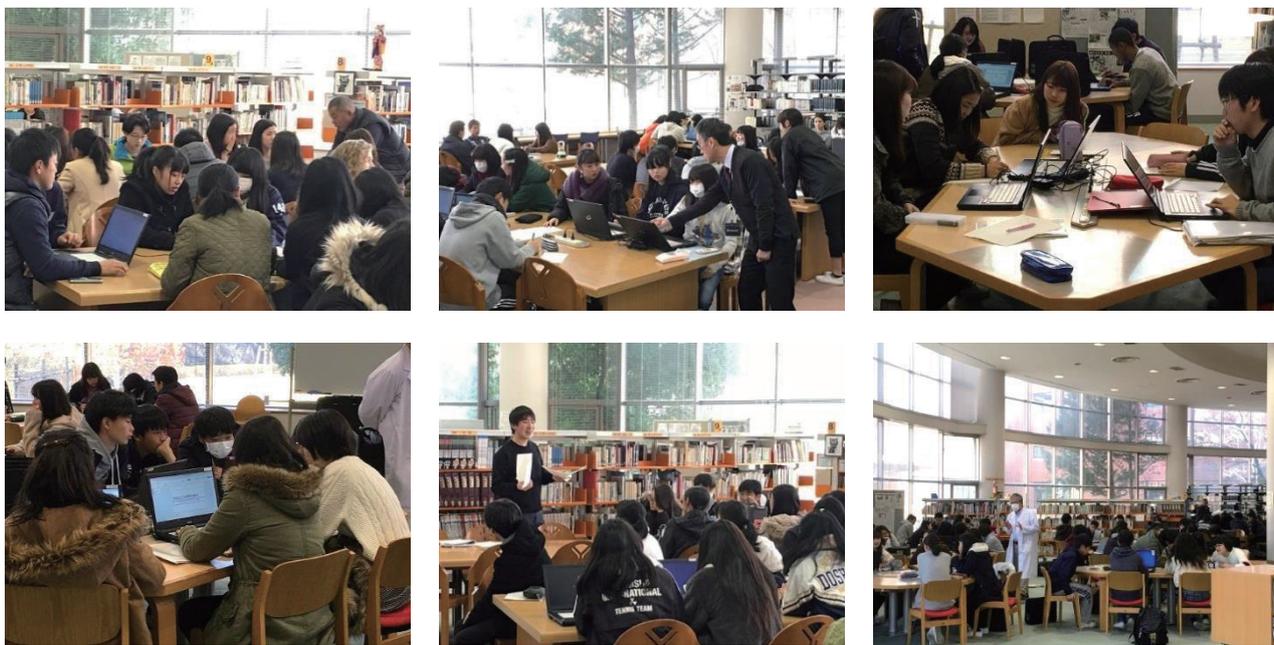


## 3-1-15 ● 2019/02/02 GUS BASIC ー授業ー (高校1年生)

## 問題解決 プレゼンテーションに向けて

今日はコミュニケーションセンターに場所を移し、コンピューターも使いグループワークの続きを進めます。グループで1つの案に絞った学校のゴミ問題とその解決策についてのプレゼンテーションの準備に取り組みました。生徒たちは、プレゼンテーションに盛り込むために、自分たちの案の根拠となるデータや解決策が有効だと説得できるデータの収集もします。それと平行してパワーポイントの草案作成も徐々に進めています。役割分担をしている生徒たちは各自の作業をこなしつつ、しっかりと意見交換を熱心に行っている様子が見られました。

プレゼンテーションの原稿とパワーポイントの草案は教員に提出しアドバイスを受けた後、次回はいよいよクラス内で各グループによるプレゼンテーションを行います。ここで生徒たちは相互評価をして、それを元にクラスの代表グループが選出されることになります。



## 3-1-16 ● 2019/02/16 GUS BASIC ー授業ー (高校1年生)

## 「学校のゴミ問題を解決しよう」各グループのプレゼンテーションと評価

今日は、今までグループでディスカッションをし、まとめあげてきた学校のゴミ問題の解決策について、各クラスでそれぞれのグループによるプレゼンテーションを行いました。大きなスクリーンに用意したデータを映し発表をする各グループ、そして視聴している生徒達はそのプレゼンテーションについて評価シートを記入しました。

それぞれが工夫しとても個性ある発表で、学校のゴミ問題について皆が楽しく検討しあうことのできる時間となりました。どのグループからも自分達のアイディアに対する熱意が伝わってきました。取り上げられていた解決策としては、学校の紙ゴミを減らすための授業ノートやお便りの電子化、掲示板の設置と活用、ペーパーラボの導入による再生紙活用、ゴミの分別については「割れ窓理論」から意識に働きかけるゴミ箱周辺へのキャッチコピーの貼付、そして食堂のゴミ削減としてはタッパー容器の貸し出しなどです。対策導入のメリットとデメリットが分析されていたこと、他での事例や学校のゴミ箱の内容物を実際に調査するなどリサーチが行われていたこと、具体的な案にまとめられていたことなど、これまでの学習の成果を見ることができました。

結果は、生徒達の評価により判断し各クラス代表 6 グループが決まります。GUS BASIC 最後の授業となる来週の授業で、この代表 6 グループが全クラスに向けてホールにて発表をします。



### 3-1-17 ● 2019/02/23 GUS BASIC 一授業一(高校1年生)

#### 「学校のゴミ問題を解決しよう」各クラス代表によるプレゼンテーション

今日は GUS BASIC 最後の授業です。先日選ばれた各クラス代表グループにより、全クラスを前にホールでプレゼンテーションを行いました。視聴する生徒達の手元には、「目的にあっているか」「効果は大きいか」「費用対効果はどうか、内容は妥当か」「工夫があるか」「持続可能な取り組みになるように検討しているか」といった項目の評価シートがあります。

発表の内容は以下の通りです。

A組：食堂の総菜販売容器を使い捨てプラスチック製容器からリユースできるものに変える

- B組：食堂の総菜販売容器を現在のプラスチック製のものに加えて、紙製のものも導入し金額を変えて購入者が選択できるようにする（コストも安く処理しやすい紙製のものを安く設定）
- C組：食堂の総菜を持参のタッパーで購入した場合の割り引き制度を導入する  
ペットボトルの飲み物の販売に代えて、タンブラーで飲み物を購入するサーバーを導入する
- D組：食堂の総菜販売容器を廃止、代わりにタッパーを貸し出しビュッフェ風に販売する
- E組：ネットを利用し、学校の手紙、授業のプリントの電子化を導入する
- F組：学校のゴミ箱を無くし（食堂と教員室以外）、ゴミを捨てない出さないように意識を変える

問題の多くに取り上げられていたのが、食堂の総菜を購入する際のプラスチック容器ゴミ、自動販売機のペットボトルゴミを減らすアイデアでした。プレゼンテーションの準備で、実際にどれほど多くのゴミが日々捨てられているのか、そして対策後はどの程度のゴミ削減が見込めるのかについて調べた生徒達は、改めて学校のゴミ問題の現状と向き合うことになりました。ゴミの削減とともに、手間や、コスト、そして何より自然と楽しく能動的にゴミ問題の解決に取り組もうとする姿勢が見られました。

こうして高校1年生のGUSの学びは、最後にまとめた提案を発表し、それについて視聴する側も一緒に考えるという形で1年間の学を終えました。これまでに、グローバルイシューを知り、解決のための政策の事例や必要な知識として経済学や解決の手法を学ぶことができました。問題解決や人を動かすことは容易ではないことも知り、こうした学びを今後の学びに活かして欲しいと思います。1人1人が環境問題に対して行動のできるリーダーになってくれることを願っています。



# Global Understanding Skills I

## 2<sup>nd</sup> Year High School



## 3-2-1 ● 2018/04/13 GUS I ー授業ー(高校2年生)

## 第一回目 Global Understanding Skills I お互いを知る

「このクラスのルールはポジティブに考えること。人の意見には必ず拍手！」山本先生からの最初のメッセージです。文科省より指定を受け、本校でのSGHの取り組みの一環として、昨年度には全高1生が履修したGUS BASICから高2では選択科目GUS Iとなり、38名の生徒が火曜、金曜と2クラスに分かれて履修します。担当教員は山本真司先生と佐藤靖子先生のお2人です。

まず、「お互いを知る」ことから、大きな円となりGood and Newをしました。24時間以内で自分に起きた良かったこと、何か新しいことを発表し合います。新しい学校生活の始まりについて多く聞かれました。次にアトランダムにチーム分けをし、推理と話し合いで合計得点を競うゲームを通じて、グループダイナミクス、集団における互いの特性について知る取り組みをしました。このときにはもう緊張は一気にほぐれていました。結果の分析は来週のお楽しみです。

この講座では、環境問題を大きなキーワードとしながら1年を通じてプロの講師の方々からレクチャーを受けるなど、さらに視野を広げ、ノウハウを知り、様々な場面でどう行動すべきか、どうすればアイデアを実現できるか考えを深めます。冬休みには、希望者より、ドイツを中心とした環境先進国に学ぶ海外フィールドワークも予定しています。

## 『最後に先生方より』

佐藤靖子先生：未知の世界を知る好奇心を持って、他教科の先生と一緒に作る授業を楽しみにしています。

山本真司先生：経験から発想力を活かし、授業を組み立てます。わからないという勇氣、お互いを尊重しながら、今だからできる失敗をたくさんして挑戦できる授業にしましょう。



## 3-2-2 ● 2018/04/20 GUS I ー授業ー(高校2年生)

## バスはまってくれない(Jigsaw法)「問題解決トレーニング」

初めてのクラスでは、お互いを知る、そして集団におけるお互いの特性を知るゲームを通じてクラス

がずいぶん打ち解けました。今日のクラスでは、まずゲームの検証を行いました。そして自分の言動を振り返りワークシートに記入、その後メンバーとゲームの結果についてその勝敗の原因を話し合いました。

- ・自分はどのような役割を果たしたか
- ・別の切り口で他の人と違った発想をした人がいたか
- ・4回発信できるのになぜ3回しかできなかったのか
- ・2回目で高得点を出したのになぜ続かなかったのか
- ・最後に大逆転できたのはなぜか

などワークシートに沿って振り返って検証を行いました。

検証の結果、お互いに何かを決める時には何が大切なのか、起こったことから互いの欠点を含めてお互いを知り、お互いの特性を活かしながらいま結果を導くことの重要性を学びました。

2時間目には、またさらに違ったゲームに挑戦しました。花子さんが隣の歯医者に行くために地図を作成するのですが、チームのメンバーがそれぞれ違う情報を得て持ち寄り、限られた時間内でその情報を元に白紙の用紙に地図を作成します。その情報には無駄な情報も含まれています。さて、花子さんが無事に歯医者まで辿り着ける地図は作成できたでしょうか。答え合わせをすると、正確に描けている部分、まったく間違っていた部分、自分たちの地図と他のグループの地図を照らし合わせて大いに盛り上がりました。このゲームにおいても、目標に向けてそれぞれの持つ違った情報を持ち寄り、白紙から地図を作り上げる課程で各々の役割を認識してグループで協力し合う大切さと難しさを学びました。



## 3-2-3 ● 2018/04/27 GUS I ー授業ー(高校2年生)

## ドキュメンタリー映画『Tomorrow』を振り返る

高校1年生で受講した GUS BASIC の中で、『Tomorrow』というドキュメンタリー映画を鑑賞しました。何が印象的に心に残っているでしょう。2012年に21人の科学者たちが権威ある学術雑誌「ネイチャー」に、私たちが今のライフスタイルを続ければ、人類は滅亡するという論文を発表しました。この映画は、その“事実”を聞かされたフランスの女優メラニー・ロランが、母になったことをきっかけに自分の子ども達が暮らす未来のために何かしなければいけないと、解決策を求めて、世界中の既に“新しい暮らしを始めている人々”に会いに旅に出るドキュメンタリーでした。

「暗い、重たいイメージのあるドキュメンタリーにおいてこの映画は明るい提案があった」

「制作者のメラニーと共に世界のカリスマからごく普通の人達まで、世界を変えようとしている人達に会いに行くという設定に引き込まれた」

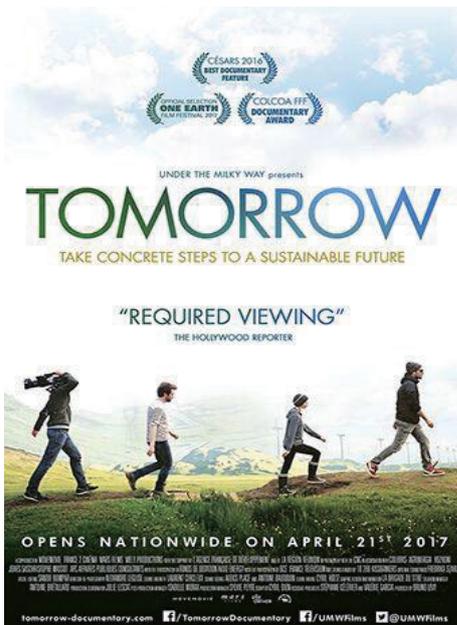
「地球を救おうというのではなく、幸せな明日のためにという身近な行動の提案だった」

「持続可能な社会を作るというゴールへ、行動を起こした人達の様々な情報を束ねていた」

「重たい現実を突きつけられるのではなく、問いかけがあった」

など意見がありました。

そこで、改めてこのクラスでこの映画を深い視点から捉えることを目標として、もう一度視聴することにしました。またこの映画と、先週のクラスで挑戦したゲームは、様々な意見を持ち寄り、白紙から目標に向けて結果を導くという点で共通するものがあります。



©MOVEMOVIE - FRANCE 2 CINÉMA - MELY PRODUCTIONS

3-2-4 ● 2018/05/15 GUS I ー授業ー(高校2年生)

『Tomorrow パーマネントライフを探して』 振り返り

ドキュメンタリー『Tomorrow』を再視聴した生徒たち、グループごとに分かれてディスカッションをしました。子どもが生きていく未来に危機感を感じた主人公が明るい明日を探すため、自分たちのできることを見つけるヒントを求め、実際に行動を起こした人達を訪ねる旅に同行するような形でTomorrowは進行しました。ただ絶望的な世界の現状を突きつけられるということではなく、たくさんのアイデアが軽快な音楽とともに散りばめられ、つながり、さあ次に私は何をしようと思わずにはいられない映画ではなかったでしょうか。

このままグローバル企業による大量生産多量消費の消費型の発展は続かない、続けることはできない。それに気づき、より少ない資源でより自立する人々のチャレンジと成功が大変印象的です。世界は変えられないけれど自分の周りを変えられるわという、行動を起こした人達の声が残りました。そしてその全ての行動は、人と人が繋がり、協力し、楽しくもあり、取り組む人々自身を幸せにするものだったことが明るい明日そのものでした。最後のメッセージはこの言葉でした、「力を合わせよう、明日！」。

生徒たちはあっという間に、真っ白いケント紙を自分たちの感じたことや新しい発見を書き込んだ付箋でいっぱいにしていました。その内容は、人々の自由な発想、大胆な新しい取り組み、コミュニティーの形成、民主主義の尊さ、全員参加の政治、地域のための通貨流通の見直し、大企業と政府の一致による経済の崩壊、人々の多様性などについてです。

来週はまとめをします。



## 3-2-5 ● 2018/05/22 GUS I ー授業ー(高校2年生)

## What is the Global Issue 「Speech by Mujica in the Rio+20」

今日はまず先週のまとめ、映画についてグループで主要な点や感じたことをまとめた内容について、発表を行いクラス全体で意見を出し合いました。多様性、自立、大規模から小規模へ、市民主導、教育、大切なキーワードについてそれぞれの発表から改めて映画で伝えられたかったことの認識を深めました。

次の時間は、新しいトピックとして環境問題について疑問を投げかけたあるスピーチを視聴しました。2012年、主要国代表が集まりこの地球環境の未来について話し合う国際会議で、当初小国ウルグアイ大統領のスピーチに関心を持つ人などほとんどいませんでした。ところがムヒカ氏のこのスピーチが世界中の人びとの心に響き大きな反響を呼び、ノーベル平和賞の候補にまで選ばれました。

ムヒカ元大統領は非常につましやかな生活を送りその収入の90%を寄付していたことから、世界でいちばん貧しい大統領としても知られています。彼はこう言います。

「私は世界で一番貧しい大統領と呼ばれますが、私自身は貧しいと感じていません。かつての賢人たちはこう言っています。貧乏な人とは、少ししかモノを持っていない人ではなく、無限の欲があり、いくらあっても満足しない人のことです。」

そして謙虚でありながら、厳しくも率直な問いかけをしました。

「この会議で話されていたことは持続可能な発展と世界の貧困をなくすことでした。私たちの本音は何なのでしょう？現在の裕福な国々の発展と消費モデルの真似をし、西洋の富裕社会が持つ同じ傲慢な消費を世界の70億～80億人の人ができるほどの原料がこの地球にあるのでしょうか？」

「私たちが直面する巨大な困難は決して環境問題ではなく消費社会をコントロールできなくなっている明らかに政治の問題なのです。」

「このような残酷な競争で成り立つ資本主義社会で「みんなの世界を良くしていこう」というような共存共栄な議論はできるのでしょうか？」

「グローバリズムを私たちはコントロールできているのでしょうか？逆にコントロールされてはいないのでしょうか？」

「環境のために戦うのであれば、人類の幸福こそが環境の一番大切な要素であるということをおかなくてはなりません。生き方を変える必要があるのです。」

この他にも、これからの環境問題を考えるヒントとなる印象に残った言葉がいくつもありました。





### 3-2-6 ● 2018/05/29 GUS I ー授業ー (高校2年生)

#### Rio+20 地球サミットでのウルグアイ大統領のスピーチ 振り返り

前回の授業で視聴したウルグアイ元大統領ムヒカ氏のスピーチを振り返ります。

まず個人で印象に残った言葉、主張などを書き出した後、次はグループに分かれて個人の意見を出し合い、さらにその中から重要なメッセージだと思われる 3 つのキーワードを導き出すために話し合いました。3 つのキーワードとそれを選んだ理由も含めて代表者によるプレゼンテーションを行いました。

出たキーワードは、各グループで共通するものも多く「幸福」「政治」「グローバリズム」「発展」「協力」「仲間」「生き方を変える」「消費社会」となりました。

「環境のために戦うのであれば、人類の幸福こそが環境の一番大切な要素であるということをおかなくてはなりません。」というムヒカ氏の主張に、幸福の感じ方は個人で異なるといった意見が出ていました。ムヒカ氏は西洋の成功事例をただ同じようにまねることを幸せとは考えず、またそれは持続可能な発展とは言えるのだろうかという疑問を投げかけました。共感する意見が多かったのと同時に、グローバリズム、そして多様な社会で、人類が協力し環境問題を解決しようとする事の難しさを改めて痛感する機会にもなりました。

ムヒカ氏の印象に残るいくつかの言葉は世界中に種をまき、そのいくつかが若い人達の手により芽吹く日が来ることを感じさせられます。





### 3-2-7●2018/06/05 GUS I ー授業ー(高校2年生)

#### 「水」を中心に世界の関連を読み解く Virtual Water ー仮想水ー

今日の講座では、Virtual Water について理解を深めました。環境を考えると、水問題は大きな課題です。地球はその 80%が海、豊かな水資源に恵まれた惑星です。しかし、飲める淡水はその内の 3%ほどで現実には枯渇の危機に直面しようとしています。そして Virtual Water とは、仮想水、私たちが日常に使っている水ではなく、日常に摂取している食べ物に使われてきた水、目には見えないけれど消費している水です。私たちは実際にどれほどの水を消費しているか、環境省のホームページでその水の実態を知ることができます。

「牛丼 1 杯が口に入るまでに消費された水はペットボトル 3 千本？」

「ハンバーガー 1 つでは 2 千本？」

実際に昨日食べたものをシュミレーションしてみた生徒たちは驚きが隠せませんでした。私たちの住む日本は、豊かな水資源に恵まれていると思っていました。水に困るといふ話はもちろん聞きません。しかしこの Virtual Water を考えると、食品の自給率が低い日本では他国で生産される食品と共に実際には他国の水を大量に消費していると言え、もし食料を全て自国で生産することになると十分な水資源は残されないのです。水に困っていないのは、食品を他国に依存しているからという皮肉な現状を知りました。

世界で起こる水の危機を自国の危機と捉える自覚が足りなかったことに気が付いたのです。

続いて、深刻化する水問題、世界で起こっている水の戦争を取り上げたドキュメンタリー「Blue Gold 狙われた水の真実」の前半を視聴しました。2003 年に出版された『「水」戦争の世紀』モード・バーロウ、トニー・クラーク共著を元に制作されたものです。21 世紀、人類は「水」をめぐる争うようになります。利用可能な淡水が地球規模で急速に減少するなか、全人類の共通の財産であるはずの水は一部の大企業に独占されコントロールされつつあるという恐ろしい現状についての報告です。



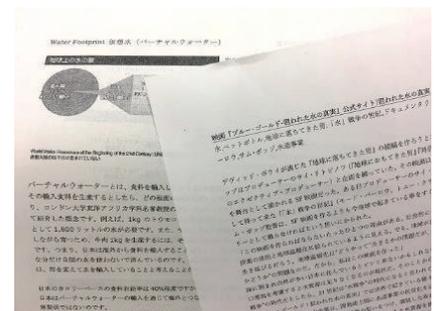
3-2-8 ● 2018/06/12 GUS I ー授業ー (高校 2 年生)

Blue Gold ー狙われた水の真実

今日は水の戦争についてのドキュメンタリー『Blue Gold 狙われた水の真実』後半を視聴しました。このドキュメンタリーは映画制作を手がけるサム・ゴット監督がもはや SF の世界のことでなくなつた水危機の現状を知り、少しでも多くの人に少しでも早くこの事実を知らせなければと制作されたものです。水がなくては人類、生物は生き延びることはできない、水危機は私たちが生きられるかどうかの大変重要な問題なのだ。

ドキュメンタリーには、誰もが知る清涼飲料水メーカーが登場します。こういった大企業は、今世界中で淡水の利権を求めて徐々に皆の共有の財産であつたはずの水を独占しつつあります。干ばつや水の枯渇、汚染といった根本的な問題からは目を背け、さらなる利益追従のために水を搾取し続ける大企業。かつては巨大で豊かな水を蓄えていたのに、規制のないまま水が汲み上げられ干上がってしまった湖も存在します。その現状とともに紹介されたのは、自分たちの財産である水の権利を守るためにこういった大企業を相手に勇敢に立ち上がり、法廷で争つた住民達、小学生の時のわずか 70 ドルの寄付からスタート、学校、地域へと訴える場所を広げ、ライアの井戸財団が立ち上がり今では途上国の井戸建設を支える青年、そして同じように 1 人でボトルウォーターの購入をボイコットすることを学校、商店、地域で訴え、政治家に手紙を書いた少年でした。小さな声でも声を上げ、また私たちにできることを行動に移すということについてクラスの誰もが考えさせられたドキュメンタリーでもありました。

「水戦争」これは私たちの戦争なのです。



3-2-9 ● 2018/06/19 GUS I -授業-(高校2年生)

「水」について 振り返り

私たちは、Virtual water -仮想水- では実際に目には見えないがどれほど多くの水を私たちが消費し、またその多くが国外の水であること、そして Blue Gold -狙われた水の真実- では、全人類の共有の財産であるはずの水が商品化され大きな資本に独占されようとしている現状を知り、改めて水問題が危機的状況にあることを学びました。

今日は、グループに分かれ 2 つの側面から学んだ水の問題を改めて振り返り、そこから重要なキーワードを出し合い、どのような問題提起をしているか、そして自分たちが考えた問題解決策について意見を出し合いました。その後、話し合った内容について各グループによるプレゼンテーションを行い、皆でシェアした後、疑問点や感じたことを発表し合いました。

多くの生徒たちが感じたことは、当たり前を買っていたペットボトルの水ですが、そもそも生きるために必要であり皆の共有財産であるはずの水が商品化されていることへの再認識、疑問でした。また自分たちには水が豊富にあるものだと思っていたことに対する大きな過ちでした。大資本によって利権が専有されそして商品化される水、その水が価値あるものとして当たり前に売買される私たちの社会は、その一方では陰で貧しい人達が高価な水を買えず不衛生な水で生活し、火災が起きても高価な水を使用できず命さえ救えない犠牲の上に成り立っているという不条理な現実がありました。

今回学んだ水の問題は、消して環境問題に意識の高い人達の問題ではなく、1人1人皆の問題だということをもっと社会に知らしめないと行けないという生徒達の問題解決への気づきがとても印象的でした。



## 3-2-10●2018/06/26 GUS I 一授業－(高校2年生)

## 1 学期振り返り GUS を選択して

環境問題を取り巻く様々なトピックを取り上げ、グループワークやレポートを通して問題を掘り下げ考えてきた1学期でした。今日は最初に学んだことを振り返るテストをした後、1人1人全員が1学期を終えて感じたこと、感想など発表する時間を持ちました。どの発表もそれぞれ真剣に問題に取り組んできた様子がよく伝わり、素晴らしいクラスであるということを再認識しました。いくつかを紹介します。

- ・ 普段の生活では全く知らなかった環境問題の側面、また取り組む人達についても知ることができて衝撃を受けたり感動したり、それを皆出話し合うことでとても視野も広がった。
- ・ 日々の生活の中でふと環境について考え、疑問を持ち、習慣を改めるようになった。
- ・ 環境問題に自分たちも荷担していることに改めて考えさせられた。
- ・ なんとなく気になっていた環境のことに、毎週じっくり向き合い考え、国際らしい様々なバックグラウンドをもつ仲間と話し合える機会があることを本当に良かったと思う。
- ・ とにかく『有意義』だった、笑顔で環境問題に取り組む人々の姿を知ったとき、まさに自分の将来の理想だと感じる事ができた。
- ・ 違ったトピックのレポートをまとめるうちに環境の様々な問題は実に絡み合い、全て根幹では繋がっていることに気付かされた。
- ・ 表面的な環境問題しか知らなかった。うわべだけではなく、その奥のこと、また政治や人間の幸せの価値観が大きく影響していることを知ることができた。これからもそういう物の見方をしたいと思う。

このクラス特有の多くのレポートやディスカッション、プレゼンですが、苦手だったができるように、楽しくなってきたという意見が多く聞かれました。これからも生徒1人1人の気付きや成長が楽しみです。2学期にはグローバルな現場で活躍するプロフェッショナルな講師の方々を多くお招きし、さらに多くの刺激を受けるクラスになる予定です。



## 3-2-11 ● 2018/09/07 GUS I ー授業ー(高校2年生)

## レポート返却とアドバイス

夏休み明けの第一回目の授業となった今日、1学期最後に取り組んだ理解度確認テストと以前に提出していた2つのレポート「Blue Gold」「Tomorrow」について、1人1人教員から返却しそれに対してのアドバイスを受けました。レポートはその内容はもちろんですが、書き方など形式も評価の重要なポイントとなっているため、皆熱心に聞いていました。

レポートを返却する間、他の生徒達はGUS Iで講師としてお招きする精華大学学長サコ先生についての理解をより深めるために出演されている番組のビデオを視聴しました。サコ先生の講演は、GUS Iの2クラス合同で9月11日(火)15:20より予定されています。

また、本日は大きな社会現象を巻き起こした「#Me Too」について取り上げたドキュメンタリーを皆で視聴する時間も持ちました。「#Me Too」運動の始まりは2017年10月に、絶大な権力を持ったアメリカのハリウッドの映画プロデューサーワインスティーンによるセクハラ疑惑が報じられたことに起因しています。この報道に女優のアリッサ・ミラノさんが同じようなセクハラ被害を受けた女性たちに向けて”me too”と声を上げるようTwitterで呼びかけたことで始まった運動とされています。こうして沈黙を破った女性たちによりワインスティーンは窮地に追いやられています。こうしたSNSを介して大きな波を作ることで、世界中に瞬く間にこの運動が広がっています。ひどい事件を振り返るとともに、この事件がどう解決されたかについても大変興味深く印象に残りました。



## 3-2-12 ● 2018/10/12 GUS I ー授業ー(高校2年生)

## プラスチックゴミについて考える ー新聞記事からー

多くの方が貧困に喘ぐ国へと広がっている私たちの使い捨てのライフスタイルと大量のプラスチックゴミによる環境問題。この現代社会が抱える大きな矛盾の象徴でもあるプラスチックゴミ問題につい

て、2回の授業にわたり、考え、意見を共有し、検討する時間をもちました。

第1回目は、プラスチックゴミ問題について書かされたいくつかの新聞記事から、第2回目は各自がインターネットからさらに広く集め、情報を共有していきました。用意した真っ白なケント紙があつという間に生徒たちのポストイットに書き出したキーワードでいっぱいになるほど多くの情報が溢れていました。

海に漂うマイクロプラスチックについてはSGH第1期生より注目して来ましたが、世界でもこの問題については大きく取り上げられ、そして官民間問わずその対策が年々大変活発に議論、そして実施へと移されています。6月のG7サミットでは海洋国家である日本が「海洋プラスチック憲章」への署名を見送り愕然となったものの、その後日本も国際協調路線へ動き出しました。海洋プラスチック憲章には「2030年までにプラスチック包装の最低55%をリサイクルまたは再使用し、2040年までに100%回収する」などの達成期限付きの具体的な数値目標が盛り込まれています。日本が署名を見送ったのは、国民生活や国民経済への影響を慎重に検討する必要があると判断したためでした。それでもそのこと以上にこの問題が深刻化し無視できなくなっている現状があります。

生徒たちは、グループ内で分担し疑問も含めて様々な記事を集め、調べていました。その中で、消費者の意識改革、新しい素材PLA、環境問題のビジネス化、他国の政策と実績、サーマリサイクル、エネルギーリカバリー、そしてバイオハザードやスペースデブリまで多くのキーワード、トピックがテーマとなり、最後にはグループ事に意見を共有し発表しました。使うな、捨てるなと言う前に、環境問題に自然に、または有益性があるから取り組む社会への変革が必要だということも認識させられたようです。



### 3-2-13●2018/10/30 GUS I 一授業一(高校2年生)

予言されていた環境問題 ～風の谷のナウシカを視聴して～

2回の授業にわたり、「風の谷のナウシカ」を視聴、また視聴後はMind Mapという手法を用いて感じたことを生徒一人一人が書き出し整理する作業に挑戦しました。

風の谷のナウシカが上映されたのは1984年、今から33年も前のことです。主人公はナウシカという風の谷を守る強く心優しい信頼されるお姫様です。ナウシカの住む時代は7日間で地球を焼き尽くしたという火の七日戦争から1000年後、人間によって汚染された地球には腐海という人間が立ち入れば死んでしまう多種多様な虫たちだけが住む森が点在しています。相変わらず人間は戦争を続け殺伐や飢餓が蔓延していますが、この腐海も徐々に浸食し風の谷に迫っていました。宿命を受け入れその腐海とも共に生きようとする風の谷の人たち、そして過去の兵器を復活させ力づくで腐海を滅ぼそうとするトルメキアの人たちが対照的にまた印象的に描かれます。

生徒たちは映画を鑑賞した後、早速各自の感じたことを書き出し **thinking tree** に沢山の枝葉が付きましました。そこでは映画に登場する、ナウシカ、風の谷の人たち、トルメキアの女王クシャナ、七日戦争の兵器巨神兵、腐海の森、腐海の森を守る王蟲（オーム）などそれぞれが何か私たちの社会の象徴だと感じました。映画の作られた時代に環境問題はまだ社会問題として取り上げられることがなかったにも関わらず、この映画は私たちの現状を予知するように描かれたかのようです。またナウシカは攻め込んできたトルメキア軍に父を殺され、怒りと憎しみから我を見失い、殺伐をしてしまう自分をとて責めます。その後は敵として描かれる相手も命がけで助けるナウシカの姿に心を打たれます。失われし人々との絆、自然との絆を取り戻すといえるラストシーンでは、誰もが現代社会の問題と重ねてその意義を考えさせられたのではないのでしょうか。



© 1984 Studio Ghibli・H

3-2-14 ● 2019/01/18,25 GUS I 一授業一(高校2年生)

インクルージョン 共生社会を考える ～「聲の形」を視聴して～

見終わると教室が静まりかえったまま、すぐに誰も言葉の出ない気持ちの揺さぶられる作品でした。今回視聴した作品は、いじめっ子のレッテルを貼られたまま高校生になった石田くんが自殺までのカウントダウンをしている場面から始まり、問題を乗り越えて成長し生きようと思えるまでの物語です。

主な登場人物は小学校からの同級生たち。主人公の 1 人、転校生の西宮祥子さんは優しく控えめな女の子です。ただ彼女は耳の聞こえないことから多くのサポートを必要とし、そのために彼女と意思疎通することは少し面倒なことです。彼女を助け、また関わろうとした友達は、伝えたい、伝わらない悔しさと不安、少しずつそのことから苛立ちが積み、結果的に西宮さんをそれぞれのやり方でいじめることになります。いじめたのは誰だ、教師からクラスで名指しされた石田くんは、弱い物いじめをしたいじめっ子だとして、その日から突然いじめの対象となります。そのレッテルは貼られたまま進学し、友達への不信感、そして西宮さんに対して取り返しのつかない事をした自責の念は積み、誰とも関わりを持たず孤立するようになります。

死を選ぼうとしたのは、西宮さんも同じでした。「私さえいなければ」、お互いが相手を不幸にしていると思い、苦しみの中にいたのです。2 人に共通する想いは、自己否定とそして本当は自分を好きになりたいという気持ちでした。葛藤の末にようやくお互いの心が通じた時、生きるのを手伝って欲しいと伝えることができました。

伝えること、知ろうとすることが噛み合わず、人間関係がこじれて行く様子はとても歯痒いものです。その他大勢のように無関心でいれば誰も傷付かなかったのでしょうか。少なくとも西宮さんという転校生と関わり、それぞれが違ったアプローチをしている登場人物達のそれぞれの個性に自分を重ねた生徒も多かったのでは。

終わって生徒たちはディスカッションの時間を持ちました。相手の立場に立って考えることの難しさ、気持ちを共有することの大切さ、障害をもつ仲間をどのように迎えることが正しかったのか、どうすれば気持ちをつなぐ「聲」を交わせたのか、生徒たちの感想も想いも様々です。皆が自分を好きでいられる社会を目指すために学んでいく必要があるのだと改めて感じさせられる作品でした。



### 3-2-15 ● 2019/02/15 GUS I 一授業一(高校2年生)

#### 「ドイツ フィールドワーク報告」参加者によるプレゼンテーション

昨年の 12 月、ドイツフィールドワークに参加した生徒達による参加報告をクラスで行いました。参加した生徒達は、訪れた機関ごとに担当を決め、パワーポイントを使ってプレゼンテーションをしました。

## 【フライブルク】

最初に訪れたこの街では、旧市街の多様性のある街づくり、そして木工ワークショップや環境教育ワークショップ、森林ワークショップを通して、ドイツでは森が生活の近くにあり、森や自然を育み共生する意識が自然と人々に備わっていることを実感しました。持続可能という言葉が、森林と共生するための手法からドイツで生まれた言葉だということも初めて知り、自分達の生活を守るために当たり前の意識なのだということに改めて気付かされました。

## 【フライアムト】

ドイツ南西部の村、フライアムト。この村では、住民が中心となって再生可能エネルギー事業を行っています。ドイツ語で「フライアムト」とは「自由自治」の意味で、石油産出国に頼らずエネルギーの自給自足を目指すという方針で、住民自らがお金を出し、運営する仕組みを通じて地域経済を活性化させていることから、現在もその精神が受け継がれていると感じます。訪ねた農場では、風力、太陽光、バイオガスなど多様な取り組みにより、今では完全な自給自足を実現していました。森林資源や河川など地域の特性や資源を活かして電力を生産できることが再生可能エネルギーの特徴であり、それを可能にしている村を訪れたことは大きな学びになりました。

他にもカーボンニュートラル視察、包装を一切使わないスーパーを訪問してのインタビュー、総合医療福祉施設ベートルでのインクルージョン授業の見学、環境委教育施設での実習を通して、生徒達はドイツでの環境に対する人々の意識の高さ、共生できる社会、そして次世代に豊かな資源を繋ぐことのできる社会が今の人々の生活も豊にすること、それを伝えることがまず大切だと考えました。

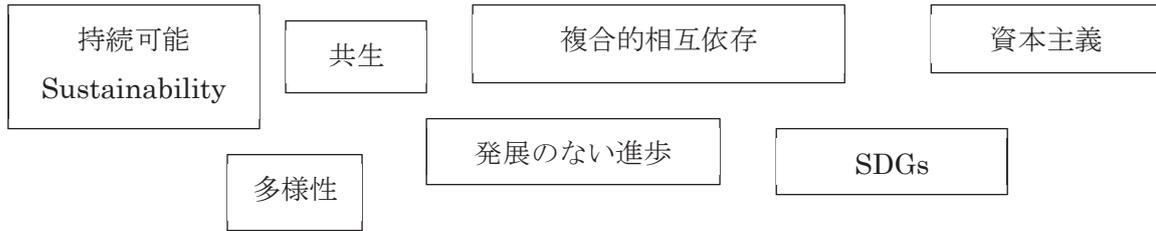


3-2-16 ● 2019/02/22 GUS I 一授業一(高校2年生)

次年度へ向けてアイデアを出し合おう

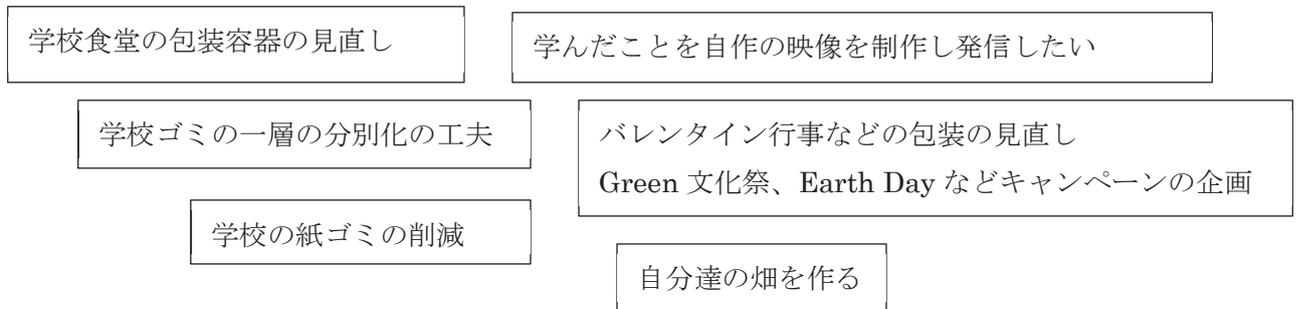
「そもそも私たちのゴールは何でしたか？」

先生の問いかけから、まず1年間のクラスの中でのキーワードを出し合いました。



生徒達からは活発な意見が出て、何を学び考えたのか、そしてこれまでの学びをベースにこれからの私達に何ができるだろうということを考える時間を持ちました。来年度はアウトプット（発信）をする予定です。どのような行動が起こせるのか、グループになりさらに意見を出し合いました。

グループごとのまとまった意見は World Coffee 形式で、説明するマスターを除くメンバーが他のグループを回ってアイデアを聞き、自分たちのアイデアも出し合うという形で意見交換をしました。



まずは自分達の身近で始められること、そして環境問題を提言する学校としてまずは学校での取り組みをしてモデルケースを作ることが必要であることを感じていました。





# Global Understanding Skills II

## 3<sup>rd</sup> Year High School



**学食の廃棄物 減らしたい**  
同志社国際高生 運営会社と意見交換

同志社国際高校（京田辺）の3年生たちが、校内の食堂から出る廃棄物を減らせないか、検討している。使い捨て容器や割り箸を使わないようするための「マイカップ」や「マイ箸」の普及といった対策の実現に向けて動き出した。2年生

同志社国際高校（京田辺）の時に環境問題がテーマの授業を選択した25人。このうち8人は3月、先進的な環境政策で知られるドイツと「テンマーク」での研修に参加し、成果を共有した。最終的な目標は、自治体に環境問題の解決策を示すことだ。そのステップとして、食堂の廃棄物を減らすことだ。今月6日には食堂運営会社の担当者2人を招いて意見交換をした。

生徒側からは弁当を入れるプラスチック容器や使い捨てのドリンク容器を減らす方法を提案。紙容器にして「マイ箸」を普及させ、割り箸は有料化▽「マイカップ」に対応したドリンク自動販売機の導入―などで、コスト面のメリットも説明した。

会社側が「衛生面で不安がある」「機械の購入に経費がかかる」と難色を示す場面もあったが、「会社の規定に沿い、校内での事前告知もすれば実践が可能なこともある」という見解を引き出した。

生徒たちは来年2月まで検討を重ねる。渉外・交渉を担当するグループの松山花季さん（17）は「環境に良いのは単純に考えているが、会社のルールや衛生基準など、知らなければいけないことが多いんだと感じた」と話した。

（伊藤 悠）

## 3-3-1 ● 2018/04/17 GUS II -授業-(高校3年生)

## 第一回 Global Understanding Skills II

このクラスは GUS I 講座より引き続き 2 年目となります。ドイツを始めとする環境先進国に学び、理解を深める取り組みを継続しながら、いよいよ実践的に自分たちのアイデアを発信し形にしていく挑戦をします。坂下淳一先生、帖佐香織先生が今年もご担当して下さいます。

本日は、3月にヨーロッパ研修に参加した生徒たちからの報告がありました。調べる段階ではよくわかっていなかったことの多くが、実際に現地に行って感動と共に理解へと繋がる体験をしました。先生からも、生徒たちの積極的かつ素直に学ぶ姿勢がどこの研修先でも好評だったこと、トラブルがあった時も前向きな姿勢だったことなど、とても誇らしかったと感想を話されました。

研修について行った人いなかった人もまず同じ情報を共有することを目標として、生徒、教員の共有フォルダーに保存された写真やメモ、そして本日の報告から、各チームでカテゴリー事にヨーロッパ研修についてさらにまとめの作業に取り組みました。来週は、そのまとめを他の教科の先生方もお招きしクラスで発表をします。



フライブルク



グォバン地区



ブライトナウ村



フライアムト村



ハンブルク



コペンハーゲン

## 3-3-2 ● 2018/05/01 GUS II ー授業ー (高校3年生)

## ドイツ・デンマーク フィールドワーク報告とまとめ

研修に参加したメンバーを中心として、訪問先で得た情報、学び感じたことをグループ事に共有しまとめた生徒たち、今日はその全体発表会です。相互理解をより深め、個人個人も自分の意見を持つことを目的としています。この機会に川井校長先生始め、他教科の先生方もお招きしました。

フライアウト村やブライトナウ村といった小さな村でのエコ活動への取り組みで共通していたのは、行政ではなく自治体として村民が行動を起こし主導して行動していることでした。次の世代のことまで見据えた計画、自分たちの大切な資源を最後まで使い切るシステム作りには驚きました。関わった方達の朗らかさと親切さ、そしてどちらも小さな村であっても、過疎とは無縁の美しく住みたくなる村です。またそこから移動したフライブルクといった中規模の都市では、交通政策が徹底されています。街中に車が入らないように規制するだけでなく、車ではなく公共交通機関や自転車を使いたくなる多くの工夫がされています。交通規制以外にもスーパーでのリユースやデポジット、ゴミの分別においても効率的なシステムが構築され、街の人達が満足して広く運用されていることが印象的でした。

この他にもエネルギー自給自足と泊まりたくなるハイセンスさを見事に兼ね備えるホテルヴィクトリア、デンマークではエネルギーや食料の地産地消で地域活性を実践しているロラン島、再生可能エネルギーの可能性にかけデンマークのヴェスタス社と洋上風力発電の開発に取り組む日本企業三菱重工、大都市ハンブルクでの領事館訪問、そしてコペンハーゲンでのゴミ処理施設の傾斜を活かしたスキー場についてなど、2時間ではとても足りない研修先についての充実した発表となりました。

印象的だったのは、生徒1人1人、学んだことから自分の意見がはっきり述べられていたことでした。この発表内容を、昨年より取り組んできたリサーチブックに盛り込み、いよいよ完成です。



## 3-3-3●2018/05/15 GUSⅡ ー授業ー(高校3年生)

## 学校の『環境』改善案を

これまでこのクラスでは昨年より具体的に環境問題・政策について学習してきました。

この4月からは、状況を理解するだけでなく、自分たちの考えを社会に発信していく姿勢も持とうとしています。

まず取り組むのは身近な学校から、そして自治体をというように、考える規模を大きくしていきたいと考えています。

そこで、まず今日の授業で取り組んだことは、身近な学校の問題についてグループで話し合い、具体的に事案をどんどん挙げてみることにしました。その際、大きく廃棄物関連、エネルギー関連、都市計画・交通政策関連の3つのカテゴリーに分類してみました。たくさん挙げられた事案について、その原因を理論的に分析し、対策についても検討をすすめました。これまでの事前学習や研修先で学んだことから、学内のゴミ問題について注目しているグループが多いようです。

次のステップでは、取り上げた問題点、その対策について、生徒1人1人が個人で評価をしていきます。目の付け所はいいか、期待できる効果の大きさと実施における難易度をグラフに付けて比較検討します。最後は、そのデータを元に再びグループで話し合い、各グループから1つの案としてまとめる作業に取り組みました。実際に学校の皆に協力してもらえるか、参加意欲を得られるか、また費用についてなど、現実的か考慮することが重要です。



## 3-3-4●2018/05/22,29 GUSⅡ ー授業ー(高校3年生)

## 学校への提言

現在クラスでは、学校への環境対策の提案をまとめる作業に取り組む一方、完成間近のドイツの環境対策について調べ上げてきたリサーチブックに加えるいくつかの都市、機関の環境対策についてもグループに分かれて調べを進める作業を進めています。

学校への環境対策の提案では、活発な意見が飛び交う中で、あくまでもすぐ実施可能な案を優先する

ことを決めました。まず実施してみる、そしてそこから発生する問題点などについてまで調べ、また次に続けることが大切だと考えています。

#### 【現在出ている学校への環境対策案】

- ・クラス事に競う形で、ゴミの量を減らし、ペットボトルのキャップのリサイクルを進める
- ・掲示板への電力消費量の掲示と、具体的な目標数値を設定し節電の意識を高め行動する
- ・学校内で環境委員会を作り持続的に取り組む
- ・食堂の総菜販売の容器をリフィル式システムへ変える

#### 【新たに環境政策の取り組みを調べている地域、機関】

- ・京田辺市
- ・京都市
- ・ハンブルグ
- ・コペンハーゲン
- ・OECD

来週は、OECD 東京センターより政策提言の最前線でご活躍されている講師の方をお招きし、現場での取り組みや課題について具体的にお話を聞く機会も持てることになりました。生徒たちは来週までに講演に向けて下調べなど準備をする課題にも取り組みます。



### 3-3-5 ● 2018/06/12 GUS II 一授業一(高校3年生)

#### 学校への提言 学校環境改善案の決定

各グループで意見を出し合った学校への環境改善案について、食堂の総菜販売の使い捨て容器をリフィル式システムにする計画を提案することが決まりました。具体的には、食堂で販売しているフライドポテトなどの総菜は、持参した容器に入れてもらう、またデポジット制の有料容器も販売してもらうというものです。まだまだ問題点の克服など改善していきます。そこで改めて発案グループによる案の方向性についてプレゼンテーションを聞いた生徒たちは、全員で問題点を挙げてみることにしました。

そして、さらに計画の取りまとめをする取締役、学校を説得するためのデータを収集する市場分析部、どうすれば生徒たちの原動力になるか考案する販売促進プロモーション部、そして渉外および交渉部といったチームに分かれることになり、なんと取締役には7名の立候補者の出る接戦となりました。

これから提案をより具体的かつ実践的なものにできるよう取り組みを進めていきます。  
次回までにこのキャンペーンのキャッチコピーも考えてみることになりました！



### 3-3-6 ● 2018/06/19 GUSⅡ ー授業ー(高校3年生)

#### プレゼンテーション 都市の環境政策

完成間近のドイツの環境対策について調べ上げてきたリサーチブックに加えるいくつかの都市、機関の環境対策についてもグループに分かれて調べを進めてきました。今日は、調べた内容について各グループによる発表を行い、全員で内容を共有し、下のような項目に分けてワークシートを埋める形で各都市を比較してみる作業に取り組みました。

- ・都市計画（都市設計・交通政策）
- ・廃棄物（ゴミ削減・リサイクル）
- ・エネルギー（発電に関するもの・省エネに関するもの）
- ・その他
- ・疑問点

身近な京田辺市では、市民の輪で環境を守り育てるまちをモットーに「きょうたなべ環境市民パートナーシップ」を結成し市民、学生、事業者が行政との連携をしています。京都市でも、京都議定書を基本とする「Do you Kyoto?」をキャッチフレーズに、環境に良いことをするための様々な取り組みを展開しています。思った以上に多くの市民団体や行政との連携のもと活動が行われていますが、それをいかに生活レベルで実現させていくことができるかが大きな課題であると気付きました。

一方ドイツでの環境への取り組みは市民レベルで徹底しています。例えば2011年にも欧州委員会よりヨーロッパ環境首都賞を受賞しているハンブルクは、①環境基準を達成しているか②環境改善や持続

可能な発展のために継続的かつ高い目標を約束しているか③他の都市に刺激を与える役割を果たしているか、などを評価軸に12の分野で具体的な数値目標を達成しているかについて審査、評価されました。環境に配慮することが生活も豊かに便利になるという仕組み作りも、市民レベルにエコが浸透する大きな理由です。

生徒たちがそれぞれまとめたワークシートを元に、各都市、機関についてのまとめを見直しよいよ記事も完成します。



### 3-3-7●2018/06/26 GUSⅡ 一授業一(高校3年生)

#### 高校最後の夏休み「課題」

先週から、リサーチブックに加えるいくつかの都市、機関の環境対策についてグループごとに発表をしてきました。今日は、最初に今までの振り返りの確認テストをした後、デンマークの首都コペンハーゲンについて調べたグループの発表を行いました。このグループは、デンマークの環境政策について、もちろん大変環境に配慮された政策が多いなか、日本との比較において一番の大きな違いは「その政策の誰の見てもわかる明確さ」だと伝えました。また、環境に自然と配慮できる環境整備が整い、エコに関わるもののデザイン性の高さ、利便性そして楽しさをも兼ね備えているところから、市民に広く浸透しています。最後に世界一幸せな国としても取り上げられるデンマークの生活で欠かせない「ヒュッグ」の精神について説明してくれました。明確な日本語訳はありませんが、ほっこりとした幸せな時間を過ごすといった意味合いです。一見すると環境に関係ないと思われそうですが、寒い冬や仕事を早く終えて、家で大切な家族や友人と過ごすことでこのうえない幸福を得られるとされており、車での無駄な外出や余計な消費をしないといった点において、このヒュッグは環境に配慮した幸せの価値観としてデンマークに根付いていると大いに教室を湧かせてくれました。

発表の後、教員より高校最後の夏休みを過ごす生徒たちに課題の提案がありました。

## ○京都市・京田辺市への提言案

今までの調べ学習及びフィールドワークで発見したこと、そこから数多くディスカッションしてきたことを元に、アイデアを出し合おう！

## ○OECDに君たち高校生が発信、提言できること

OECD 日本副所長の樋口さんに講演をしていただいたことで、多くの提言のヒントを得たことから、もし自分たちが提言をするとしたら？これからの環境問題のキーワードであった「質の高いインフラ」から案を練ってみよう！

GUS を選択してきた高校最後の夏、生徒たちの発見とひらめきを楽しみに待っています。



## 3-3-8 ● 2018/10/02,09 GUS II ー授業ー(高校3年生)

## DERF本格的に始動！学校への提言を具体的にまとめる

2学期に入り、京田辺市、京都市の環境政策の窓口の方にお越しいただき、具体的なお話を伺い、またミニ提言をさせていただく機会も持ちました。私たちは最終的に4つの提言先をイメージしています。「学校」「京田辺市」「京都市」「OECD」です。そこで2回の授業にわたって一番身近な提言先である私たちの学校の事案に立ち戻り、より具体的に提案をまとめていく作業に取り組みました。1学期に出し合った各グループの提案について再度話し合いを重ねて実施の可能性や効果を含めた総合的な検討を行い、ブラッシュアップした形での提案を作成していきます。

最初に提案の基礎となるチェックシートを使い、食堂のゴミについて問題点を整理しました。

- ・ 食堂に多いゴミは何か
- ・ 処理に問題のあるゴミは何か

各グループでそれぞれの対策、その利点、問題点は何かについて話し合った結果、たくさんの意見が出ました。意見を共有したところ、リユースやリサイクルよりもまずは処理の難しいプラスチックゴ

ミを減らすという目的で、紙の容器での代用など、食堂を運営する企業への大まかな提案がまとまりました。最初の提案の中には、食べられる素材を容器や敷きものにするというユニークな発想もありました。

生徒たちは、この学校のゴミ問題の改善に向けて組織を立ち上げていましたが、その名称がいくつかの案より接戦の中多数決にて決定しました！DERF（デルフ）です！

### 【 DERF -Doshisha Ecological Re-Feel 】

DERF 取締役会議では、より現実的な提案へと絞られ、生徒たちは DERF 内の各組織の役割分担を確認し、データの収集、プレゼン作成など提言にむけてリストアップし準備を始めました。

今回は、その提案書を実際に生徒たちがクラス内でプレゼンし、本番に向けて皆で修正、改善をする予定です。本番は11月初旬に食堂を運営する企業の担当の方に学校にお越しいただき提言させていただきます。



#### 3-3-9 ● 2018/11/06 GUS II -その他- (高校3年生)

##### 学校食堂 SHIDAX さんへの提言「Re-Feel」

今日はいよいよ生徒たちが準備してきた学校の食堂のごみ問題についての提言の日、食堂を運営するシダックスさんにお越しいただき、提言と意見交換をさせていただく機会を持ちました。いつものクラスと少し雰囲気が違うのは、取材のマスコミの方が2社来られていたことです。

少し緊張した様子で、司会の生徒たちの進行でシダックスのご担当者お2人を前にプレゼンテーションが始まりました。生徒たちはドイツを始めとした環境政策の取り組みから、京田辺市、京都市の現状についても調べ改善案を検討してきました。そして一番身近な問題として学校のごみ問題の解決に向けた提案をいろいろな検証をしたうえで議論してきました。企画のコンセプトとした「Re-Feel」は日頃の何気ない行動が環境に良いものに、この行動によって新しく感じる日常の豊かさということをつまみ、割り箸やペットボトルといったごみ削減のいくつかの提案と同時に、食品容器となっている

プラスチックを紙素材で代替しごみの質を変える提案を出しました。

シダックスさんのご担当者からは、企業のお立場から、企業内の取り決め、コスト面、手間との費用対効果、そして衛生面を主な理由に挙げられ、提案を受け入れることは難しいが、割り箸の有料化などいくつかは検討の余地があるとお回答していただきました。企業としては利益優先とお立場を示していただいたことで、生徒たちにとっては今後の新たな提言の戦略を練る上で大変有意義な勉強となり、次につながるステップとして期待の持てる結果となりました。

シダックスのご担当者のお2人には、お忙しい中お時間をいただき本当にありがとうございました。取材を受けた記事は、翌日の京都新聞、28日の朝日新聞にも掲載されましたのでご紹介します。



3-3-10 ● 2018/11/13,20 GUS II -授業- (高校3年生)

提言を振り返る

先週の学校食堂運営会社である SHIDAX さんへの提言について振り返りました。提言は生徒達の提案は思い通りには受け入れられませんでした。そこで反省点、改善点を話し合いました。生徒達は2年間 GUS で学んできたことで、環境に良いことをすることは当たり前だという認識がありますが、企業である SHIDAX さんはコスト面と企業内の取り決めが最優先だという点で妥協点を見出すことは容易ではありませんでした。

## 【振り返り】

- ・自分達の得てきた知識やアイデアを伝えることができなかった、不十分だと感じた
- ・企業では良識よりもコストが最優先なので、状況を踏まえた上で提案すればよかった
- ・大きな組織ほど何かを変えるのは容易ではない

話し合いを進める中で一方的に自分達の提案を押しつけることになってしまったのではないかという反省点から、どのような準備、説明が足りなかったのかを考える良い機会となりました。次はいよいよ最後のステージ、既に今までにリサーチを進めて来た他の3つの機関も加えて、それぞれへの提言のまとめへと進みます。

## 【提言先】

- ・学校
- ・京田辺市
- ・京都市
- ・OECD

生徒達は提言先の4つのチームに分かれ、今回の提言を組み立ててきた経験と反省点を踏まえて早速提言のシナリオを出し合いました。次のクラスでは各グループによるプレゼンテーションを行い、実際の提言をシミュレーションしてみます。



## 3-3-11●2018/11/20 GUSⅡ 一授業一(高校2年生)

## 各機関への提言シミュレーション

提言先の4グループに分かれて提言をまとめた生徒達は、今日クラスでそれぞれのグループによるプレゼンテーションに挑み、相互評価をしました。

3学期はこの評価を元にさらに改善し提言を仕上げる予定です。



### 学校の食堂

環境に配慮した取り組みを重視  
タンブラー、マイカップ対応可へ  
割り箸の有料化など



### 京都市

駐車料金の値上げ  
自転車のレンタルステーション、専用レーンの増設  
コンテナでのゴミ分別、収集の導入など



### 京田辺市

現在の環境活動の啓蒙（より周知する）  
ゴミ分別の徹底化  
公共交通機関利用のメリット導入など



### OECD

電気自動車スタンド増設、スピードバンプ導入  
より活用頻度の高くなる公園増設  
生分解性素材の包装容器の奨励など

## 3-3-12 ● 2019/01/08-02/26 GUS II ー授業ー(高校3年生)

### まとめ「提言」

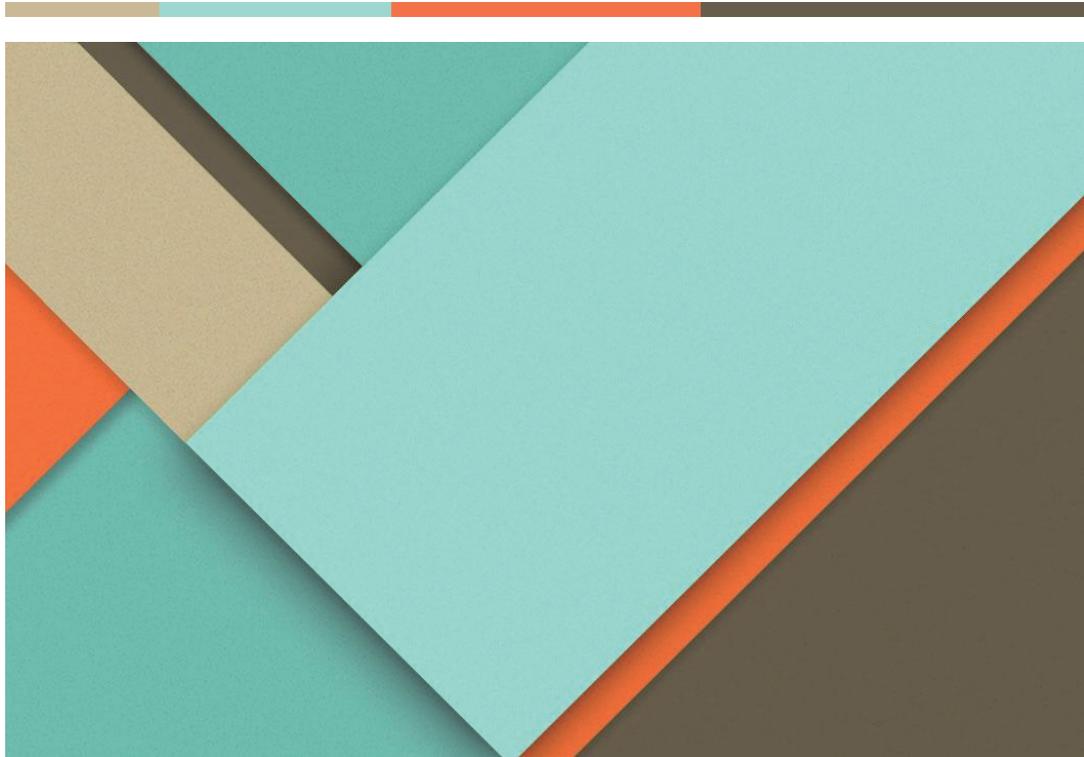
高校3年生のGUSクラスも3学期は残り3回となりました。各機関への提言をさらに見直し、より説得力のあるものに仕上げるための最後の作業です。生徒たちはグループで作業を進めながら、同時に個人ではこのGUSでの学びを振り返るレポート、自分なりに追求したかったことできたこと等をまとめる課題にも取りかかりました。それらは後ほど、教員より1人1人アドバイスを受けながら返却されました。

生徒たちの提言は、冬休みに開催された「SGH 全国高校生フォーラム」、また2月に予定されている

「SGH 活動報告会」でも発表する機会があります。また最終的には、各機関に提出することになっています。

これからも生徒たちが、この GUS での学びを通して得たものを大学、社会人になっても活かしてくれることでしょう。また 1 人 1 人が環境問題について深く考え、問題解決への取り組みを続けてくれることを期待しています。





## 質の高いインフラに関する提言(案)

2018 年 12 月 14 日

同志社国際高等学校 GUS-II

### 目次

はじめに	2
提言までの経緯	2
私たちが考える現時点での「質の高いインフラ」に対する定義	2
質の高いインフラとコンパクトシティ	3-6
都市における理想的なインフラの形	6-7

## はじめに

本校は、文部省（現・文部科学省）による指定の元「帰国生徒受け入れ専門校」として設立された京都で唯一の「帰国子女受け入れを主たる目的として設置された高等学校」である。現在、生徒の3分の2は50カ国を超える海外での生活を経験した帰国生徒、3分の1は日本国内での生活経験を中心とする国内一般生徒によって構成されており、それらの生徒が同じ教室で共に学ぶ事で互いの文化・価値観を認め合い、多様性を身につけるべく「違いという共通点からの出発」を教育テーマに掲げている。

Global Understanding Skills (GUS) は、本校が2015年にSuper Global High School の指定を受けた事をきっかけに設置された授業であり、高校一年生は必修授業として、二年生、三年生は希望者による選択科目として開講されている。一年生時はSustainable Development Goals (持続可能な開発目標) をはじめとしたグローバルな社会課題について学び、それぞれのこれまでの海外経験の共有や普遍化を試みるとともに、問題解決の方法論についても学んだ。二年生時は環境先進国であるドイツ、デンマークの環境政策についてリサーチを行い、現地でのフィールドワークも経験した。現地では、政策の工夫もあり、人びとが環境に配慮した生活を自然に送っていることが特に印象的であり、また、デンマークでは、市議員の方が過疎の島のエネルギー自立を目指して風力発電施設を建設した結果、現在では首都に売電できる程になる等、島の未来のために無給で活動する様子にも影響を受けた。在ハンブルク日本領事館では、環境に対する意識が高く、自ら政治を変えていこうという人も多いドイツは、教育も日本とは異なっているというお話をお聞きし、日本とデンマークの合弁企業であり、洋上風力発電機製造を行う三菱ヴェスタス社を訪問した際には、当初は難しさもあったが、日本の良さとデンマークの良さを生かして企業がとてもうまくいっている、日本でも風力発電をもっと広められないだろうかと考えているというお話を聞いた。これらの貴重な経験を通して、私たちが日本で高校生なりに自らの考えを発信できないか、と考えるようになった。

## 提言までの経緯

高校三年生GUS受講者は本年6月、OECD東京センター副所長の樋口厚志さんを本校に招き、直接OECDの組織や活動について講演をしていただいた。OECDによる政策提言は世界的に影響力があり、実際にその政策が各国で採用されるよう、OECDの職員の方々と省庁の職員の方々、そして経済界の方まで協力していることを知った。そこで、以前から取り組んでいた学校食堂への提案、そして京田辺市、京都市への提言作成に加え、国際機関であるOECDにも何か高校生なりに提言を行えないかと考え、講演でお聞きした内容のうち2019年に大阪で開催されるG20でも議題となる予定である「質の高いインフラ」の定義について生徒ひとりひとりが、それぞれの海外での生活の中での経験なども踏まえて考え、リサーチし、さらにクラス内での共有を行った。そこでまとまった意見を今回提言という形で提案したい。

## わたしたちが考える時点での「質の高いインフラ」に対する定義

一見、値段が高く見えるものの、使いやすく、長持ちするもので、長期的に見れば高い経済性を有し、経済発展・社会課題解決に貢献するもののことをいう。

## 理想的な質の高いインフラとコンパクトシティ

### I. 概要

持続可能な都市を構築するために、質の高いインフラとコンパクトシティを提案したい。私たちがフィールドワークで訪れたヨーロッパでは、街の中心部にインフラ設備が集約され、無駄が省かれたコンパクトシティが実現していた。例えばフライブルクなどはトラム、バス、国鉄（DB）を有機的につないだ優れた公共交通が整備され、旧市街もうまく活用されていた。OECDによるコンパクトシティに関する文書は、コンパクトシティは環境保護を実現するだけでなく地域的な経済成長を促進し、よりよい生活を提供することができるかと述べている。<sup>\*1</sup> さらにそのようにして街の質を高めることで、住居の資産価値も高まり、それが人びとが街を美しく維持するモチベーションになっている。また、いくつかの隣接するコンパクトシティは、基本的な機能は持ちながら、それぞれ特徴的な役割を持ち、それらのコンパクトシティを合わせると大きな都市の機能を持つことが好ましい。そのことにより災害などで一つのコンパクトシティが打撃を受けたとしても、機能を補完しあって立て直しが容易になる。また、一つのコンパクトシティがすべての機能を均等に持つことは、小さな機能を近隣で重複させることになり、効率的でない。近隣のコンパクトシティが連携することで、よりインフラ全体の効率が良い状態を作り出せるのではないかと考える。この都市間協同により、長距離の運輸の必要性が少なくなり、不要な燃料の消費を抑制することが可能である。そのそれぞれの都市において、質の高いインフラを整備することにより、都市を持続的に維持することができ、安心して豊かな生活を保障することが可能となる。

### II. 道路

道路は、自動車が使用することだけではなく、化石燃料を使用しない交通手段に対しても十分に配慮する必要がある。

側道には歩道に加えて自転車専用道路がある状態が好ましい。これはフィールドワークで訪れたフライブルクやコペンハーゲンの街でも実際に取り入れられており、効率的かつ安全であるため、自転車の使用を促すことで環境にも配慮することが可能になると考えられる。また、これは交通量の少ないエリアでのみで実現可能と思われるが、車道は環状交差点（roundabout）やスピードハンプを導入する事が理想的である。これはノルウェーでの生活を経験した生徒の

アイデアで、これらの導入により交差点での車両・歩行者交通の安全性の向上、CO2排出量の削減などが期待できる。\*2,3 また、これは実際に私たちが京都市に対し提言を行う事を考えている案であるが、都市中心部の自動車の流入を制限したり、都市中心部からの距離が近いほど駐車料金を高額にすることや住民の生活環境の向上と二酸化炭素量の削減のために街路樹などを積極的に植林し緑化に特化する事も有意義であると考えられる。

### III. 公共交通

都市部においては、まず、公共交通を安価で利用しやすく整備すべきである。

フライブルクで目にしたような、トラム、バス、自家用車の利用をうまく組み合わせたパークアンドライドシステムが推進されている事が理想的である。\*4 そこでは、日本の公共交通機関の長所であるように、定刻通りの運行がなされている状態がなお好ましいと考えられる。また、乗車券についてはフライブルクやハンプルクで行われているレギオカルテ\*5 を使った環境政策を参考に、定期券の発行や商業施設で有効な割引・クーポン券の配布などの通勤・通学者への利用を促す取り組みに加えて、ホテルなどとの連携を行い観光客の利用を促す工夫もされていることが望ましいと考えられる。エストニアのタリンでは市民の公共交通の無料化が実施されているそうであるが、この効果についてはこれから注視していく必要がある。さらに、コペンハーゲンをはじめとする主要都市で積極的に取り入れられていたようにシェアサイクルを充実して、徒歩や自転車の利用が第一に優先されている状態が好ましい。\*6

### IV. エネルギー

エネルギー源として、化石燃料を使用しないことを念頭に置くべきである。また、省エネルギーに配慮したシステムを構築すべきである。

フィールドワークで訪れたフライアムト村、ロラン島のように再生可能エネルギーで消費電力や熱供給が賄われており、安定した供給のために蓄電設備もしくは化学エネルギーとして蓄える（たとえば水素など）ことにより予備電力源（エネルギー源）が確保されている状態が望ましい。\*7 加えて、都市部ではそのような地方からの電力購入も視野に入れ、公共交通機関においても再生可能エネルギーで運行されているとなお環境への負荷を配慮していると言えるだろう。また、再生可能エネルギーによる発電・発熱施設を利用した個人出資などを募る事で地域と住民の互いの協力関係が強化されている状態が実現している事も理想的である。

## V. 廃棄物

廃棄物の量の削減と、廃棄物の質をリサイクルや処理の容易な物質に変換することを第一とする。

ドイツをはじめとした多くのヨーロッパ諸国で行われている、有料コンテナの利用、ゴミ収集の有料化やゴミ袋の有料化、フリーマーケットの開催、デポジット制度によるリユース容器の利用促進\*8 などによってゴミの全体量を減らすことが必要である。

また、分別の徹底、生分解性素材を利用した包装容器の利用促進やプラスチック製用品の削減などによる再資源化が推進され、最終的に焼却処理されるゴミが最小限である状態が理想的である。さらにその廃棄物処理に対する方針が初等教育等においても浸透しており、子供から大人まで、幅広い人々にとって無理のない、生活に密着した形で実現されている状態が最も望ましいと考えられる。

## VI. 中・長距離間交通

人や物資の移動を少なくすることにより、混雑の回避、時間の節約、そのことが最終的にはエネルギーの節減になり、豊かな生活に繋がるため、それらのことを意識した都市計画を行うべきである。

長距離間の移動については、航空機が必要となる。空港は、厳重なセキュリティが確保されており、定刻通りの発着が行われる状況に整備することで、コンパクトシティに必要な最低限の機能性を持たせ、必要なものやサービスを大都市で調達することが可能になる。また、空港施設自体に無駄がなく、利用者そして職員の動線を考えた設計にすることで、長時間滞在する際にも快適に利用できる娯楽的要素も兼ね備えていることが望ましい。空港までは住民が公共交通を利用してのアクセスを可能にすることが望ましい。加えて、香港国際空港にみられるような持続性や地球環境に配慮したような設備や取組が取り入れられていることが望ましいといえる。\*9また、航空機を利用する必要のない程度の中距離の都市間交通は、公共交通を充実させることにより、運輸にかかる化石燃料の消費を抑制することができる。

## VII. 実現に向けて

現状の都市を改革していくことは困難であり、またコンパクトシティ計画におけるリスクを過大評価する傾向にあると考えられるため、まずは広い土地が確保できるエリアをモデル地区として質の高いインフラに特に意識して、都市建設することを考えるべきである。この成功例を契機として、都市を移動し、大都市集中を改善すべきであるとする。

## VIII. 参考文献

- \*1 OECD Observer (2012) 「Compact cities」 2019年1月15日アクセス  
<[http://m.oecdobserver.org/news/fullstory.php/aid/3806/Compact\\_cities.html](http://m.oecdobserver.org/news/fullstory.php/aid/3806/Compact_cities.html)>
- \*2 国土交通省 「ラウンドアバウトの効果・影響」 2019年1月15日アクセス  
<http://www.mlit.go.jp/road/ir/ir-council/roundabout/pdf01/5.pdf>
- \*3 国土技術政策総合研究所 道路交通研究部 道路研究室 (2016) 「生活道路におけるハンプ等による速度抑制対策について」 2019年1月15日アクセス  
[http://www.hido.or.jp/14gyousei\\_backnumber/2015data/1601/1601sokudo\\_yokusei\\_nilim.pdf](http://www.hido.or.jp/14gyousei_backnumber/2015data/1601/1601sokudo_yokusei_nilim.pdf)
- \*4, 5 「SGH校生が調べたドイツ流環境理想図」 P. 69
- \*6 日本シェアサイクル協会 (2016) 「各国のシェアバイク事情」 2019年1月16日アクセス  
[http://www.clair.or.jp/j/forum/forum/pdf\\_324/04\\_sp.pdf](http://www.clair.or.jp/j/forum/forum/pdf_324/04_sp.pdf)
- \*7 デンマークのリサーチブックの参考文献をいれる
- \*8 「SGH校生が調べたドイツ流環境理想図」 P. 27-37
- 55\*9 Hongkong international airport 2019年1月15日アクセス  
<https://www.hongkongairport.com/en/sustainability/our-approach.page>

## 都市における理想的なインフラの形

初めに、都市における理想的なインフラを考える場合、寺や神社などの歴史的建造物やその地に伝わる伝統を保存するための地域と地方政府、工業施設、会社などの町の中心となる先進的な地域に分けて考えたい。

まず歴史的な地域では自然の保護を重視し、並んで幼稚園から高等学校までを設置し子供たちが自然と伝統の中でのびのびと幼少期を過ごせる環境を形成したい。

一方で先進地域では大学のほか会社や商業施設などを含む高層ビル群なども設置し行政と経済の中心となるような環境を形成したい。また、歴史的な地域と先進地域とつなぐエリアには宿泊施設などの娯楽的要素の強い環境を作ることによって観光客がどちらの地域も堪能できるようにしたいと考える。

そして、郊外には田畑を作り、さらに少し離れたところでは工場も設置する。そうすることで生産物の運搬の手間を省き、加工や出荷の効率を高めるとともに地産地消を実現することを目指す。

最後に、公共交通機関は都市の中心である先進地域に中心駅を設置しハブターミナルとすることで効率のよいアクセスを実現する事が理想的である。



# Global Understanding Skills

## 講演



## 3-4-1 ● 2018/05/12 GUS BASIC —講演— (高校1年生)

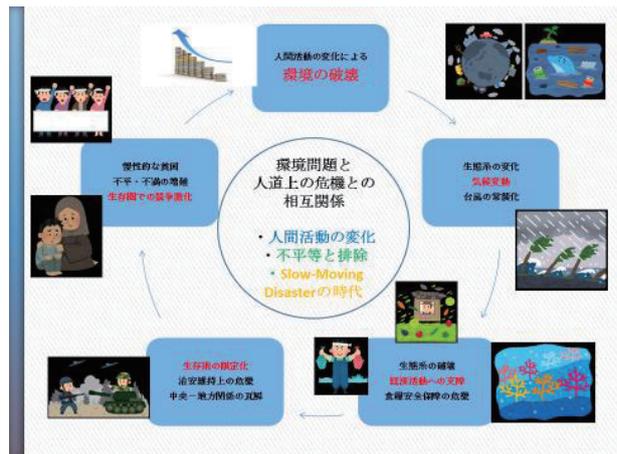
## 「グローバルに生きる時代を考える」 大橋 佑 先生

今日は、講師に同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科の大橋 佑先生をお招きして「グローバルに生きる時代を考える」というタイトルでお話を伺いました。

大橋先生は、先週戸田教諭よりレクチャーを受けた SDGS について、実際にに関わり、そして世界で活躍する先輩です。今日の目的は私の話を理解することではなく、話を聞いて自分はどうかと冒頭おっしゃいました。大橋先生は、現在はフィリピンを主な活動地とされ、現地の政府と一緒に災害時の人命救助について、実際の井戸の移設や、経験や知識を地域に広める手段など多岐に渡って研究されています。フィリピンでは多くの過激派組織も活動していますが、資源配分の不平等、環境破壊によって繰り返される災害、極度の貧困の広がりや社会的排除など、その背景には環境問題があります。紛争も絶えず、環境破壊や気候変動による災害の増加は年々深刻化し、フィリピン周辺はその影響を大きく受けています。犠牲になるのは最も脆弱な貧しい農民や漁民です。どうしようもない不平等な社会で生き延びるために犯罪に手を染める人も多くいるのです。

大橋先生は、今日のキーワードの1つとして「グローバル」という言葉をご紹介下さいました。グローバルからグローバルへ、それは柔軟性を持つということ。自分の考えを意識してみよう、真実に近い情報を少しでも多く持とう、変化することを歓迎しよう、など大切なヒントを教えてくださいました。

日々お忙しく国内外の現場を駆け回る大橋先生、本日は貴重なお時間をありがとうございました。



大橋 佑先生の資料より

## 3-4-2 ● 2018/06/23 GUS BASIC ー講演ー (高校1年生)

## 「環境先進国 ドイツ・デンマーク 研修報告」 高校3年生

今日は、3月のヨーロッパ研修に参加した高校3年生の生徒が講師として、研修の報告とGUSクラスで学んで感じていることについても話を聞く機会となりました。

プレゼンターの生徒たちは当初とても緊張気味でしたが、話し出すと研修での体験や学びがよみがえり、とても生き活きと当時のことを振り返っていました。

小さな規模のドイツのブライトナウ村、フライアムト村、デンマークのロラン島やフン島、そして少し大きな規模のフライブルク、そして大都市であるハンブルク、コペンハーゲンまで生徒たちは規模の違う環境問題に特化している地域や自治体、そして企業に至るまで様々な視察とそこでの人々との深い交流を通して本当にたくさんの新しい発見がありました。事前学習の一環で一冊の資料を作り上げた生徒たちですが、実際に現地に赴かないと知り得なかったこと、肌で感じて初めて実感したことをリアルに話してくれました。

どこでも印象的だったのは、市民レベルで、自分たち自身で環境について考え、投資を行うなど、様々な面で環境に配慮することで自分たちの生活も充実させる現地の人達の姿でした。日本で生活していると環境に配慮するということが、とても大変で負担の大きいことと感じていた生徒たちも、研修先ではそうでなかったことに気付きました。そして出会う人達は皆とても親切でした。自分のことだけでなく、快く他人にも配慮する姿勢が環境問題への初期投資を推し進める大きな要因になっていると感じました。また環境に良いことを選択するということがより生活を豊かにし便利にするシステム作り、そして小さい頃からの環境教育がとても大切だと感じました。

この研修を通して、日本での環境問題の課題がよりよく見えてきたこと、そしてGUSの授業を通していろいろな視点からものを見る考察力、まとめる力とそれを伝えるプレゼンテーション能力が身に付き、将来ここで学んだことを活かしていきたいと話してくれました。



## 3-5-1 ● 2018/09/11 GUS I - 講演 - (高校 2 年生)

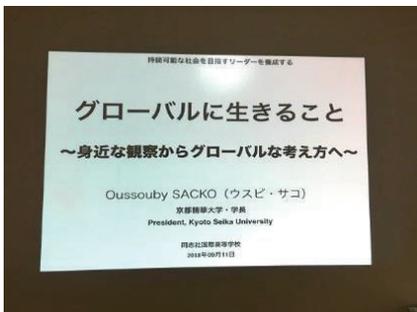
## グローバル・セミナー「グローバルに生きること」 Oussouby SACKO 先生

GUS I の 2 クラス合同で、京都精華大学学長のサコ先生をお招きして「グローバルに生きること～身近な観察からグローバルな考え方へ」と題して講演をしていただきました。

サコ先生は会ってすぐに誰もが感じる通り、とても穏やかで親しみの湧くような気さくな方です。ただその経歴のご説明から、ご出身のマリ共和国、そこから中国、日本とたくさんの異文化を体験され、その中でのご苦労や努力がありご自身の専門である建築、人文学を研究されて来られました。ご自身でも多様性、多文化の共生を理解し、私は移民・難民でありそしてグローバルな人間ですとおっしゃいます。

私たちにとって遠い国である西アフリカのマリについても大変興味があります。植民地になった経験を経て、それでもマリ独自の豊かな文化が息づいている国だと知りました。そのお話をして下さった後、先生のこれまでの歩みと社会で起きている事例を参考にグローバル化についてお話が進みました。その中でグローバル化は、ヒューマンバリューを大切にするのではなく、アメリカ式のマーケットにおいて市場価値のある人間を作り上げ、価値観を押しつけるものになっていないか疑問を投げかけられました。そこで価値がないとされる人たちが阻害される、また一方の価値観やルールを押しつけることになっている現在のグローバル化においては、多文化共生を認めない面が実はあることに気付かされます。本当のグローバリゼーションにおいては、自分の文化とまず向き合い理解した上で、相手の文化も同じように尊重しどう共生するかが大切。主体性と協調性の両立、そこから協働性が誕生します。世界は、私たちは多様性のもと協働できているのか、改めて考えさせられました。

サコ先生、本日は大変お忙しい中本当にありがとうございました。異文化を体験され、また現在のグローバル化の危機、本当のグローバル化の真の目的を改めて深く考えさせていただけた、大変有意義な、そして先生のお人柄とお話からとても楽しい時間となりました。



## 3-5-2 ● 2018/10/23 GUS I -講演-(高校2年生)

## グローバル・セミナー「お客様と仲間の笑顔を最高の歓びに」 河本 宏子 氏

本日は ANA 総合研究所代表取締役副社長 河本宏子氏にお越しいただき、グローバルリーダーについてお話を伺う大変貴重な時間となりました。河本氏が会場に入ってこられると周囲が華やぎ、さらに講演の第一声「今日はワクワクしております。私の学んできたこと培ってきたことを紹介することでグローバルリーダーとは、リーダーシップとは考えるヒントになればと思います。」と明るい笑顔でその場を一気に明るくして下さいました。

河本氏は同志社大学を卒業され、机の前に座ってじっとしているよりも外に飛び出したいという思いから、当時の全日本空輸に客室乗務員として入社されました。まだ女性は3~4年働き結婚で仕事を辞めることが主流だった時代でした。そして現在に至るまで、国際線サービスを就航当初から作り上げ、女性初の役員としても長年活躍されてこられました。現在もお忙しいお仕事の傍らプライベートでも登山やランニング、自転車や生け花などオフも楽しむ大変アクティブな女性です。どのようにキャリアを積んで来られたのか、組織マネジメントに取り組んで来られたのか、そして人生で大切にされていることについても伺いました。

河本氏のその朗らかな笑顔の裏には、世界を繋ぐ心の翼であり夢に溢れる未来に貢献するという経営理念のもと、安心と信頼を築くために惜しみない努力をされてきたという揺るぎない強さがありました。印象に残ったことは、ただ厳しくするというのではなく、人は誰でもミスをおかすもの、だからお互いの気付きを大切に、お願い、報告、感謝することを躊躇しない環境作りに取り組まれていることです。また乗客の声に徹底してこだわる姿勢には、マニュアルはなく、寄り添うおもてなしとして社員一人一人が意識高く対応をされています。リーダーシップというのは時には大きな決断もするけれど、こういったチームを築き上げることが大切だと教えて下さいました。

現在も ANA は挑戦する人を応援するその風土のもとデジタルデザインラボを立ち上げ、未来のエアラインを創造するための新たなイノベーションにも取り組んでいます。ワクワクするような、取り組みをいくつかご紹介下さいました。最後に、ANA が考えるグローバル人材とは「世界とたたかい」「よく知られ」「愛される」という3つのキーワードをお伺いしました。グローバルスタンダードに立ち、多様な価値観の中でも自国、自分を知り、コミュニケーションを発揮し、どんなことにも親和性を保ち多様性を尊重し、より良い明日を夢見ていきいきと振る舞うこと。河本氏ご自身の印象ととても重なりました。



## 3-5-3 ● 2018/11/20 GUS I - 講演 - (高校 2 年生)

## ジャーナリストの眼「国際人として生き抜く 21 のチカラ」 井本 里士 氏

今日は、毎日放送の報道部長を務められている井本里士氏にお越しいただき、テレビのジャーナリストのお立場から様々なお話を伺い、グローバリズムについて理解を深める機会を持つことができました。

井本氏は事件記者、政治、ドキュメンタリーなどをご担当された後、3年間ベルリン支局の特派員としてニュースを日本へ届けられていました。その後は、4年前まで「ちちんぷいぷい」のプロデューサー、「VOICE」の編集長など歴任され、現在は報道部長をされている大変ご経験豊富な方です。今まで手がけられた番組を動画で見せていただいた際には、生徒たちもとても盛り上がっていました。

お話の中では、情報社会に生きる私たちはテレビ、インターネット、SNSなどさまざまなところからニュースに触れ、それがリアルなのか判断することが難しい時代、そこで情報を十分に使いこなせる能力「information literacy」を身に付けることが必要だとおっしゃいます。フェイクニュースなどよく耳にするようになった言葉ですが、不都合な情報をフェイクだと断罪し続けるような姿勢は民主主義を危機にさらしています。そこで、より複雑、グローバル化する社会の中で自己をしっかり確立させることが求められています。「media literacy」とはメディアが伝える価値観、情報を主体的に読み解き、情報を理解する能力です。そこでいくつか他にも情報にまつわるキーワードから考える機会を下さいました。

「post truth」客観的な事実が重視されず、感情的な訴えが政治的に影響を与える状況

「fact check」メディアなどで報じられた発信や情報の真偽を検証する

「alternative fact」嘘や曖昧な言葉でも繰り返し言及することでもう一つの真実のように定着する

「filter bubble」自分が見たくない情報が遮断され見たい情報しか見えなくなる

「echo chamber」同じコミュニティで同じ意見の人たちと会話し自分の意見が増幅強化される

どれも聞き慣れないものが多いですが、意味を理解していくと日頃からこういったことを意識することで情報の捉え方が変わってきます。そして、誰もが発信者に成りうる時代に、発信者の立場から、「伝わる」ように「伝える」ことの大切さについても教えて下さいました。これからもよりよい社会になるためのきっかけを作る報道をしたいとおっしゃいます。最後に国際人として生き抜く 21 のチカラから、井本さんはどれが一番だと思いますかという質問に「本気力」とお答えいただきました。どんなことでもいい、何かを本気で取り組むと人生も変わってくるとおっしゃった言葉が心に残りました。

井本さん、大変お忙しい中今日はお時間を作ってくださり本当にありがとうございました。



## 3-5-4 ● 2019/01/11 GUS I -講演-(高校2年生)

## グローバル企業と商品「グローバルなビジネスの現場から」佐伯 盛一 氏

佐伯さんは昨年 GUS BASIC の講義にもお越しいただき、中国肇慶ご出身の奥さまと「コスモポリタン」というタイトルでご夫妻の感じておられる日中間の現状を中心にお話をしてくださいました。今日は、佐伯さんがご活躍されているグローバルなビジネスの現場から具体的なお話を聞く機会となりました。

佐伯さんは 1988 年に同志社大学を卒業され、それ以来現在の会社で欧米と主に中国と関わりお仕事をされています。中国といっても、その面積は日本の 26 倍、人口は 11 倍、多民族国家でもあるため様々な側面を持ち、抱える問題も地域によって異なります。私たちの知識は多くがメディアからもたらされるものですが、それはあくまで断片でしかなく、それを収集し組み立てて考えて欲しいとおっしゃいます。

佐伯さんの主に扱うサングラスは **Made in Japan** の製品ですが、実に多くの国が関わり完成されています。例えばレンズはアメリカに本社を置くイタリアの企業が開発しタイで製造、箱はアメリカで設計されて香港の会社が発注し中国で製造、実際に日本ではフレームの製造と最終の組み立てだけが行われています。このように私たちの身の回りの物ほぼ全てが様々な国の関わりにより成り立っています。製造する工場のエネルギーさえ輸入に頼っています。製品のグローバル化を止めようとするれば、大混乱になるでしょう。そのグローバル化を否定し、自国第一主義を掲げたのが現アメリカ大統領です。その結果、米中間で大変は貿易摩擦が起きています。大国同士の摩擦による影響をくい止めるため、他の国々はこの 2 国を除き TPP、EPA など協定を結び団結しようとしています。

またアメリカで発表された、中国教育の分野において学問の自由が脅かされているという報告書もご紹介くださいました。アメリカの大学での、中国政府と立場の違う教員に対して、また中国政府に不都合な内容の講義に対して、中国による米中間の留学プログラムの打ち切り、その教員個人を人種差別者と風評被害を流すといったケースが認められたというのです。中国の一方独裁が故の問題点は、風通しが悪くなり、一部の幹部が富を山分けしてしまうことで格差が広がることにもなっています。国民の不満は 1979 年の改革開放運動以降、現在に至るまで続いているようです。

大きなニュースとなった HUAWEI 副社長のカナダでの逮捕の一件では、ネットワークの主権を巡る覇権争いが起きていること、それに加えて他国でのインフラ整備など、一方で中国の一带一路構想が世界中で着々と進められていることにも触れられ、私たちは中国が今も未来も決して無視の出来ない隣国であると改めて感じる講義となりました。



3-5-5 ● 2018/11/27 GUS I -講演-(高校2年生)  
ジャーナリストの眼「中東イラン 報告」 鵜塚 健 氏

今日は講師に毎日新聞社会部デスクより鵜塚 健氏をお迎えしました。テヘランでの駐在員のご経験から、そして新聞記者の視点からグローバルとは、と題して貴重なお話を伺うことができました。

「皆さん、中東のイメージってどんな感じですか？」最初に問いかけられ、生徒たちからは、紛争、テロ、難民、砂漠、発展途上、イスラム教による抑圧といったマイナスの意見が多数挙がりました。鵜塚さんが特派員として駐在されていたイランは中東を代表する国の1つです。鵜塚さんは、そのような日本からは遠い国のことだけでも、今日は「私たちは遠い世界のことをなぜ知らなくてはいけないのか」考えて欲しいとおっしゃいました。

実は中東は一言では語れません。中東ではアラブの春と呼ばれる民衆運動がきっかけとなり、多くの国が次々と政府対反政府軍が戦う内戦へと突入しました。その内戦の続くシリア、またイスラエルとガザ地区の問題などは比較的良好に報道され知っていても、実は中東の国々は地域によって文化も様々、民族も言語も宗教も、そして社会体制も多様なことはあまり知られていません。過酷な問題を抱える国がある一方で、鵜塚さんが滞在されたイランでは人々が美しい四季や花、美味しいケーキやサッカー観戦を楽しむ豊かな生活の様子がありました。ではシリアが報道されるのはなぜか、それはその悲惨な戦場や難民の状況があるからだけではなく、シリアの持つ資源や利権を争いその内戦の裏でアメリカ、ロシアといった大国が関わっているからです。一方で中東の最貧国であるイエメンは、ユニセフも警告を鳴らし危機的な飢餓問題に直面しているのに関わらずほとんど報道されていません。それは、この国は資源に乏しく大国にとって見返りのない国だから、その結果世界が無関心となっているのです。

報道したい気持ち、でも関心の薄いことを報道しても閲覧率が低ければ記事にできない悪循環、鵜塚さんはどこかで変えないといけないとおっしゃいます。そしてシリアから解放され帰国した安田順平さんの話題から、誰も伝えない、伝えられない現状をフリーの立場からレポートしようと奮闘する記

者についてのバッシングとして自己責任論が持ち上がっていることについても、彼らの記事の意義について考えて欲しいとおっしゃいました。私たちは知らず知らずのうちに、多くの人に関心を持つことだけを知り、議論し、コントロールされ問題の本質が遠くにあることにさえ気付いていないのかもしれないとはっとさせられました。

中東の貴重なお話とともに深く考える時間ともなりました、鶴塚さん本当にありがとうございました。



### 3-5-6 ● 2019/01/16 GUS I ー講演ー(高校2年生)

#### 環境セミナー「未来への翼」 池田 憲昭 氏

今日は、森林コンサルタントとしてドイツと日本の架け橋となり持続可能な社会の構築に携わっておられる池田憲昭氏に講義を受ける機会を持ちました。池田氏は2003年以来、ドイツのフライブルク地域を拠点に、ドイツ環境視察セミナーのオーガナイザー、異文化マネージメントのトレーナー、コンサルタント、日独プロジェクトのコーディネーター、専門通訳、執筆家としてご活躍されています。本講のGUS I 講座では2017年～2019年のドイツフィールドワークの際に現地で大変お世話になっています。

「森を破壊した文明は必ず滅びています」と池田さんのお話はこのように始まりました。ドイツでは既に1700年頃には森林経済論として、木を伐採する場合はその森の持つ再生能力を超えて伐採してはならないとハンス・カール・カルロヴィッツ(Hans Carl von Carlowitz)により提唱され、各々の自然形態は壊されずに長期的な視点に基づき保持されるという考えは今でもこの分野における礎となっているそうです。現在使用されている概念は彼が初めて使用した「Nachhaltigkeit=持続可能」から始まります。これは将来に備えるという当たり前の考えの元に生まれたもので、森の仕組み、コンセプトそのものが持続可能なモデルということです。また森は地球上の生物の質量の8割を占め、最近では植物に「知的な」コミュニケーション能力があり、植物はコミュニケーションを取りながら不測の事態にも対応して種を守っていることがわかってきたそうです。この研究結果は大変興味深いものでした。木は菌根菌という植物の根と菌の共生体であるキノコと助け合って周りの木とも情報交換をしているというものです。

池田さんは、持続可能性をテーマに、2011年に福島県飯舘村で放射線被害に遭い今も村を追われている中学生を対象とした2週間のワークショップにも取り組まれています。ドイツでの国民から始まった反原発運動の流れと政府が原発建設を全て中止し代替エネルギーに移行することを決めるまでのお話、そこから子ども達は実際に再生可能エネルギー100%以上で稼働している街や村を訪ねます。この研修はこれまでに2年間で現在3回行われ、子ども達が明るい未来を持てる研修を目的としています。

ドイツ国民には、粘り強く戦ってきたパイオニアがいます。未来への投資も惜しまないのは、現在のことだけでなく将来への思いやりと配慮からです。ドイツでの森林経済論にあったお話からも、私たち1人1人はこの当たり前のこと、つまり持続可能な社会を構築する一員でなければなりません。

池田さんには、貴重な一時帰国中に私たちのためにお時間を割いて頂き本当にありがとうございました。



### 3-5-7 ● 2019/02/05 GUS I ー講演ー(高校2年生)

#### キャリアセミナー「対立と協調から語るコスモポリタン」 森川 冬馬 ジン 氏

今日は、講師として本校の卒業生で現役の大学生である森川冬馬ジンさんにご自身の学んだことやご経験からコスモポリタンについてお話を伺う機会を持ちました。

国際政治とは戦後に生まれた学問です。なぜ人類は大戦を阻止できなかったのか、その失敗を繰り返さないために国を超えた国際機関などが組織されるようになりました。「国際社会はアナーキーである！」森川さんはクラスであるゲームを実践し、各生徒をそれぞれ「国」と見なし、「国際社会」をクラス内で再現してみることを試みました。欲や名誉のために戦ってしまう状況や、緩やかでもルールを設けることで国と国が交渉できるようになれば戦いは多くの場合回避できることを体現しました。国際社会は、強い王や政府、また法律で守られ規制されている国とは違い、「無政府状態」つまり「アナーキー」です。つまり国際ルールはあっても従うかどうかはその国次第という、あくまで緩やかな秩序の上に成り立っているものです。国際機関などはこの無政府状態の国際社会において、指標を示

し、対立より協調へと導くという大変重要な役割を果たしています。

森川さんは、現在までに高校生ボランティアとして OECD での広報活動、外務省軍縮不拡散科学部でのインターンシップそして政治学を学ぶために U.C.Berkeley への留学など、多くの経験を積まれました。国際社会に貢献するためには、まず多くの知識、社会の多様性を知らなくてはいけない、無知であっては、議論も配慮もできないことを実体験から痛感されています。また政治学を学ぶということでもなくとも、自分が本当に好きなことを通じて国際貢献はできるというメッセージを残してくれました。実際、日本も含めて優秀な科学技術は SDGs の達成に非常に重要な役割を担っています。

森川さんはこの9月から日本の大学を退学してアメリカの大学へ編入する道を選択されました。分断するアメリカの現状について、自分が正しいと主張し相手の立場に立とうとしない姿勢に危機感を抱いているそうです。より多くの知識を身に付け、経験を通して、さらに物事を多角的に見る目を養い、より幸せな、より平和な社会に貢献されるコスモポリタンへと成長されることでしょう。目標にする先輩としていつかまたお話に来ていただける日を皆心からお待ちしています。



### 3-6-1 ● 2018/06/05 GUS II ー講演ー(高校3年生)

「低炭素社会に向けた国際社会の動き OECD を題材に」 樋口 厚志 氏

今日は、OECD 東京センターより副所長である樋口厚志さんがこのクラスのために講演にお越し下さいました。樋口さんは各国に政策提言をされる現場の最前線で活躍されています。国際社会で国と国を繋ぎ、環境問題に取り組む貴重な体験や現場での生のやりとりなど、普段は知ることのできない実態についてお話を伺うことができました。具体的、かつ楽しくお話をしてくださった樋口さん、その親しみやすい誠実さからも国際社会の交渉の現場でのご活躍の様子を想像することができます。

#### ●OECD とは

設立は 1961 年。加盟国は先日加盟したリトアニア、コロンビアを合わせて現在 37 ヶ国。

国際的シンクタンクとして、統計などのデータを豊富に蓄積し、安全保障、軍事以外のあらゆる問題について、政策実現の重要な場面に関わっています。

印象的だったのは、いずれの場面でも政策を実行に移して行くためには、「政策を方向づけるもの」が必要であるということ。方向づけは、民意、マスメディア、企業、政治家、役所また国と国の交渉によって行われますが、常に誰が得をし、誰がやらないと損をするか、この「誰が」ということに大きく左右されます。こういった時に、ファクトベースの合理性が説得力を発揮します。豊富なデータを保有する OECD による合理性への貢献は、非常に大きなものとなっています。

日本は 2019 年 G20 の議長国になっています。国際社会でリーダーシップを発揮する大きなチャンスであり、ここでも OECD は戦略的パートナーとして参加しています。

G20 でキーワードになる言葉は「質の高いインフラ Quality infrastructure」だそうです。この問題を、日本、G20 両者の一致する問題意識として認識に至るまで交渉を続けていたのが OECD です。そしてこの問題は、このクラスで取り組んでいる環境問題に大きく関係しています。来年行われる G20 への関心がとても高まりました。

世の中のさまざまな問題を解決するために OECD が取り組む社会を動かすということ、政策をどう方向づけ、何を原動力とするのか、これはこれから私たちが社会に提言する際のとても重要なヒントとなりました。樋口さん、本当にありがとうございました。



### 3-6-2 ● 2018/09/11 GUS II ー講演ー(高校3年生)

#### 「京田辺市の環境政策」京田辺市役所担当課の皆様

夏休み明け第一回目のクラスの今日、京田辺市役所より担当課の皆さまにお越しいただき、環境政策に関わる「廃棄物」「交通」「エネルギー」を中心に講義をしていただく機会を持つことができました。

地球全体の環境がどれほど悪化しているか、多くの科学者が精密なデータと共にその危機を示している中、なかなか私たちの毎日の生活、実社会ではその危機に対して行政が対策を立て実行しているという実感がありません。そこで実際に身近な京田辺市では環境問題に対してどのような取り組みがなされているのか、現場でのお話を聞く貴重な時間となりました。

廃棄物については、京田辺市では生ゴミを減らすための政策として生ゴミのコンポストの購入費用を

補助しており、市民ボランティアがまだ使える製品のリユースするための活動を行っていることから再利用が普及しています。まずはゴミを出さないということに力を入れた結果、人口増加であってもゴミ排出量は増えず、全国的にも1人1日当たりのゴミ排出量が少ないというデータも出ています。

交通については、日頃から市民にも公共交通の利用普及のために講座を開いているそうです。京都市と違い、公共交通は市ではなく民間業者が請け負っているため、市としてはそういった公共交通利用についての普及活動や情報提供といった形で棲み分けがされています。今後の課題である高齢化社会において、環境のためのということもありますが健康維持のためにも歩く、バスや電車に乗るといった自動車の利用を少しでも控える意義についてご説明されました。

他にも Challenge ECO というシートを継続的に広報に掲載し市民に環境問題に関心を持って取り組んでもらえるよう、またエコ設備等設置に関する補助、また目標や結果を京田辺市地球温暖化対策実行計画で公開していることなどたくさんの取り組みについて教えていただきました。

<京田辺市地球温暖化対策実行計画>

[http://www.kyotanabe.jp/cmsfiles/contents/0000005/5164/kuikisesakuhenn\\_2018.05\(zennpenn\).pdf](http://www.kyotanabe.jp/cmsfiles/contents/0000005/5164/kuikisesakuhenn_2018.05(zennpenn).pdf)

今日はお忙しいところ本当にありがとうございました。生徒たちが事前に送付したたくさんの質問にも一つ一つ丁寧にお答え頂き、心より感謝致します。

また、市民部長自らお越し頂くなど、市民や市に関わるいろいろな立場の人の意見に耳を傾けながら、市を良くしていこうと尽力される市役所の方々の姿勢からも感銘を受けました。これから交流を深めさせていただき、できればさらなる意見交換、協働させていただく機会を作ることができるよう勉強していきたいと思えます。



## 3-6-3 ● 2018/09/25 GUSⅡ -講演-(高校3年生)

「気候変動対策を織り込んだプロジェクト”0”への道」京都市環境政策局地球温暖化対策室 安田 真也 氏

本日の GUSⅡ では、京都市環境政策局より地球温暖化対策室課長安田真也様にお越しいただき、お話を伺う機会を持つことができました。

先週の京田辺市での環境問題に対する政策に引き続き、京都市ではどのような取り組み、またその成果、工夫や抱える課題抱等について、大変興味深い講座となりました。安田さんは、京都市役所で様々な部署でのお仕事を経て、現職では 4 年目を迎えられておられますが、京都市での環境問題への取り組みは、1997 年の先進国の温室効果ガス排出削減目標が掲げられた COP3 京都議定書採択より大きく動き出したそうです。京都でもこの 100 年間の記録から温暖化が原因とされる自然災害が増えていること、そして対策としては CO2 を出さず吸収を増加させる緩和策と、温暖化に伴う被害の防止と軽減を図る適応策に分け政策が展開されていることをご説明くださいました。

市民に身近な政策では、天ぷら油の回収などのバイオディーゼル燃料の取り組み、地域でエコに取り組むエコ学区の設定、歩くまち京都として歩道の拡張やパークアンドライドの通年実施など、また京都議定書の発効日を記念し毎月 16 日「DO YOU KYOTO?」をキャッチフレーズとした環境にいいことを呼びかけるキャンペーンが実施されています。他にも創エネ、省エネ設備への支援など多くの政策の取り組みの大きな成果から、環境モデル都市として 4 年連続最も良い評価を得ています。そして引き続き 2020 年までに温室効果ガス 1990 年度比 25%、そして 2030 年には 40%の削減を目指しています。エコは不便ではない、楽しむ発想の転換をとおっしゃっていたことが印象的でした。

最後は、グループに分かれてディスカッションした生徒たちによるミニ提言をさせていただきました。1つ1つの案に対してとても誠実にまた的確にご指摘くださいました。いくつかの案は持ち帰って検討したいとおっしゃっていただき、実際にお話を聞き、自分たちの案を直接提案できる機会を得たことは生徒達にとって大変貴重な時間となりました。思考を続けていく中で考え方の重要なポイントが明らかになり、今後も対話をさせていただく機会を継続し、提言につなげていきたいと考えています。



# Global Understanding Skills

## フィールドワーク



## 3-7-1 ● 2018/11/11,12 GUS BASIC -国内フィールドワーカー(高校1年生)

## バイオマスツアー 真庭

GUS BASIC 高校1年生の講座より9名の生徒が、岡山県真庭市によるバイオマスツアーに参加して来ました。毎年研修先として伺っており、今年で4回目となりました。真庭市は、豊かな森林資源を生かしバイオマス事業を軸に持続可能な社会構築を目指し、「バイオマス産業杜市 真庭」として挑戦を続けています。その取り組みについては、40万部が売れ2014年新書大賞を受賞しベストセラーとなったNHK広島取材班による「里山資本主義」の出版の中で紹介され、大変注目されています。

ツアーでは、地域資源の有効活用によって化石燃料に代わる様々な新エネルギーの実用化に関わる現場を効果的に学習することができました。真庭森林組合ではバイオマスのしくみや課題についてお話を伺い、木質ペレットの国内生産ではトップシェアをもつ工場、建築の構造材などへの利用で注目されるCLT(直交集成板)工場、バイオマス発電所、そして地産地消エネルギー100%を利用する真庭市役所本庁舎等の見学を行いました。資源を無駄なく活用する“真庭モデル”を多様な場面で実際に感じることができました。

真庭市の皆さま、大変お世話になりありがとうございました。

生徒たちの訪問の様子が、真庭市ホームページにも紹介されています。

<https://www.facebook.com/biomasstour.maniwa/posts/1795079193953819>



2018年10月24日

# ご旅程表

## 同志社国際高等学校 様

東武トップツアーズ(株)京都支店  
 教育旅行センター

支店長：桐野 晋一  
 総合旅行業務取扱管理者：樋口 貴弘  
 担当者：大谷 将人

旅行日：2018年11月11日(日)～11月12日(月)

旅行先：岡山県真庭市

人員：生徒 9名 (M5名、F4名)、先生 1名 合計 10名

日次	月日	曜日	行程	宿泊・備考
1	11/11	(日)	【バス会社】明星観光バス 【集合】13:00 京都駅八条ロバスプール 【配車】13:00 京都駅八条ロバスプール  京都駅 == <京都南IC～久世IC> == 勝山町並み保存地区 == <久世IC～湯原IC> == 湯原温泉(泊) 13:20 16:00 17:00 17:30  夕食 18:30～19:30 ミーティング 19:30～20:30	【湯原温泉】 森のホテル ロシュフォール  TEL:0867-62-3939  【生徒様】 【引率先生】シングル
2	11/12	(月)	※木の駅勝山木材ふれあい会館にてガイド合流 湯原温泉 === 真庭市【SGHハイオマス研修】(昼食) == <落合IC～京都南IC> == 京都駅 9:00 9:30 14:00 17:30	
記入例)	新幹線	→	貸切バス=====	〒600-8107 京都市下京区五条通新町東入る東鋳屋町186 ヤサカ五条ビル9階 TEL:075-361-0991 FAX:075-361-7866

## 3-7-2 ● 2019/01/22,23 GUS BASIC -国内フィールドワーカー(高校1年生)

## 東京 国際機関

GUS Basic 高校1年生の講座より選抜された12名の生徒が、東京フィールドワークに参加しました。2年次設置科目GUS Iで予定している環境先進国ドイツ訪問を念頭に、今回のフィールドワークでは、政府機関、国際機関、またドイツ大使館を公式訪問し、私たちの学習意図を説明し、それぞれの環境問題に関する概説を伺いました。また体験学習、そしてグローバルな舞台で活躍中の先輩たちからレクチャーを受ける機会も持つことができ、大変充実した2日間となりました。

## 【研修1日目】

- 国会議事堂見学、議員食堂で昼食を取り、議員会館で衆議院議員の講話を聴く
- 外交資料館見学 本館と別館
- グローバルセミナー受講(本校卒業生)  
講師：関川知里氏(JAXA 管制官 J-FLIGHT ISS)  
講師：河野大和氏(文部科学省 高等教育局 専門教育課)

## 【研修2日目】

- ドイツ大使館訪問 広報外交官、ドイツ外務省研修生、広報官との意見交換
- JICA地球広場訪問 課題に対するイノベーションを学び、海外青年協力隊OBの体験談を伺う

生徒たちのドイツ大使館訪問の様子がドイツ大使館ホームページ内のブログで紹介されています。

<http://young-germany.jp/2019/01/%E4%BA%AC%E9%83%BD%E5%BC%81%E3%81%A8%E3%83%89%E3%82%A4%E3%83%84%E8%AA%9E/>





3-7-3 ● 2018/12/9 GUS I –海外フィールドワークー(高校2年生)

Freiburg 生徒たちからのレポート①

12名の生徒たちが環境先進国に学ぶことを目的に、ドイツへのフィールドワークに向けて出発しました。フライブルクに滞在し今日で4日目となります。生徒たちから毎日送られてくる活動報告から、その充実ぶりが伺えます。その一部を紹介します。これからの報告も楽しみにしています！

【12月10日(到着翌日)フライブルグ市旧市街の多様性ある街作り/実習 木工ワークショップ】

フライブルク市旧市街を散策しながら、多様性のある街作りについて学んだ。

●道路

現在、旧市街の道路は歩行者天国になっているが、過去には普通に車が行き交っていた。しかし学生運動や環境運動により、街への車の出入りを制限、歩行者天国になると同時に路面電車が発達した。

●朝市

ヨーロッパでは農作物の収穫量が多いため、価格が低く地域農家に不利な状況になったことから、地域農家に販売の機会を与えようと朝市が開催されている。

【12月11日(3日目)インクルージョン事業/実習 環境ワークショップ】

●インクルージョン事業

障害者といったカテゴリーに当てはめてしまうことはより社会から遠退けることに。障害を持っている人々の日常生活を出来るだけ助けを求めず生活できるようサポートし、一般社会の中に含まうという活動を見学。

●エコワークショップ

自然からできたものは自然に戻る。エコステーションでは様々な製品が土の中に入れられ、自然によって完全に分解されるまでにかかる時間を計測している。

プラスチック包装 約100年、ペットボトル 約500年…

●マイクロプラスチック

私たちが日常的に着る服の素材には60%プラスチックが含まれ、洗濯機内で発生する衣服の摩擦によってマイクロプラスチックが発生してしまう。それが海へと流れ、海洋生物への悪影響となるだけでなく、生態系全体への悪影響を及ぼす。



## 3-7-4 ● 2018/12/13 GUS I -海外フィールドワーカー(高校2年生)

## Schwarzwald 生徒たちからのレポート②

フライブルク滞在の最終日、生徒たちは街の北東に位置するシュバルツバルトに向かいました。かつて酸性雨の影響で枯渇の危機に陥ったその森で営まれる持続可能を目指した取り組みを学びました。そして次は、エネルギー自給自足の村フライアムト、そしてカーボンニュートラルの取り組みが進むハイデルベルクを経て、次の活動の拠点となるビーレフェルト市に入ります。

生徒たちから届いた報告より一部をご紹介します。

**【12月13日(5日目) シュバルツバルト 森林ワークショップ】**

## ● シュバルツバルト

2時間散策した後、「持続可能な社会を作る」ということをベースにフライブルク大学で森林環境学を学ばれた環境コンサルタント池田憲昭氏よりレクチャーを受けた。

## ● フライブルクの旧市街

旧市街に戻り、アップサイクリングという価値の少ないものを価値あるものに生まれ変わらせたものを扱う店を訪問、その後電車が来るまでの1時間をクリスマスマーケットをまわって過ごした。

**【12月14日(6日目) フライアムト村】**

ドイツ南西部、シュバルツバルト一帯の中にある小さな村フライアムト。再生可能エネルギーに対する取り組みが非常に進んでいる村として有名であり、太陽光、風力、バイオガス発電を主に総電力生産量は300%にも及ぶ。バイオガス発電を営む元農家のランボルトさん宅、風力・太陽光発電・ペレットによる再生可能エネルギー発電を営む森のオーナー・シュナイダーさん宅を訪問。風力発電機を作るのには多くのお金が必要で、ここでは市民143人が投資をし、一つの発電機を作った。このように大企業ではなく、小さな農家が少しずつ出資して作る場合が多い。

**【12月15日(7日目) ハイデルベルク カーボンニュートラル視察】**

「元々あるものを再活用する」これはドイツのアイデンティティである。使用しなくなったもの、もしくは、古くなったものを壊して新しく同じようなものを作ることは簡単であるけれど、故郷が奪われそれはそこにいる理由を奪うことと等しいからだ。トラムを採用している多くの街でもトラムの下には砂利よりも音を吸収する草が敷かれている。周辺の住宅街を気遣い、景観を良くするだけでなく、騒音を抑えることに繋がる。水の循環を大切にしまちづくり、自転車に優しいまちづくり、少ないエネルギーで暮らせるパッシブハウス、また開発からネズミやトカゲ、微生物まで生態系を守る仕組みを視察。コンビニや大型ショッピングモールはないが個人商店が軒を連ねるととても豊かなハイデルベルク、その街を見守る美しい城も見学。



### 3-7-5 ● 2018/12/20 GUS I ー海外フィールドワーカー(高校2年生)

#### Bielfeld 生徒たちからのレポート③

生徒たちはドイツ南部より北上し8日目にビーレフェルト市に入りました。最後の宿泊地となり、ドイツフィールドワークも残り4日間となりましたが、ここを拠点に脱包装・包装を一切使わない店舗への訪問とインタビュー、総合医療福祉施設ベーテルの視察と交流、そしてハノーファーへ移動しドイツ最古の環境教育施設での実習を行います。その後はいよいよ帰国の途へ、皆元気で帰ってきて下さい！

生徒たちから届いた報告の一部をご紹介します。

#### 【12月16日 研修8日目 日曜礼拝とビーレフェルト散策】

##### ●待降節礼拝

ドイツの初雪を体験した。雪の中、日曜の待降節礼拝にビーレフェルトの教会へ行き、ドイツ語の賛美歌を歌うチャレンジをしたりして、ドイツならではの体験をした。

##### ●川の再自然化

トラムで1時間ほどのデトモルドの街では、川の再自然化を視察。2008年まで工業の町であったために一度はコンクリートで固められた川を、生物が自然に行き交うようにするため、また人々が大切に思えるような川に戻すための取り組みを行う。

#### 【12月17日 研修9日目 無包装の店舗、再生可能エネルギーを活用する牧場】

##### ●ドイツと日本の土地利用について

建築・都市・環境コンサルタントである永井氏よりレクチャーを受けた。ドイツの都市計画は様々な工夫があるがその特色は、「地域の分散化」「住居地間と保養空間の均衡」「各地域経済の独立と強化」がある。

●無包装のお店 “unverpackt “

持続可能性を追求した 2 人が設立、ビニールの使用をできるだけ減らそうとしてできたオーガニックで無包装のお店を訪問。同時に食品を廃棄しない工夫、オーガニックなど人々に安全なもの、おしゃれなロゴやそれをモチーフにしたエコバックなどインタビューの中で店の取り組みをよく知ることができた。

●再生可能エネルギーを元に作られた牧場

ここでは生物の多様性と環境を考え「地下水の硝酸塩の汚染」「生物の多様性の少なさ」「バランスのないエネルギー生産」を大きな環境問題ととらえ、牧畜に取り組んでいる。

【12月18日研修10日目 総合医療福祉施設ベートル】

●ベートル内の2つの学校訪問

Mamre-Patmos- Schule は様々なアシストが必要な学生たちが通う個人のニーズに合わせた特別な授業のある学校だ。学長の言葉である「People are different ,and that is normal」という言葉の通り、様々な思考のこらされた学校。もう 1 つの訪問先はギムナジウムで、ドイツの中等教育機関だ。持続可能性のことについて言及し、たくさんの賞も受賞している。ここで私たちは、日本の学校制度、少子高齢化、そして過疎化について発表した。ドイツの学生はとても積極的で、沢山の質疑応答があり、充実した時間を過ごすことが出来た。ベートルのボランティアで日本人のヒュステベック節子さんにベートル内を案内してもらった。

【12月19日 研修11日目 ハノーファー市学校生物センター】

●Buckeburg 城

ハノーファーに移動し、城内の美しい絵が天井に描かれたゴシック様式のチャペルでお話を伺った。

●ハノーファー市学校生物センター

27年間生物センターで働いている Ledderbogen 先生から生物を学ぶことの大切さを教わった。植物の生態、地球温暖化により予測される事態への対応についても研究されており、自然と触れ合う中で今までは知らなかった仕組みも学習することができた。



後日 Bethel のホームページにも生徒たち訪問のニュースが掲載されました。

The screenshot shows the Bethel website's news section. At the top, the Bethel logo and 'Stiftungsbereich Schulen' are visible. A navigation bar includes 'Startseite', 'Über uns', 'Aktuelles', 'Schulverwaltung', 'Schulen in Bethel', 'Beratungsstelle', 'Fachinformationen', and 'Kontakt'. The main content area features a news item dated 06.12.2018 titled 'Besuch der Doshisha International School in Bethel'. The article text describes a visit to the Doshisha International High School in Kyoto, Japan, by a delegation from Bethel. A photo shows the group in front of the school building. A sidebar on the right contains a search bar, an 'Informationen' menu with links to 'Kontakt', 'Links', 'Suche', 'Impressum', and 'Datenschutz', and logos for 'MoviLe.info', 'Erasmus+ Projekt "Mobile virtuelle Lernräume"', and 'SCHULBAUERNHOF UMMELN'. A left sidebar lists 'Aktuelles' from 2010 to 2018. A footer link reads '« Zurück zu: Aktuelles'.

## 研修旅程 2018年12月9日(日)～12月21日(金)



日	月日(曜)	地名	現地時刻	交通機関	行程 (宿泊地)	備考
1	12月9日 (日)	関西空港 フランクフルト Frankfurt/a.M	10:40 14:50	LH 741 貸切バス	空港集合 空港ー貸切バスー現地 オリエンテーション	Hotel & Gasthaus Löwen  Schwarzwaldstraße 34 79183 Waldkirch-Buchholz
2	12月10日 (月)	Freiburg I B Schwalzwald		トラム	フライブルク市旧市街の多様性のある街づくり 実習 Waldhaus 木工ワークショップ	Hotel & Gasthaus Löwen  Schwarzwaldstraße 34 79183 Waldkirch-Buchholz
3	12月11日 (火)	Freiburg I B Schwalzwald		トラム	インクルージョン事業 共生社会 Ökostaion Freiburg 実習 環境教育ワークショップ	Hotel & Gasthaus Löwen  Schwarzwaldstraße 34 79183 Waldkirch-Buchholz
4	12月12日 (水)	Waldkirch		トラム R-Zug	スローシティー見学 朝市 地産地消 持続可能村落視察 スローフード、ベーガンタ食会 実習	Hotel & Gasthaus Löwen  Schwarzwaldstraße 34 79183 Waldkirch-Buchholz
5	12月13日 (木)	Freiburg I B Schwalzwald		トラム	森林ワークショップ 持続可能性社会 レクチャー アップサイクリング工房見学 実習	Hotel & Gasthaus Löwen  Schwarzwaldstraße 34 79183 Waldkirch-Buchholz
6	12月14日 (金)	Freimat Mannhrim		貸切バス	エネルギー自給村フライアムト視察 (Innovation Academy による案内) バイオガスコージェネ、太陽光発電、木質チップ熱、風力発電	H+ Hotel Mannheim  L 12 15-16, 68161 Mannheim
7	12月15日 (土)	Heidelberg		トラム	カーボンニュートラル視察 郊外 Bahnhof Heidelberg	Arcadia Hotel Bielefeld  Niederwall 31-35 33602 Bielefeld
8	12月16日 (日)	Bielfeld Detmord			Bielfeld Munster 待降節礼拝出席 Weihnachtsmarkt 市内散策	Arcadia Hotel Bielefeld  Niederwall 31-35 33602 Bielefeld
9	12月17日 (月)	Bielfeld Detmord		トラム	インタビュー 事業者との交流 脱包装 包装を一切使わない店舗 Unverpacktladen	Arcadia Hotel Bielefeld  Niederwall 31-35 33602 Bielefeld
10	12月18日 (火)	Bielfeld Detmord		トラム	視察「総合医療福祉施設 ベーテル」 統合型教育機関、福祉施設、病院 附属病院 院内学校訪問 生徒間交流	Arcadia Hotel Bielefeld  Niederwall 31-35 33602 Bielefeld
11	12月19日 (水)	Hannover Frankfurt a M		貸切バス	実習「ハノーファー市学校生物センター」 ドイツ最古の環境教育施設での実習	Sheraton Airport & Conference CTR Flughafen Terminal 1 FRANKFURT a M
12	12月20日 (木)	Frankfurt /a.M	13:35	LH 746	帰国準備	機中泊
13	12月21日 (金)	関西空港	08:40	LH 746	空港解散	



# Global Understanding Skills

## その他の活動



## 3-8-1 ● 2018/03,2018/05 GUS –その他の活動–

## The Global Enterprise Challenge 高校生対象 12 時間の国際競技に参加

Global Enterprise Challenge(GEC)は特定非営利活動法人アントレプレナーシップ開発研究センターが主催するもので、国内予選で入賞したチームが世界大会（Global Youth Entrepreneurship Challenge(GYEC)）に出場権を得ます。挑戦する課題（challenge）は環境、エネルギー、産業、災害対策、教育など世界が共有する問題に関わるもので、競技では、その課題を科学技術を活用し、事業として持続可能な形でどのように解決するかを問われます。参加者は3人以上8人以内でチームを結成し、その解決策を英語で2ページの事業プランと3分の動画プレゼンテーションにまとめて提出し、最終的に創造性・革新性、実現性、市場性、コミュニケーション能力などの点で総合的に評価・審査されます。英語をツールとして使い、多様な視点で社会変革に取り組めるグローバル人材（チェンジメーカー）の育成を目的とした競技です。

（活動内容については、特定非営利活動法人アントレプレナーシップ開発センターのホームページより抜粋）<http://www.entreplanet.org/GEC/about.php>

**March 2018 Global Youth Entrepreneurship Competition-National Round(国内予選)**

The theme of the Japan round was designing a product that would utilise current IT to lower infant mortality, one of the targets of the Sustainable Development Goals. Doshisha International High School's team designed a wearable baby monitor that would be sold in Japan, and also made available to developing countries through a subsidy built into the price. The business plan and marketing video saw the team secure second place in the Japan competition and move on to the International Competition.



### **May 2018: Global Youth Entrepreneurship Competition - International Round(世界大会)**

For the International Competition the challenge was “To propose an innovative business centered on a futuristic means of transportation that uses the latest technologies”. Doshisha’s Team Excelsior produced a design for a pod based bus service that would adjust the space available based on the number of passengers requesting the service; using a range of IT solutions to maximise efficiency. Doshisha International’s team finished third from a total of fifteen teams representing nine countries to finish off another successful year of innovative thinking.



#### 3-8-2 ● 2018/06/05 GUS —その他の活動—

##### 国際協力開発機構(OECD)特別講座 東京センター副所長 樋口 厚志 氏

OECD 東京センター副所長の樋口厚志さんには、GUSⅡ（高校3年生）のクラスで「低酸素社会に向けた国際社会の動き OECD を題材に」と題して講演をしていただいた後、お昼休みには特別教室で樋口さんを囲んでお茶やお菓子を頂きながらの座談会にもご出席いただきました。参加は自由、事前に高校生にアナウンスをしていました。

樋口さんは日頃、国際的なシンクタンクである OECD で日本のお立場から各国に政策提言をされる現場の最前線でご活躍されています。講演の時も大変親しみやすいお人柄を覗かせていらっしゃいましたが、座談会では、大学で学ばれた経済のこと、ご自身が打ち込んでいたお芝居や音楽活動のこと、向いていると志望した広告業界のこと、ご自身がなぜ今の職に就かれたのか、時には失敗されご苦勞のあったお話、そして前向きに挑戦した経緯など個人的なこともざっくばらんにお話してくださいました。

参加した生徒は特別教室の椅子が足りないほどの盛況ぶりで、生徒たちが国際機関での仕事についても大変興味を持っていることがわかります。質問では、実際の職員の男女比率、国際機関で働くため

の準備、求める人材など具体的なものから、環境問題と経済発展の両立は可能か、少子高齢化の問題についてなど社会的な課題にも及びました。

印象的だったのは、現職まで道のは波瀾万丈であり、常に自分の持ち味を分析してその都度挑戦、選択をされてきた樋口さんの経歴と、国際機関で働くためには言語能力が高いということだけではなく、いかに周りの価値観の違う人達と協調協力していけるか、そして前向きな姿勢でいかに周りを巻き込んで突き進むことができるかが問われているとおっしゃいました。

樋口さん、長時間に渡り本当にありがとうございました。



3-8-3 ● 2018/03,2018/06,2018/11 GUS —その他の活動—  
WORLD SCHOLAR'S CUP 2018 世界大会へ



**World Scholar's Cup: Kansai May 2018**

In May 2018 Doshisha International High School hosted the Kansai round of the World Scholars Cup for the first time. This was also the first time non Japanese schools had participated in a Japan round as

we hosted teams from Kyrgyzstan!

After many hours of practice during the winter break Doshisha finished first in team debate, first in individual debate awards, and all teams qualified for the Global Round!



### **June 2018: World Scholar's Cup Global Round in Kuala Lumpur!**



We set off with a total of 43 students, 21 from High School and the remainder from Junior High.

Confidence was high after all the preparations and the students were able to sample a variety of cultures from the 50 countries represented, as well as exploring the capital city of Malaysia. After an incredible week of studying, competing and making new life long connections we approached the awards ceremony.

Six senior teams and three junior teams qualified for the final Tournament of Champions at Yale University, and we also saw one of our students place 10th in the competition, and 15th in the debate section. An incredible achievement in a competition of over 1500 students from around the world.



**November 2018: The Tournament of Champions at Yale University**



November saw the finale of the competition and 16 of our Seniors attended the competition at Yale University. We had a great tour of the campus from a second grade Yale student, ate in the Yale dining hall, played in the snow when the temperature hit -8C, and also debated, wrote and competed with the top 1000 senior students from around the world.

On awards day one of our students serenaded the audience in the talent show, and when the medals are given out all students received at least one award. Our top student finished in the top 50 and we had teams place in the top 15 for some events.

An incredible end to an amazing year of study ..... and many of the students are planning to do it all again in 2019 (hopefully with an even larger Doshisha group!)



## 3-8-4 ● 2018/12/15 GUSⅡ ーその他の活動ー (高校3年生)

## SGH全国高校生フォーラム 2018 に参加

GUSⅡより4名の生徒が、12月15日に東京国際フォーラムで開催されたSGH全国高校生フォーラムに参加しました。全国のSGH指定校、アソシエイト校から代表生徒たちが一堂に会し、ポスターセッション、ディスカッションを通して日頃取り組んでいるグローバルな社会課題やその解決に向けた提案、また研究成果について英語で発信、意見交換をすることを目的としています。

フォーラムの前日に東京へ向かった国際高校の生徒たちはいくつかのお話を伺う機会を持ちました。

● **ビオセボン (フランス系スーパー) 営業部長 岡田尚也氏**

ビオセボンが扱うバイオ商品は、廃棄物やリフィルなどを意識し、その生産過程においてもオーガニックであることはもとより環境や健康への配慮がされています。フランスと日本との生活習慣や文化の違いによる、日本での販売のご苦勞や困難さなどを乗り越え、企業体として店を成り立たせながら、日本にとって新しい発想や生活形態を根付かせたいという強い思いが伝わってきました。

● **OECD 東京センター 副所長 樋口厚志氏**

OECD 東京センターを訪問し、1学期に本校にも講演に来ていただいた副所長の樋口様に、提言のポイントについて、貴重なアドバイスをいただきました。実際にさまざまな情報が日々発信されている事務所に伺い、所員の方々の日常の努力の大きさを感じました。

● **本校卒業生**

夜には、本校の卒業生3名が宿泊先を訪ねてくれ、先輩のアドバイスの元プレゼンテーションの特訓となりました。在校時にはパリでのOECD国際会議にも参加したメンバーで、さまざまな視点からの確かな指摘をいただき、格段の進歩を遂げ生徒たちもしっかりと手応えを感じました。

いよいよ本番、前日までの改良を重ねた結果をきっちりと出し切った生徒たち。「持続可能な社会を担うグローバル人材育成プログラム～環境先進国に学び、世界に提言」というテーマの元、日頃の取り組みと成果についてしっかり発表することができました。明るさと聴衆を引き込むプレゼンテーションで、感心の声をいただき、他の学校にはない国際高校生らしい素晴らしい内容となりました。このフォーラムへの参加を通して、日常ではできない密度の濃い経験を経て、さらに新しい観点から世界が開けました。

大変お忙しいにも関わらず、お時間を取って下さった訪問先の皆さま本当にありがとうございました。





# Doshisha International Senior High School

<http://www.intnl.doshisha.ac.jp>



Innovative Student Program focusing on Globalization and Sustainable Societies:  
~Learning from environmentally advanced countries to bring new proposals to the rest of the world~

## Introduction

2/3 returnee students from over 50 countries  
Solutions to global environmental issues  
Proposed solutions w/community

### 1<sup>st</sup> of GUS Basic class



Basic global issues Sustainable Development Goals  
Focused on environmental issues  
Researched environmental policies  
Germany and Japan (transportation, wastes, renewable energy)  
Developed solutions related to waste problems at DIHS

### 2<sup>nd</sup> of GUS class



Researched German environmental measures  
Japanese and German attitudes toward environmental issues  
"Our map towards the future inspired by Germany and research from SGH students"  
Fieldwork

### 3<sup>rd</sup> of GUS class



Lectures from Organization for Economic Co-organization, Kyoto city and Kyotanabe city  
Created solutions towards issues starting with familiar places and extended our view School Cafeteria, Kyoto city, Kyotanabe city, OECD(Organization for Economic Co-operation and Development)

## Proposal



### School Cafeteria

Changing current plastic containers to paper  
Refill system for plastic bottles  
Setbacks cost-benefit balances  
attitudes towards environmental issues  
Students decided to focus on refill system  
Increase types of recycling containers



### Kyotanabe city

Increase recycling  
To increase the number of many types of recycling garbage cans  
Increase the use of public transportation.  
Transportation  
Reward for citizens using a public transportation

### Kyoto city

Reduce automobile use and waste  
Reducing Waste  
Incorporating garbage containers  
Reduce automobile use  
To control automobiles in the city  
Rising parking fee  
Increase use of bicycle /rental program



### OECD (Organization for Economic Co-operation and Development)

Why QI?  
Upcoming G20 in Osaka 2019  
Application of Fieldwork in Japan



## Fieldwork

Germany and Denmark March 21st to March 31st in 2018 eight students  
Motivated governments/citizens/local communities Lectures from various people

### Freiamt:

300% renewable  
co-owned by citizens



### Breitnau:

bio energy village  
combined heat and power

### Freiburg:

advanced environmental practices

### Hamburg:

Japanese consulate: lecture

### Lolland island:

700% renewable energy  
Leo Cristin

### Fyn island:

offshore a windmill  
Masato Yamada V.P.



### Copenhagen:

bicycle highway  
quiet zone  
international school: 12,000 solar panels

## Post Fieldwork

## Result

### Results of Student Survey

Over 90% experienced an increase in knowledge on global issues

Gained Skills in:

Leadership, and Communication

Student Statements:

"My ability to think critically has increased significantly"

"We now understand each other's strengths and weaknesses, which allows us to cooperate effectively"



**References** Takigawa, Kaori, et al. Ōshū No Enerugī Jiritsu Chiiki: Hyakupāsento Saisei Kanō e. Gakugeishuppansha, 2012.  
Imaizumi, Mineko. Koko Ga Chigau Doitsu No Kankyō Seisaku. Hakusuisha, 2003.



## 3-8-5 ● 2019/03/23 GUSⅡ -その他の活動- (高校3年生)

## 研究課題発表会 2019「SGH 甲子園」に参加

文部科学省大学入学者選抜改革推進委託事業「SGH 甲子園」が開催され、高校3年生 GUSⅡクラスから3人の生徒が参加しました。この大会では全国から109校のSGH指定校、アソシエイト校が集まり、研究成果プレゼンテーション、研究成果ポスタープレゼンテーション、ラウンドテーブル型ディスカッションに分かれて、それぞれの課題研究発表が行われました。課題研究のテーマは、共生、国際関係、持続可能な発展、あるいは観光、農業・食料といった多様な分野に及び、これまでに各校の特色を活かした取り組みが展開されて来ています。

同志社国際高等学校は、自分達の取り組みを振り返り、今後の展望も含めて発表を行いました。

## 【環境先進国に学び、社会に提言】

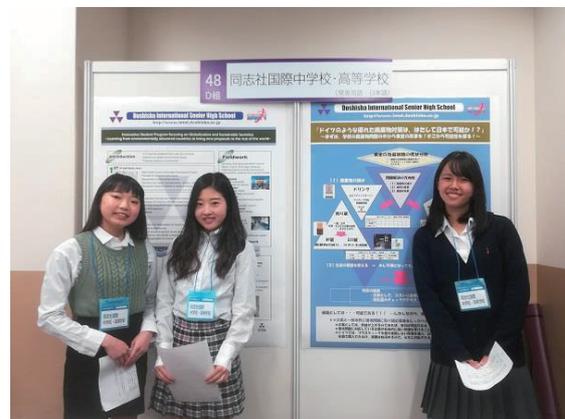
帰国生徒を含む多彩なバックグラウンドを持つ生徒達が各々の経験の普遍化を試み、SDG'sや問題解決の方法論について、リサーチやFWを通じて欧州の環境政策について学び、環境問題の解決を目指します。学校の食堂運営会社に企画案を提案、京都市、京田辺市に対する政策提言を作成し、OECDへの質の高い社会インフラ整備案を作成します。グローバルな問題に対し、様々な立場の人と協働し持続可能なシステム構築による解決を目指します。

その中で今回は、「ドイツのような優れた廃棄物対策は、はたして日本で可能か！ ～まずは、学校の廃棄物問題の中から、食堂の改革を！ そこから可能性を探る！～」という形で発表しました。

SGHの学びを通して他校との交流や意見交換ができたことは、参加した生徒達にとって大変貴重な経験となりました。

SGH 甲子園ホームページ

<http://sgh-koshien.jp/index.html>



## 3-9-1 ● 2018/07/13 GUS —その他の活動—

## 第4回 SGH 運営指導委員会

外部指導委員の十倉様（京都新聞社論説委員）、村田様（京田辺市市民部長）のお2人にもご出席いただき、毎年この時期恒例となっている本校のSGHへの取り組みを協議する運営指導委員会を開催いたしました。

校長より挨拶、文部科学省のSGH指定校修了後の取り組みの動向についてSGH開発研究委員長より報告があった後、各担当の教員よりGUSの昨年1年間の取り組みについて報告がありました。また、SGHの学びの一環としてWorld Englishの取り組み、SGHでの学びも活かされ生徒たちが活躍したWorld Scholars' Cup出場の成果報告、そして本校の国際交流プログラムについても概要説明がありました。

外部指導委員の方からは、本校のSGHへの取り組みのレベルが高くなって来ていることをご賞賛いただき、本年度高3になった生徒たちのGUSでの取り組みについては、環境問題を複雑なものとしっかり捉えた上でそれを乗り越えるための地道なリサーチを経ている点で大変高い評価をいただきました。また学校での環境問題の解決に向けて、教員と生徒が会社のような組織を立ち上げ役割分担し戦略を立てている点についても、実社会での実現に向けて有意義な学びになるとコメントをいただきました。World Englishや各留学制度においては、語学を学ぶという目的ではなく外国語で学ぶことを実践している点について、もっと公立でも広めて行くことができると高い評価をいただくことができました。

今後とも外部指導委員の皆さま、また外部講師の皆さまなど様々な方面の皆さまにご指導ご鞭撻いただきながら、未来を担う子ども達がグローバルリーダーとして学び成長するために引き続き教職員一同努力しこの取り組みを進めて行きます。



## 3-9-2 ● 2019/02/16 GUS —その他の活動—

## 2018年度SGH活動報告会

2月18日（土）、同志社大学今出川キャンパス良心館にて、2018年度SGH活動報告会を開催いたしました。本校のスーパーグローバルハイスクールとしての学びもいよいよその2期生を送り出そうとしています。この日の報告会では、同志社大学EUキャンパス支援室長経済学部教授である和田喜彦先生よりご挨拶いただいた後、本校SGH研究開発実行委員長の山本教諭より一年の活動を通しての振り返り、各学年代表の生徒達による活動報告のプレゼンテーションを行いました。生徒達はこれまでのSGHプログラムでの学びを通して、またフィールドワークでは実際に肌で感じたことを踏まえて考え、自分たちで行動に移す、そして提言をするというインプットからアウトプットへのステップへと学びを進めています。これまで、講演や講義でご指導いただきました講師の先生方、フィールドワークでたくさんの学びの場を提供し共有していただきました関係者の皆様、運営指導委員としてご助言いただきました委員の皆様、そして本日報告会に参加いただきました皆様、たくさんのサポートに心より感謝申し上げます。

## 【2018年度同志社国際高等学校 SGH 活動報告会】

1. 日時 2019年2月16日（土）13:30～16:20
2. 会場 同志社大学今出川キャンパス 良心館 2階 RY207・208教室
3. プログラム
  - 13:30 開会の辞 : 同志社国際中学校・高等学校 校長 川井国孝
  - 13:35 挨拶 : 同志社大学EUキャンパス支援室長 経済学部教授 和田喜彦
  - 13:45 成果報告 :
  - 【担当教員による実践報告】
  - ① 「本校のSGH研究開発授業の概要説明」  
同志社国際高等学校 SGH研究開発実行委員長  
宗教センター主任 宗教科教諭 山本真司
  - 14:00 【生徒による実践報告】
  - ② 高1 成果報告 GUS BASICでの取り組み（日本語）
  - ③ 高1 バイオマスツアー真庭フィールドワークの報告（日本語）
  - ④ 高1 東京フィールドワークの報告（日本語）
  - ⑤ 高2 ドイツフィールドワークの報告（日本語）
  - ⑥ 高3 ドイツ・デンマークフィールドワークの報告（日本語）  
企業とのコラボレーション（日本語）  
SGH全国高校生フォーラム プレゼンテーション（英語）  
自治体、国際機関への政策提言（日本語）
  - 16:10 謝辞 : 同志社国際中学校・高等学校 校長 川井国孝
  - 最後に : 同志社大学EUキャンパスについてお知らせ  
同志社大学 国際連携推進機構 国際課 種市麻里



開会の辞：校長 川井国孝



挨拶：同志社大学 経済学部教授  
EUキャンパス支援室室長和田喜彦先生



概要説明：山本真司教諭



GUS BASIC・II 担当：坂下淳一教諭



GUS BASIC (高校1年生)



GUS BASIC 東京フィールドワーク



GUS BASIC 真庭フィールドワーク



GUS I (高校2年生)



GUS II (高校3年生)

## 3-10●国際的資質や態度に関するアンケート・分析結果

SGH「国際的資質や態度に関するアンケート」

## 「SGH・国際的資質や態度に関する WEB アンケート」分析

【本校の特徴】本校は全校生徒の3分の2が海外で一定期間以上の日常生活経験を持つ「帰国生徒」、3分の1が国内での学習経験を中心とする「国内一般生徒」で構成されている。

【設置の経緯】1980(昭和55)年、同志社の精神と伝統を受け継ぎ、文部省(現・文部科学省)指定「帰国生徒受け入れ専門校」として高等学校を設立、1988(昭和63)年には中学校を開設し、中学校から大学までの一貫した教育が可能になった。帰国生徒教育の教育活動においては38年の歴史を持ち、海外子女教育振興財団により京都では唯一のA1群指定(帰国子女受け入れを主たる目的として設置された高等学校)されている。

このような本校の特徴ある学校設置意図と生徒構成を前提として、スーパーグローバルハイスクール(SGH)幹事校・筑波大学附属高等学校の要請に応じて全校規模で実施した「SGH・国際的資質や態度に関するWEBアンケート」結果の一部と外国語語学資格取得者データを用いてSGH教育プログラムの成果分析を試みる。

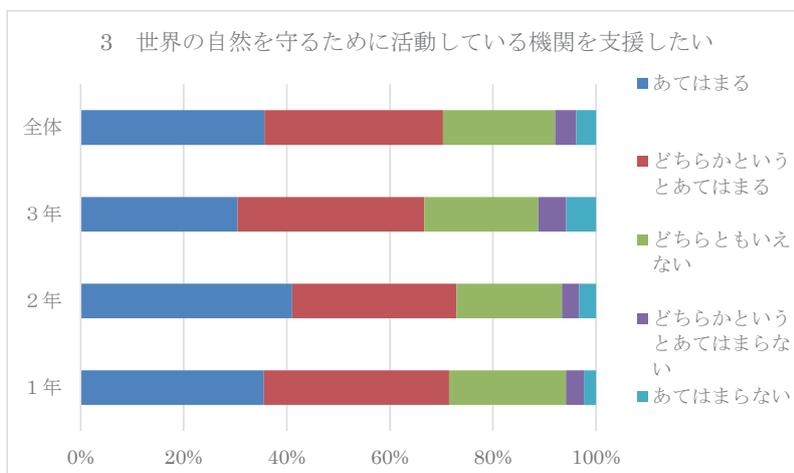
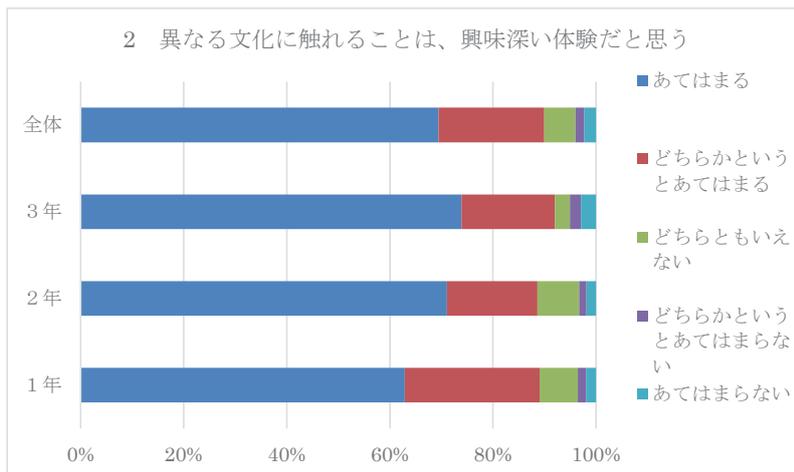
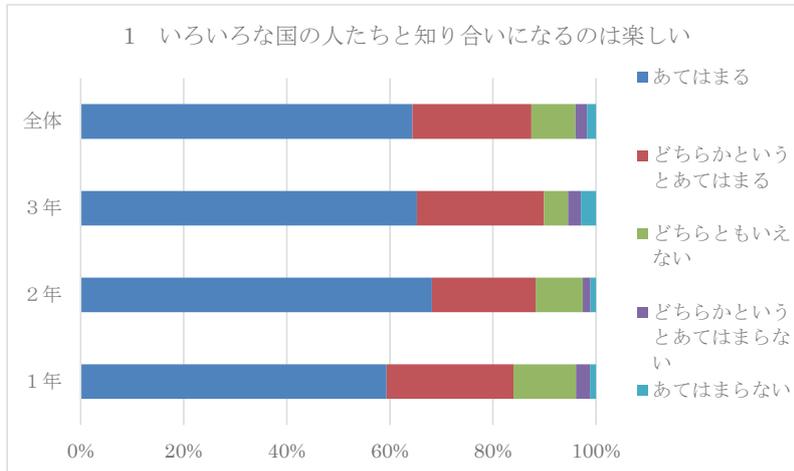
(アンケート結果を棒グラフで表現し、いくつかの解説を付記している)

A群 国際的な事項に対する考えについての質問 一定期間を家族と共に日本以外の国や地域で生活してきた三分の二の生徒とその影響を受けることを前提として本校に入学を希望した国内生徒の70%から80%は基本的にこれらの質問項目に肯定的な回答をしていることは自然な結果であると考えられる。

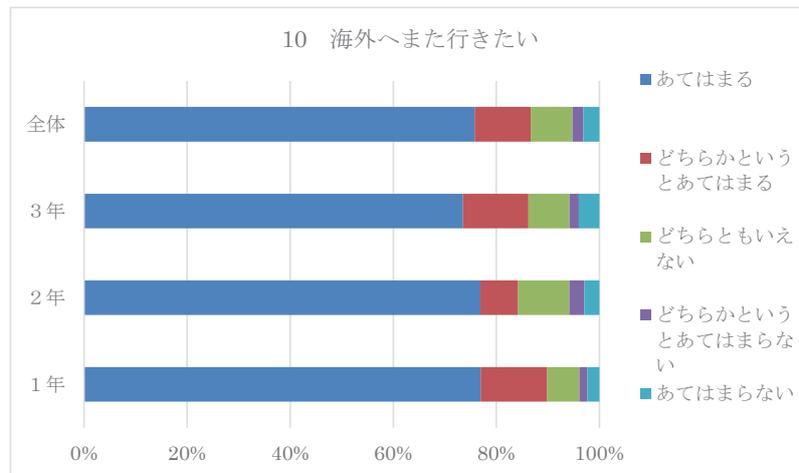
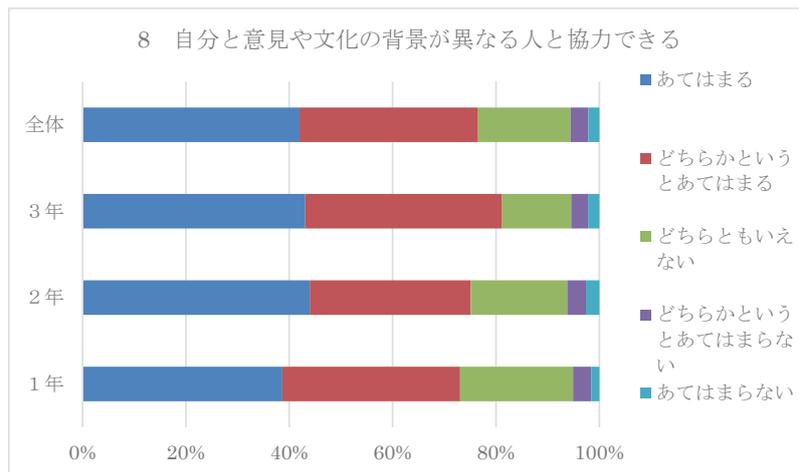
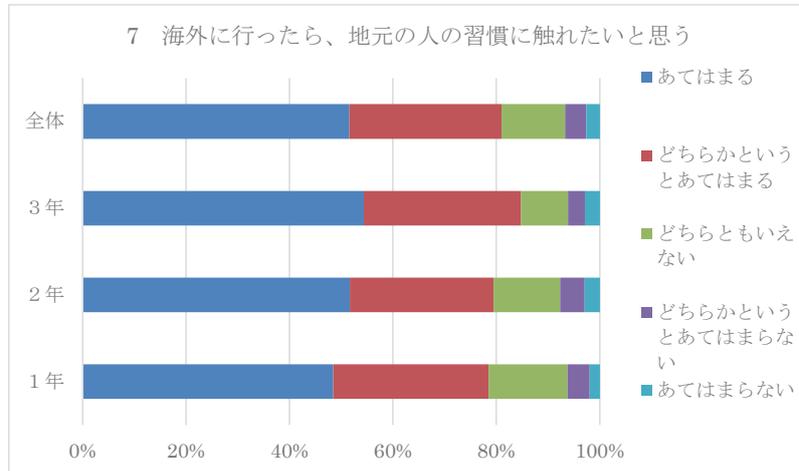
SGH科目との関連から概観すると、「2 異なる文化に触れることは、興味深い体験だと思う」「3 世界の自然を守るために活動している機関を支援したい」「11 開発途上国の子どもたちが教育の機会に恵まれるよう支援していきたい」をはじめとして、肯定的な回答が80%を超えている。「7 海外に行ったら

、地元の人々の習慣に触れたいと思う」「8 自分の意見や文化の背景が異なる人と協力できる」「15 他人の意見を聞ける」「23 困難に直面しても、人と協力して問題解決に取り組む」に関しては、「それまでの国家や地域、あるいは共同体の境を乗り越えて、誰もが参加でき。かつ誰もが従わなければならない普遍的な価値、旧来(それまでの)ローカルな社会を破棄するものとしてのグローバリズム」あるいは「多様性の理解と受容がグローバリズムに裏打ちされた共生」等の概念を生徒たちが定着させていることの証左であると考えられる

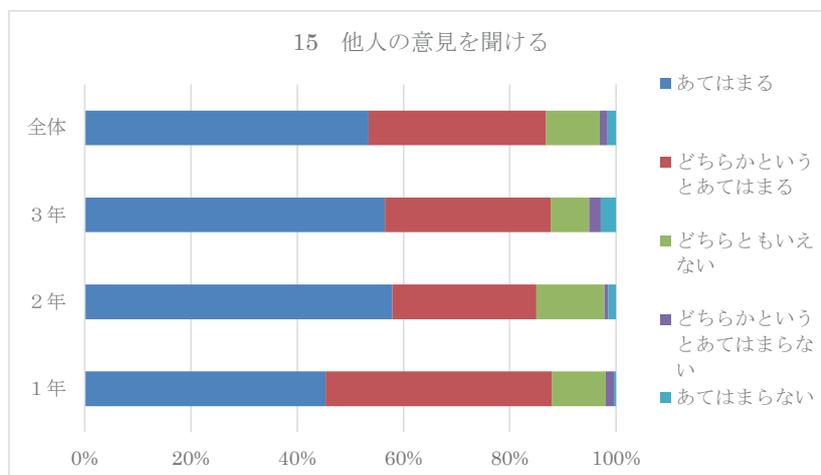
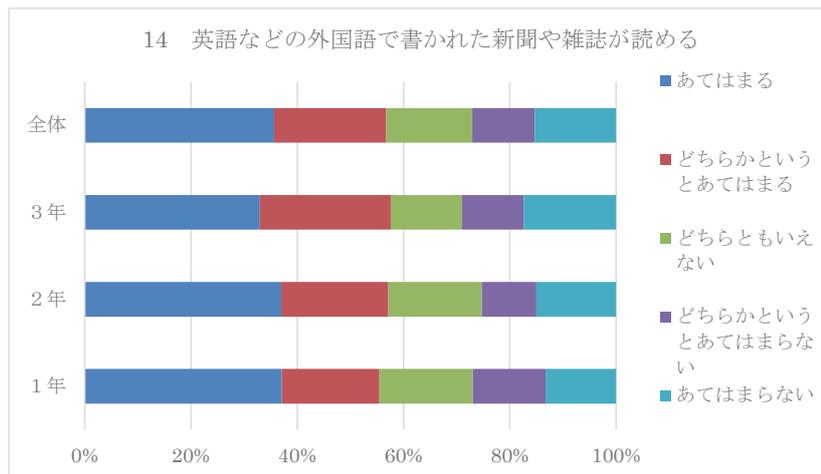
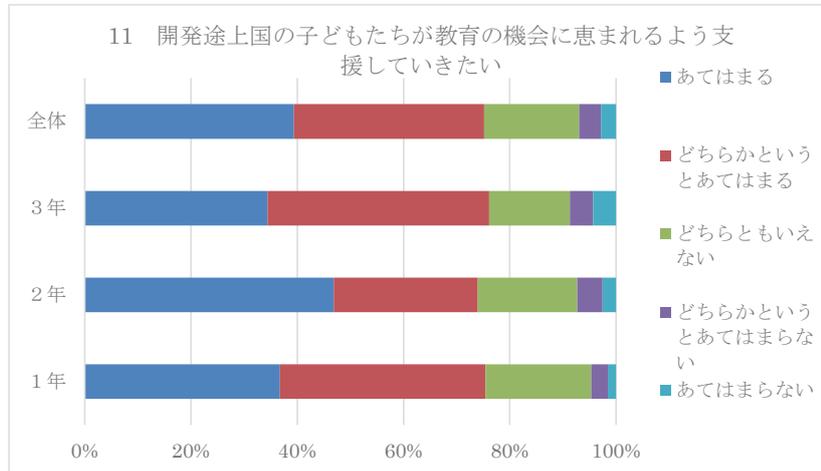
SGH「国際的資質や態度に関するアンケート」



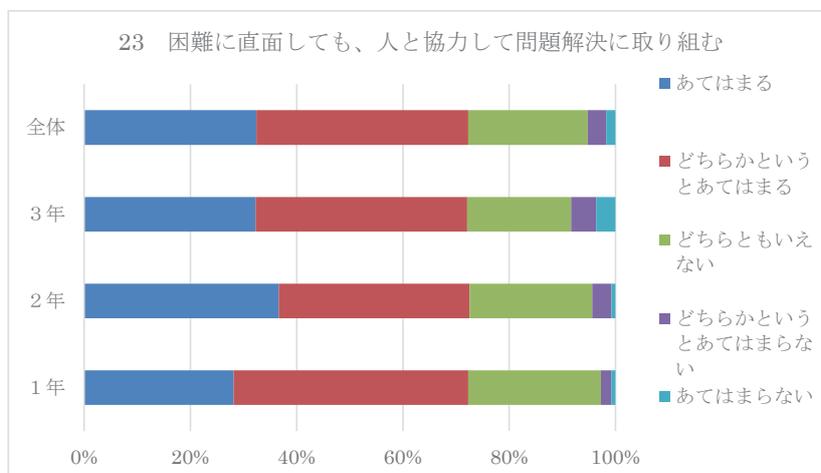
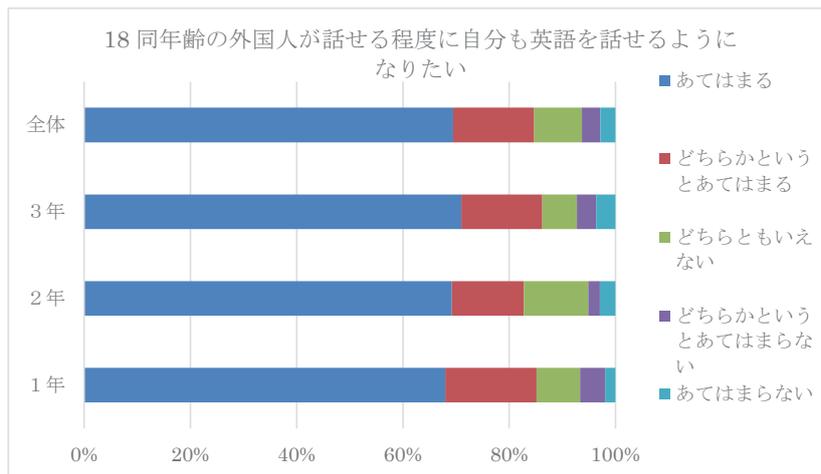
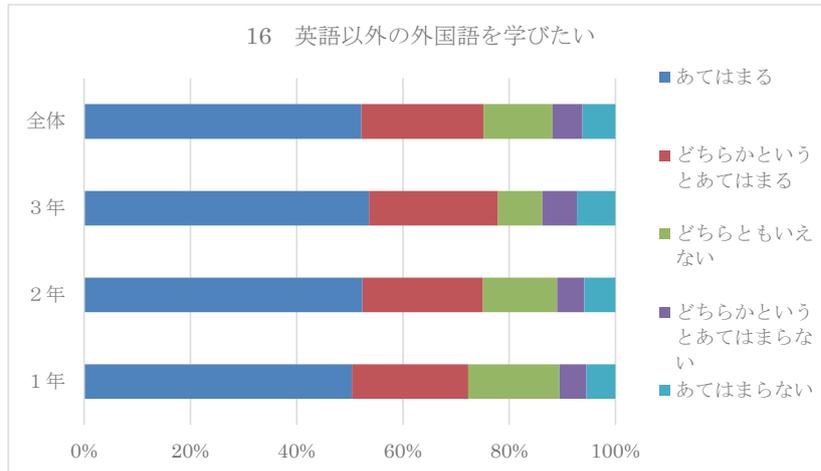
SGH「国際的資質や態度に関するアンケート」



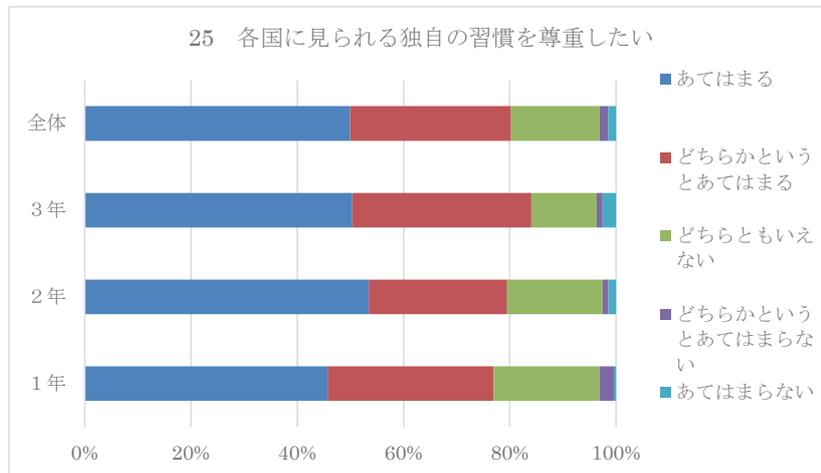
SGH「国際的資質や態度に関するアンケート」



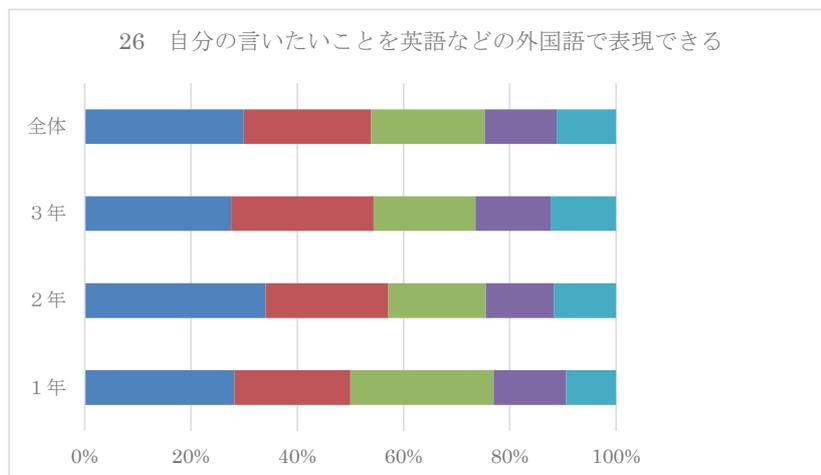
SGH「国際的資質や態度に関するアンケート」



SGH「国際的資質や態度に関するアンケート」



質問14「英語などの外国語で書かれた新聞や雑誌が読める」、また、質問26「自分の言いたいことを英語などの外国語で表現できる」の回答は他の項目に比べて低い自己肯定感しか示していない。これはD群質問8「自分の英語能力は、他の人と比べて優れていると思う」の回答と密接な関連があると考えられる。しかし、次に示すように、本校生徒の英語（他の言語についても同様）能力が極めて高い水準を示しているにも関わらず、必ずしもアンケートの自己評価と合致していない。その主な理由は、自他ともに相当の語学能力を保持していると思って入学してきた生徒たちが、自分よりも優れた能力を持つ生徒との出会いで、自己評価を下げざるを得ないということが理由のひとつとして挙げられるだろう。これは英語に限らず、全ての語学に共通している現象である。また、ツールとしての言語能力を十分に学習に活かさきれていない秀でたジレンマの表出でもありとも考えることができる。

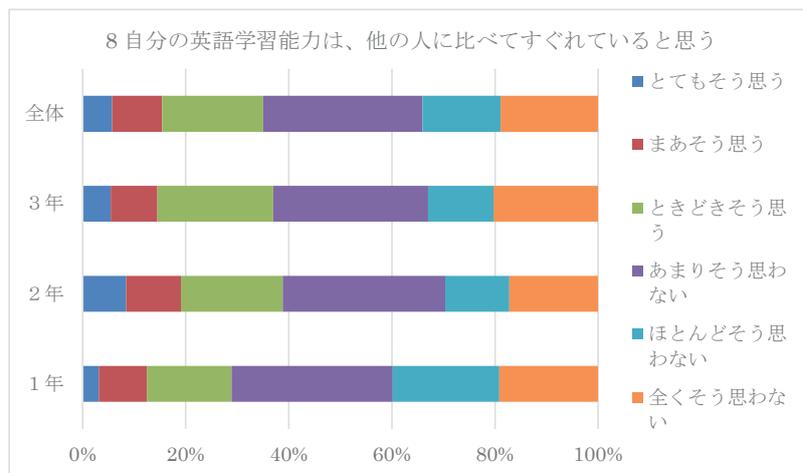


SGH「国際的資質や態度に関するアンケート」

【 語学資格データ 】 全校生徒数 1,259名 2018年度スコアー

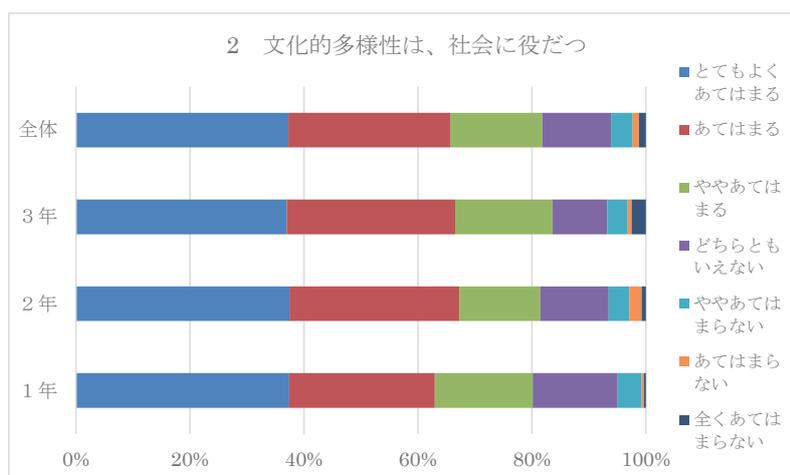
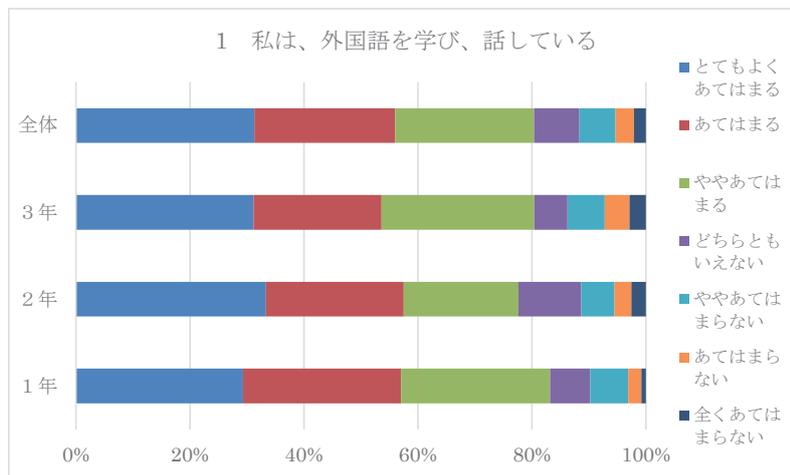
実用英語検定 1級 67名 準1級 233名 2級 326名 準2級 142名 3級以下 39名  
 ITP-TOEFL 630～15名 607～33名 590～28名 570～47名 550～77名 527～68名 507～64名  
 487～70名 471～45名 470未満 264名  
 iBT-TOEFL 111～120 7名 101～110 13名 91～100 21名 80～90 20名 80未満 19名  
 TOEIC-BRIDGE 160～ 2名 TOEIC-Junior 170～1名  
 ケンブリッジ大学英語検定試験 CAE 1名 FCE 3名 PET 4名 KET 1名  
 フランス語検定 準1級 3名 2級 5名 準2級 1名 3級 4名 4級 5名 5級 3名  
 DELF (フランス国民教育省認定フランス語資格試験) A1 2名 A2 2名 B1 1名 B2 1名  
 ドイツ語検定 3級 3名 4級 5名 5級 1名  
 GOETHE-INSTITUT B1 1名 B2 1名 A2 2名 A1 9名  
 スペイン語検定 3級 1名 4級 3名 5級 2名 6級 2名  
 イタリア語検定 1級 2名 2級 1名 準2級 1名  
 中国語検定 1級 1名 準1級 7名 2級 14名 準2級 1名 3級 18名 4級 9名 準4級 2名  
 HSK (漢語水平試験) 2級 2名 3級 5名 4級 7名 5級 6名 6級 30名  
 ハンデル語検定 2級 1名 3級 1名  
 韓国語能力試験 TOPIC 6級 3名 5級 3名

D 8 自分の英語学習能力は、他の人に比べてすぐれていると思う

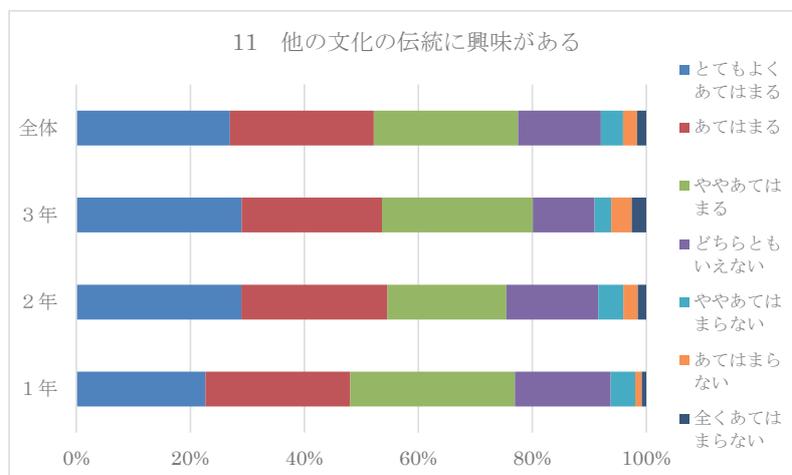
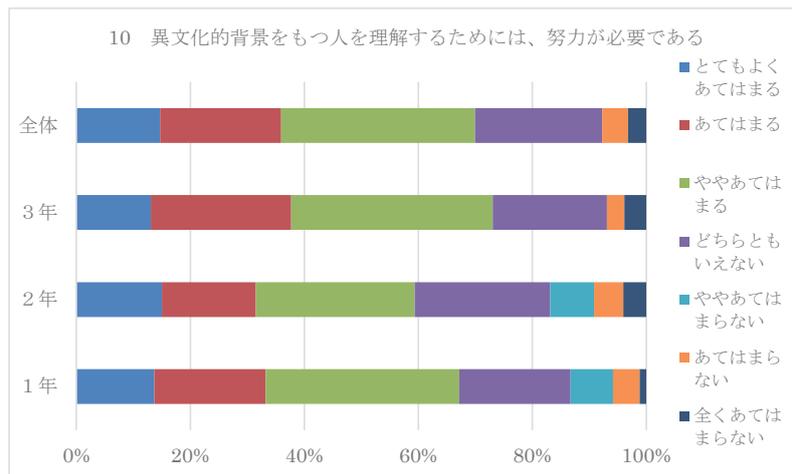
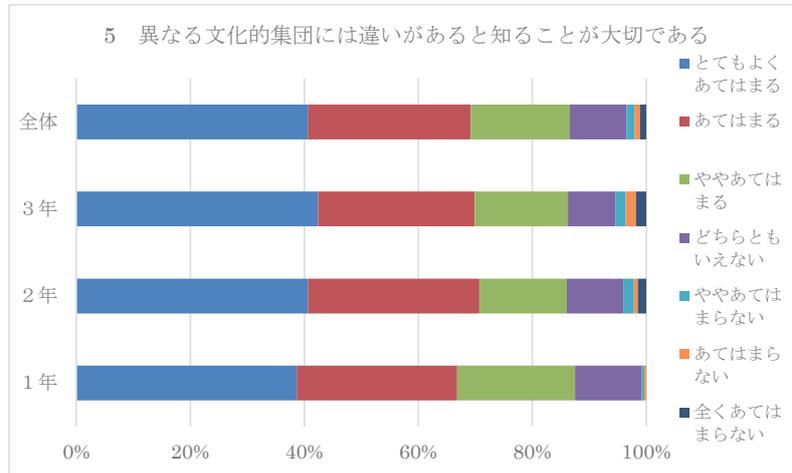


SGH「国際的資質や態度に関するアンケート」

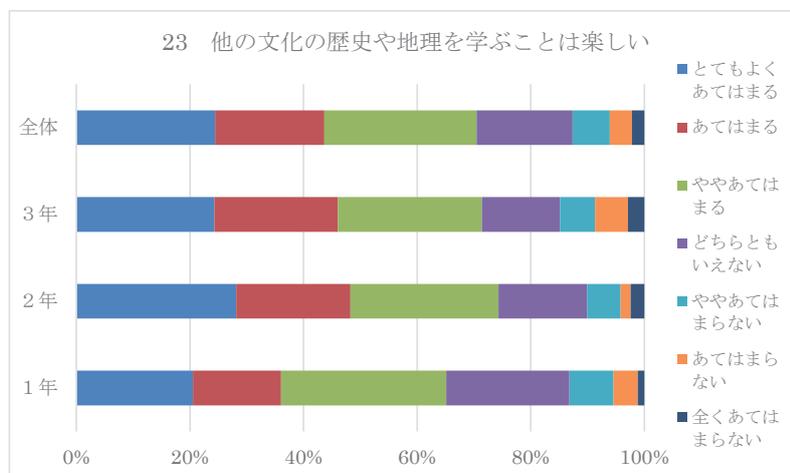
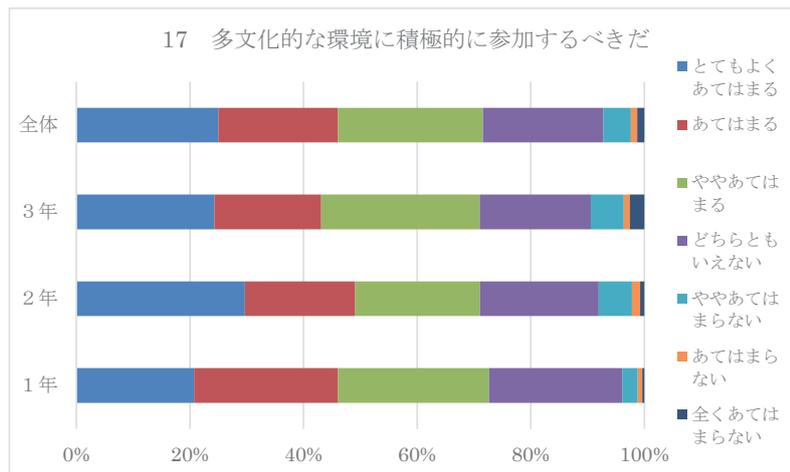
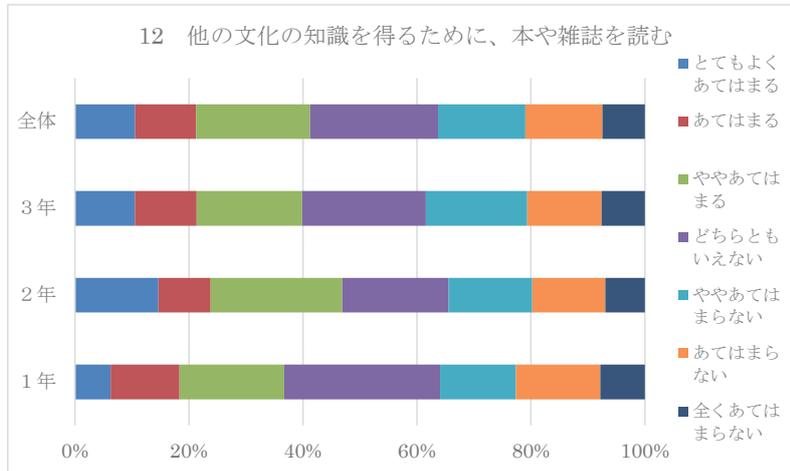
**B群 異文化、他文化に対するイメージ** この質問群に対しては、「1 2 他の文化の知識を得るために、本や雑誌を読む」について肯定的な回答が僅かに20%前後であるのに対して「2 3 他の文化の歴史や地理を学ぶことは楽しい」に関して肯定的な回答が半数前後であることとの関連性について考察する。これまでの実践を踏まえて考慮すると、少なくともSGH実施のために設置した科目に関しては、生徒の学び方が劇的に変化していると言える。つまり、図書館等を利用する従来型の「調べ学習」や読書などの「静的学習」ではなく、少人数によるグループ学習や多様な視聴覚メディアを縦横に利用する学び方にシフトしていると言える。文献媒体での従来型の学びが重要な意味を持っていることは論を俟たないが、後期中等教育において、過度に緻密な論証を要求することは日常的学習を妨げることになりかねない。また、指導者が期待する結果を意識して、WEB等を用いた情報収集や優良な先行研究の無批判な引用、あるいは剽窃を誘引することになる可能性も否めない。



SGH「国際的資質や態度に関するアンケート」

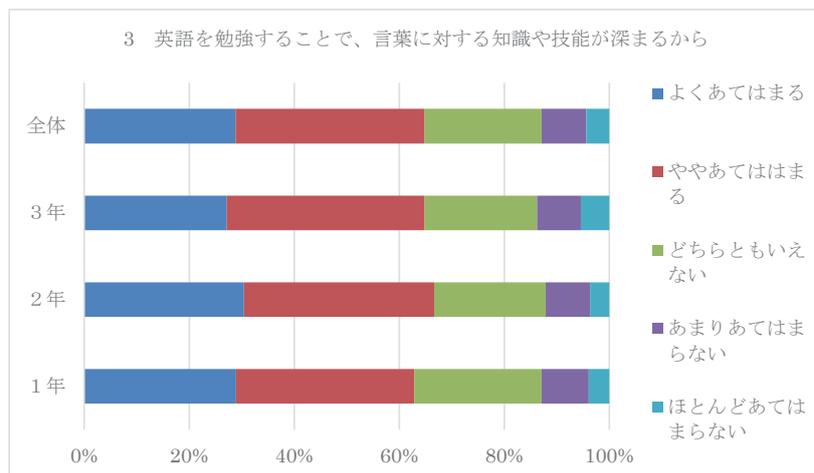
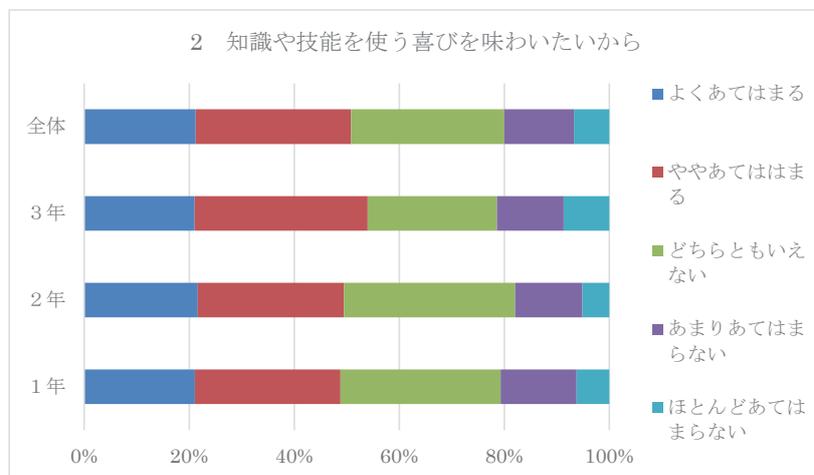


SGH 「国際的資質や態度に関するアンケート」

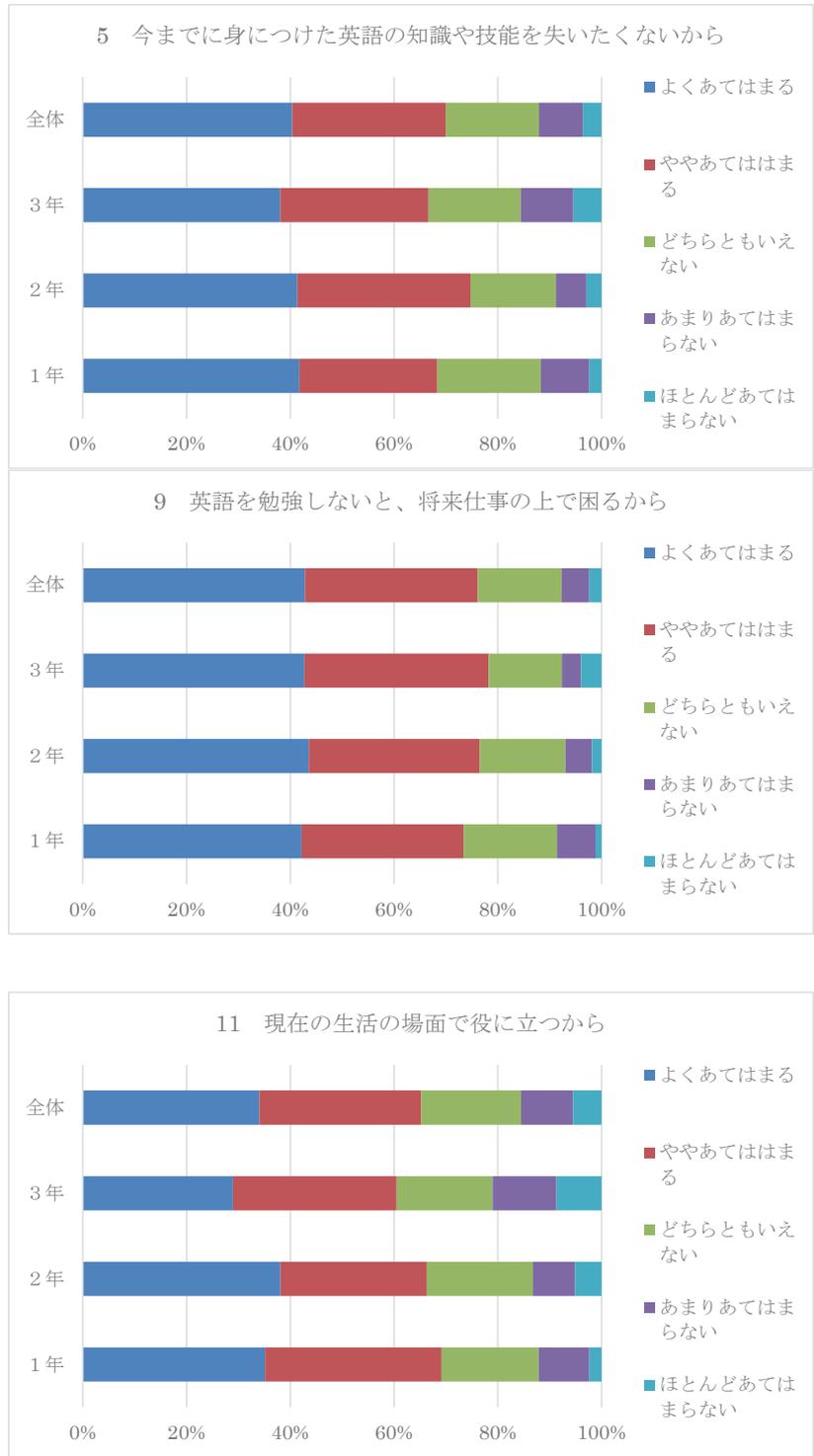


SGH「国際的資質や態度に関するアンケート」

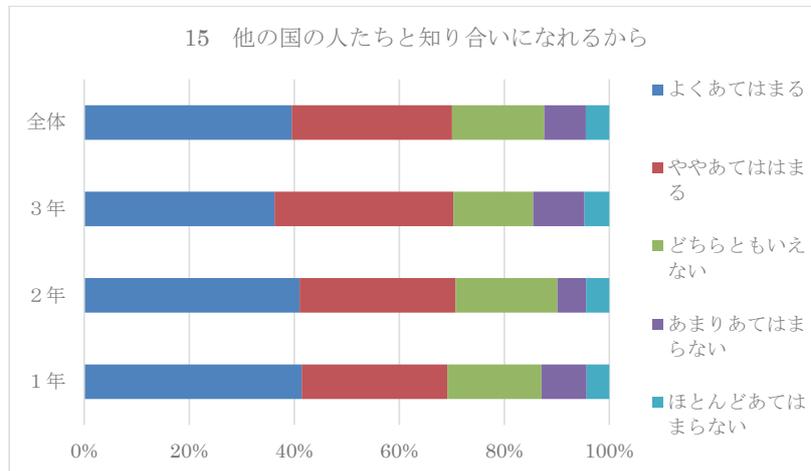
C 群 あなたが英語を学ぶ理由について 「3 英語を勉強することで、言葉に対する知識や技能が深まるから」「5 今までに身につけた英語の知識や技能を失いたくないから」「11 現在の生活の場面で役に立つから」「15 他の国の人たちと知り合いになれるから」これらの質問に対して70%以上の肯定的回答が得られた要因は本校の生徒構成に起因していることは当然と言える。また、「9 英語を勉強しないと、将来仕事の上で困るから」が80%前後の高い肯定的回答となるのは、保護者と帯同した子どもたちの生活実感と語学教育の動機付けが大きく作用しているように思われる。



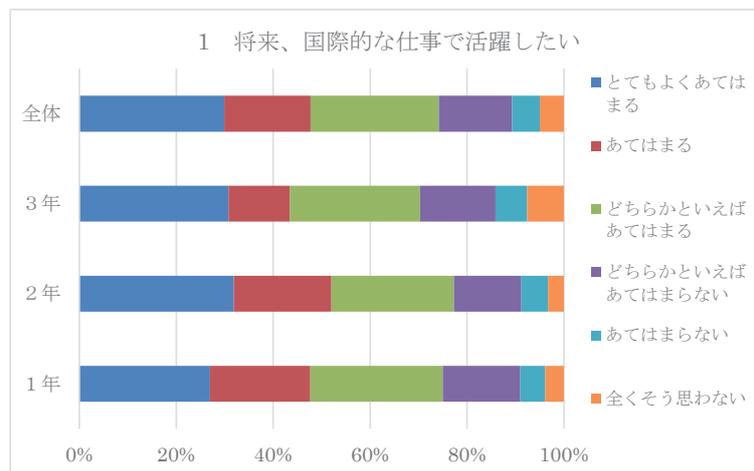
SGH「国際的資質や態度に関するアンケート」



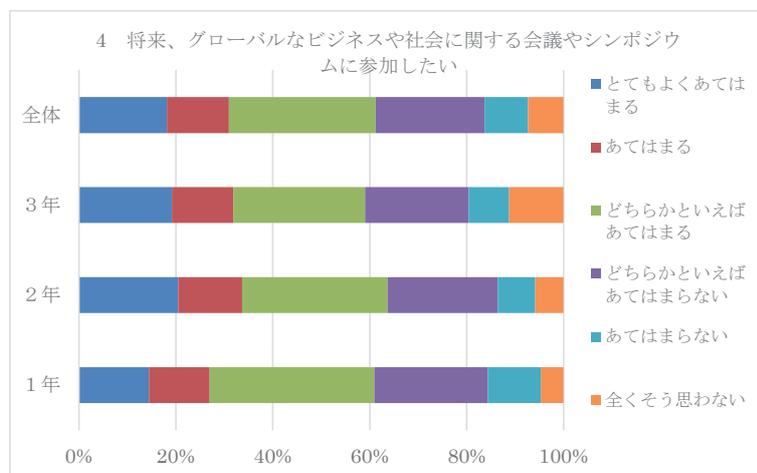
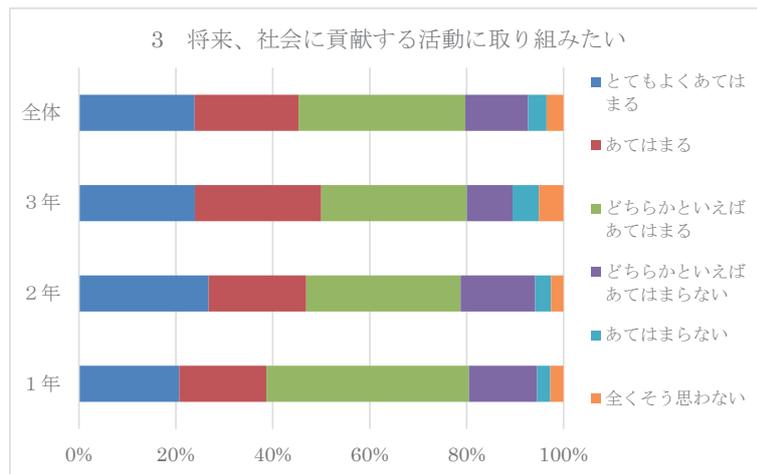
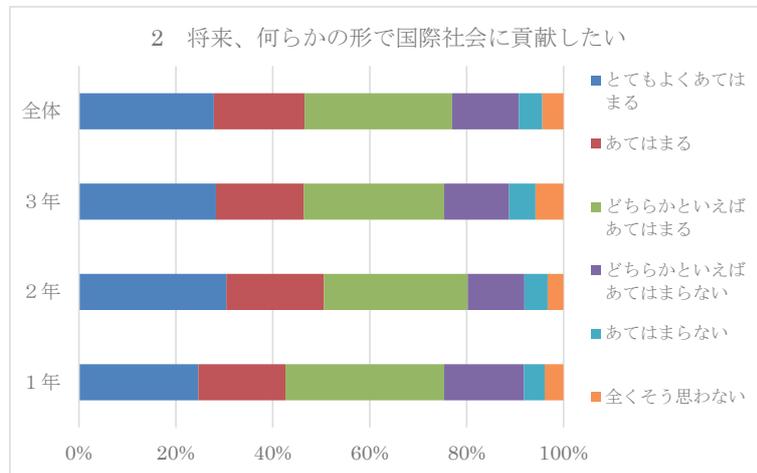
SGH「国際的資質や態度に関するアンケート」



E 群 あなたは、将来的に以下のようなことをどのくらいやってみたいと思いますか。これらの項目に対する肯定的な回答が半数に留まっていることは予想外だった。特に「4 将来、グローバルなビジネスや社会に関する会議やシンポジウムに参加したい」という設問に対しては2年生にピークが見られるほかは他の関連設問と比較して極めて低い肯定的態度を示している。「具体的な社会活動」としては国際的な働きをしたいが、学びの場を求める会議やシンポジウムにはさほど興味がないということか、机上の学習を敬遠する回答のB群12との関連でさらに要因を推理する必要がある。

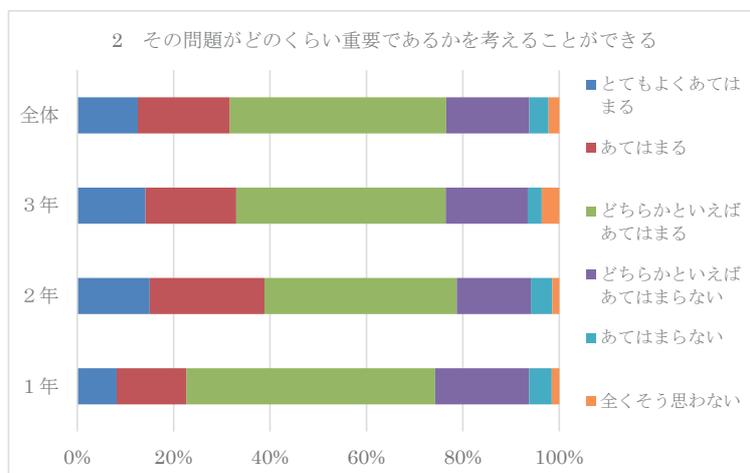
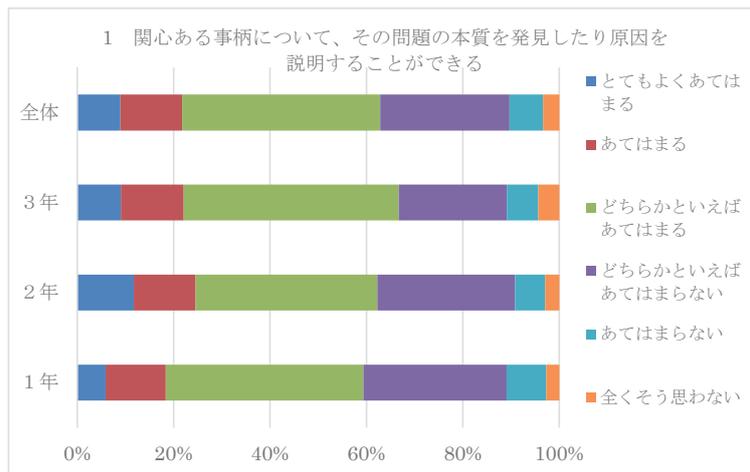


SGH「国際的資質や態度に関するアンケート」

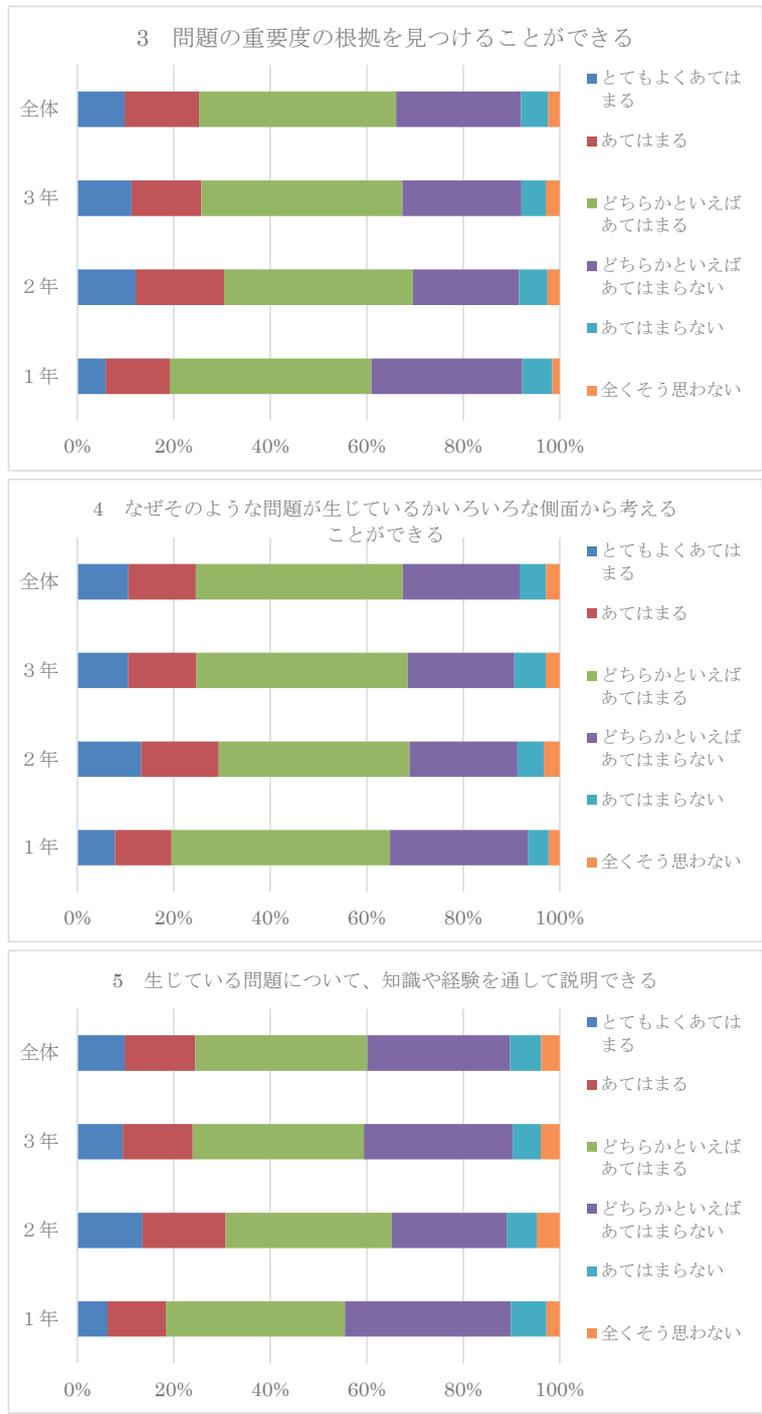


SGH「国際的資質や態度に関するアンケート」

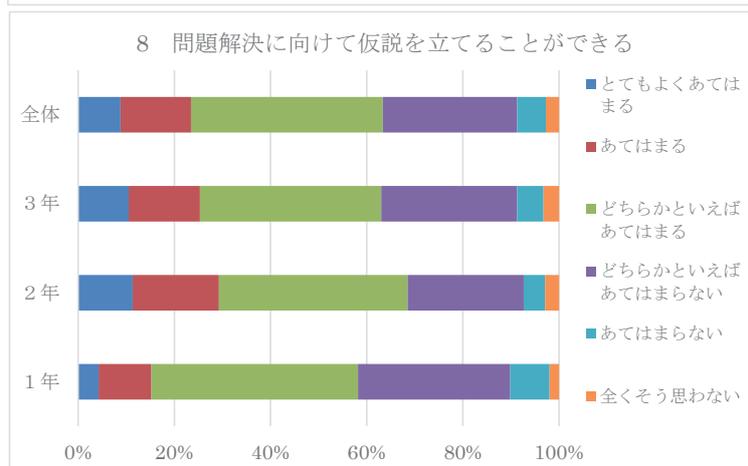
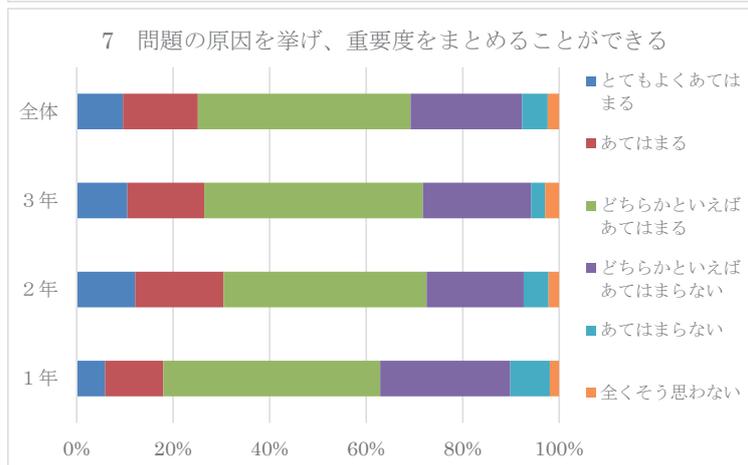
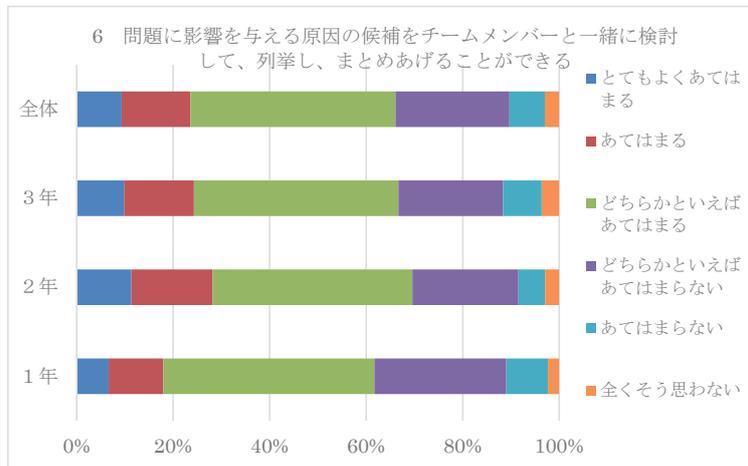
F 群 社会で起きるさまざまな問題に対する解決方法を見つけるために、あなたはどのくらい以下の方法を用いることができますか。多くの質問項目について、ほぼ学年進行に比例して肯定的回答がなされている。SGH 指定校として事業目的が浸透していくプロセスと見ることはできないか。「グローバルな社会課題を発見・解決し、様々な国際舞台で活躍できる人材（国際機関職員、社会企業家、グローバル企業の経営者、政治家、研究者等）の輩出口急速にグローバル化が加速する現状を踏まえ、社会課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を身に付け、将来、国際的に活躍できるグローバル・リーダーを高等学校段階から育成する。」という事業趣旨が SGH 指定校としての特別な科目設置と多様な授業手法、多くのアウトソーシング、フィールドワークなどを通して生徒に SGH 事業の趣旨が結実しているエビデンスのひとつである。「とてもよくあてはまる」「あてはまる」が 20%前後留まっているのは、学習が継続していることが理由であり、学習成果が数字や成果物として明確ではないが「学びの実感がある」という意味で「どちらかといえばあてはまる」に全体の 40% の回答が集まっている要因と考えられる。これは、生徒たちが自己を粉飾することなく誠実に自らを評価した結果である。



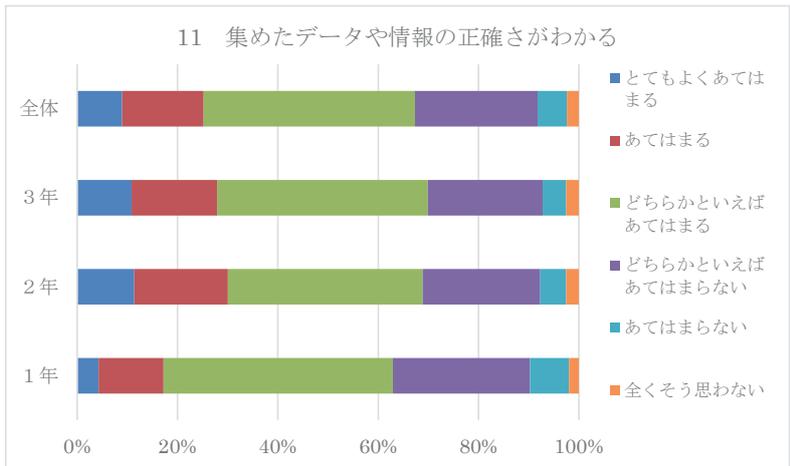
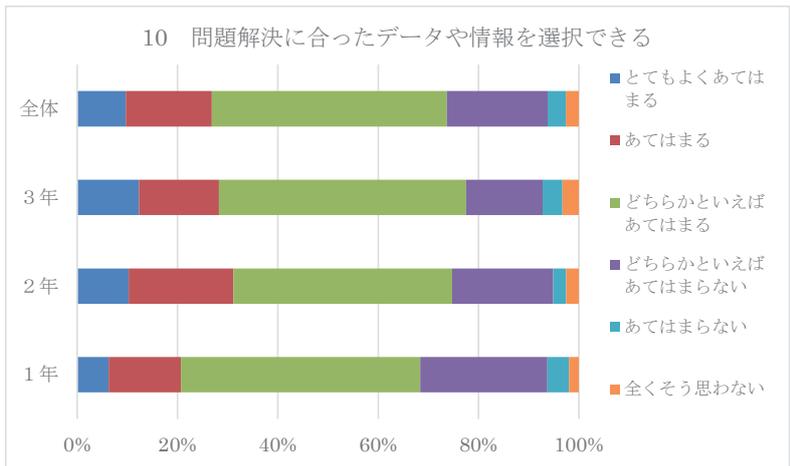
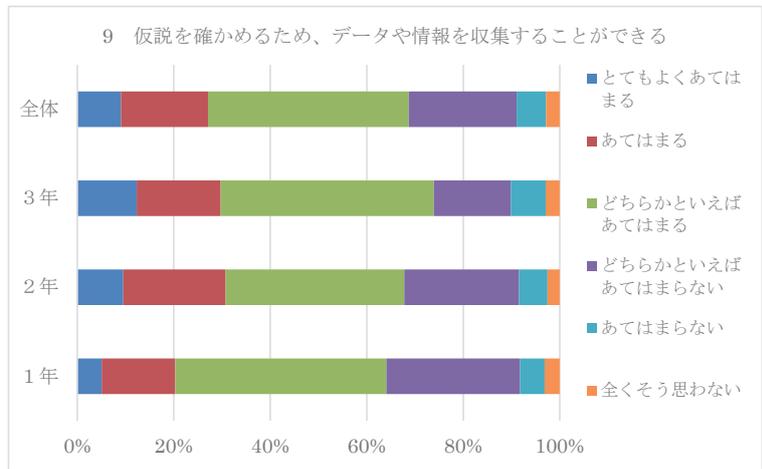
SGH「国際的資質や態度に関するアンケート」



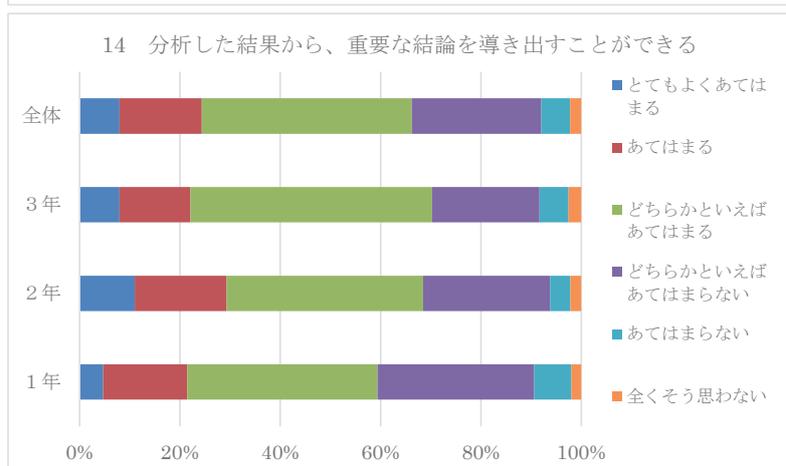
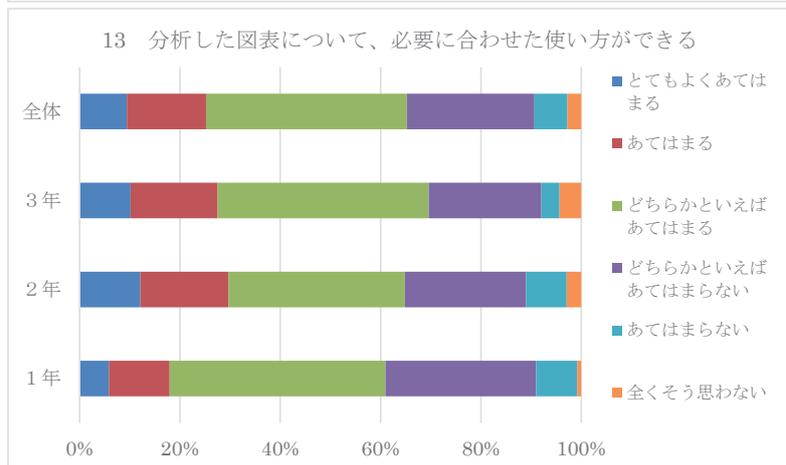
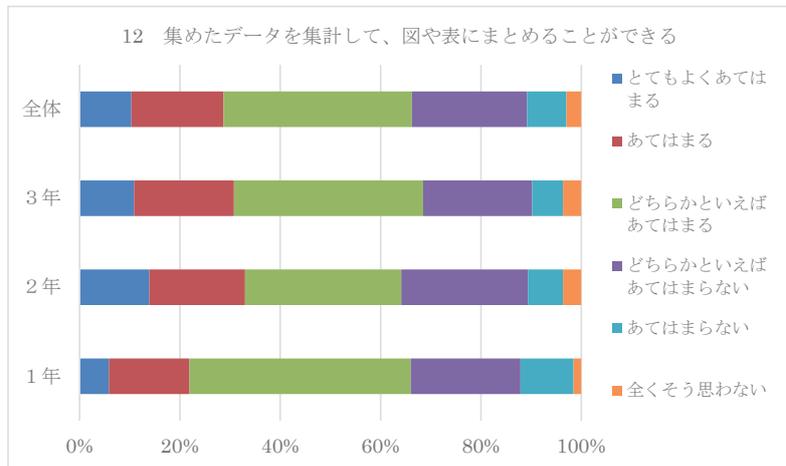
SGH「国際的資質や態度に関するアンケート」



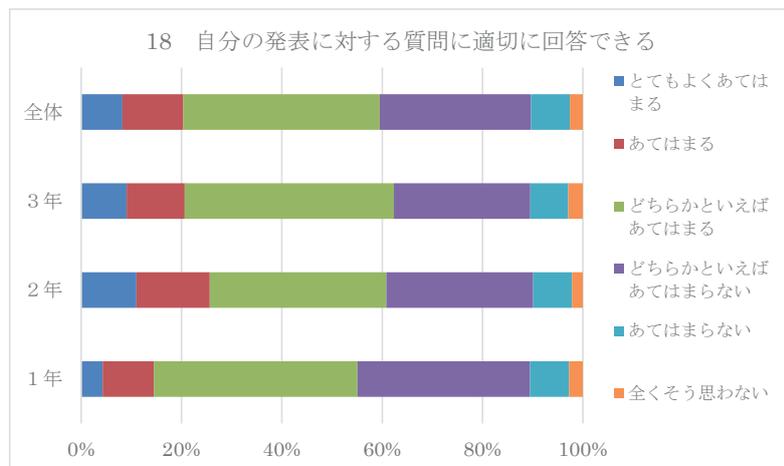
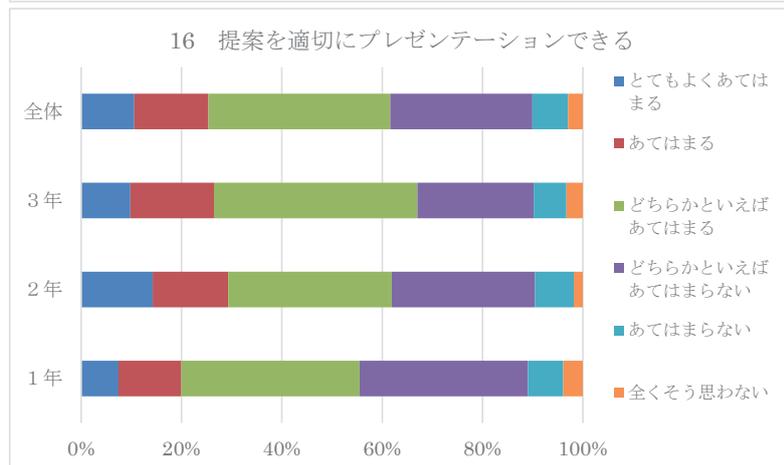
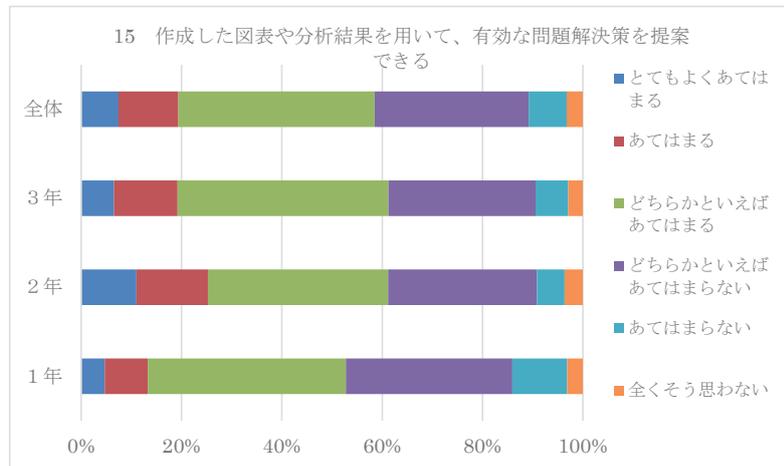
SGH「国際的資質や態度に関するアンケート」



SGH「国際的資質や態度に関するアンケート」



SGH「国際的資質や態度に関するアンケート」





---

2018年度(平成30年度)第4年次  
スーパーグローバルハイスクール  
研究開発報告書

2019年3月15日発行

発行 同志社国際高等学校  
編集 SGH研究開発実行委員会  
印刷 有限会社木村桂文社

---

